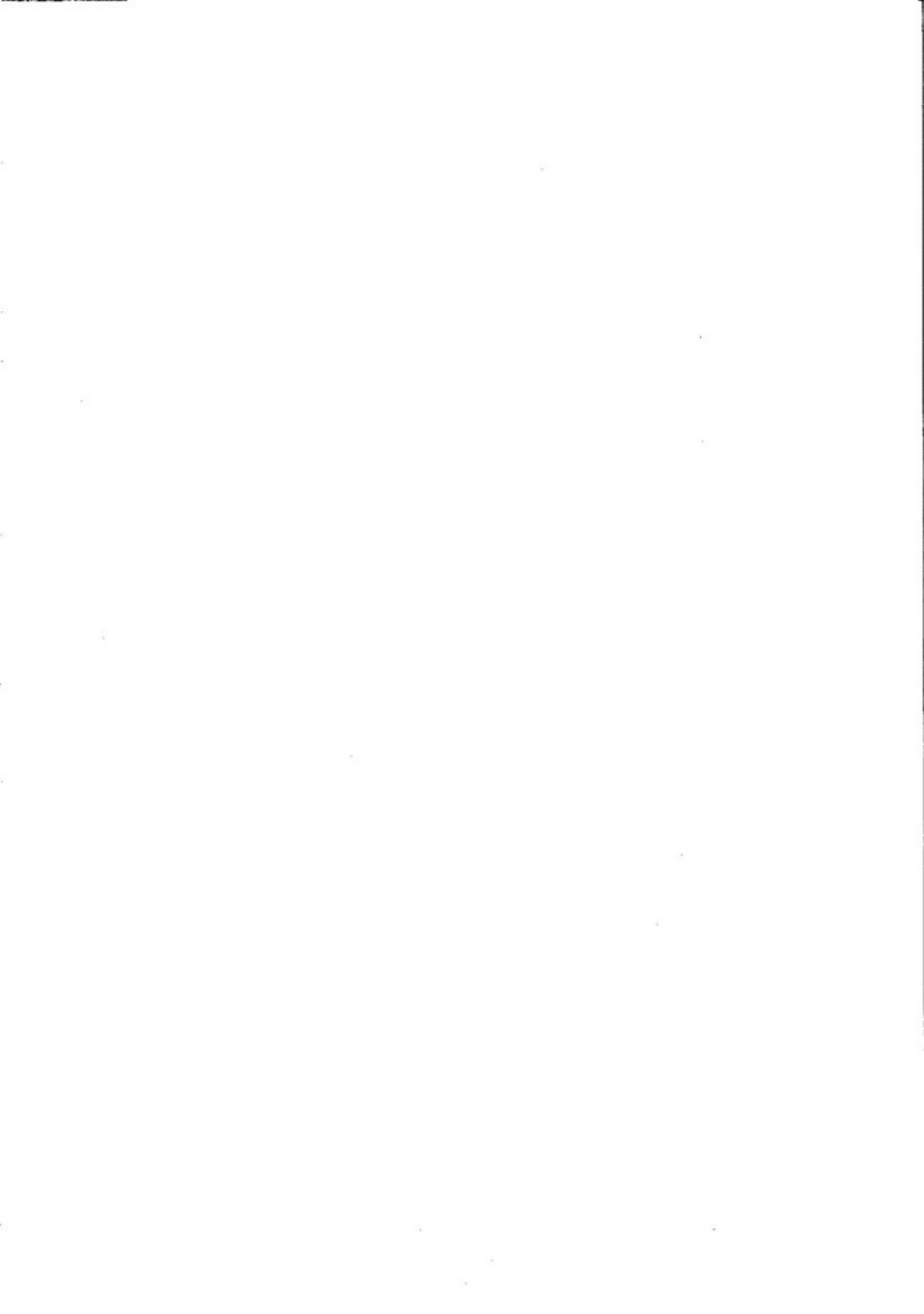


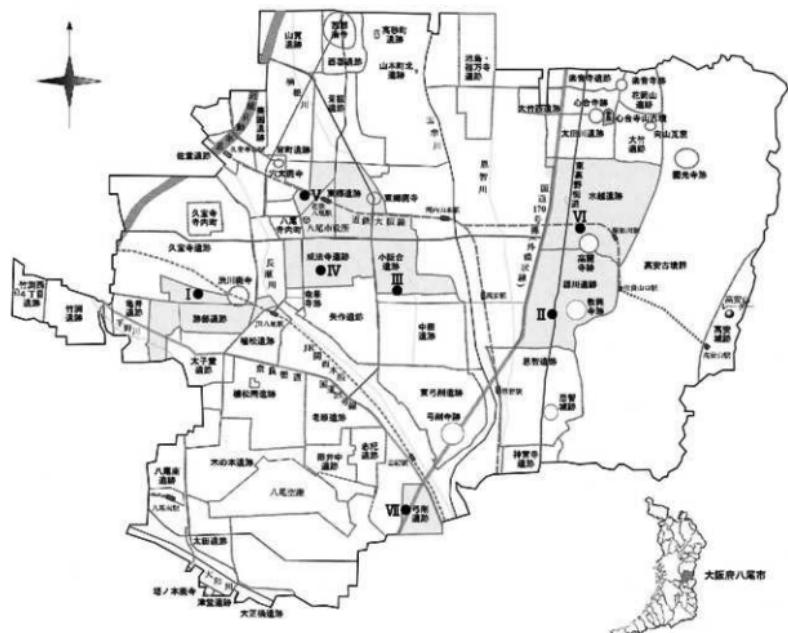
- I 跡部遺跡(第41次調査)
- II 郡川遺跡(第11次調査)
- III 小阪台遺跡(第44次調査)
- IV 成法寺遺跡(第22次調査)
- V 東郷遺跡(第70次調査)
- VI 水越遺跡(第8次調査)
- VII 弓削遺跡(第11次調査)

2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



- I 跡部遺跡(第41次調査)
- II 郡川遺跡(第11次調査)
- III 小阪合遺跡(第44次調査)
- IV 成法寺遺跡(第22次調査)
- V 東郷遺跡(第70次調査)
- VI 水越遺跡(第8次調査)
- VII 弓削遺跡(第11次調査)



2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の東部に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡る人々の生活の痕跡が点在するほか、生駒山地西麓には全国的にも知られる古墳時代後期の群集墳「高安古墳群」が形成されています。また平野部には、古大和川水系が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に、縄文時代以降の生活の跡が連続と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといつても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は平成17・19～22年度に行った民間の開発に伴う7件の発掘調査の報告をまとめたものです。主な成果としては、郡川遺跡第11次・水越遺跡第8次では弥生時代、小阪合遺跡第44次では古墳時代、東郷遺跡第70次では中世を中心とした集落が検出されており、東郷遺跡70次調査での密集する井戸群は特筆されます。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成17・19~22年度に実施した、民間開発に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成23年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I 木村健明、II・III・V～VII 坪田真一、IV 高萩千秋で、全体の構成・編集は坪田が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成22年度版)をもとに作成した。
 1. 本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
 1. 本書で用いた方位は磁北、又は座標北(国土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
 1. 遺構名は下記の略号で示した。
井戸 - SE 土坑 - SK 溝 - SD ピット - SP 落込み - SO 自然河川 - NR
1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他が白を基調とした。
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I	跡部遺跡 第41次調査(AT2008-41).....	1
II	郡川遺跡 第11次調査(KR2010-11).....	11
III	小阪合遺跡 第44次調査(KS2009-44).....	19
IV	成法寺遺跡 第22次調査(SH2010-22).....	31
V	東郷遺跡 第70次調査(TG2007-70).....	39
VI	水越遺跡 第8次調査(MK2005-8).....	65
VII	弓削遺跡 第11次調査(YGE2010-11).....	77

報告書抄録

I 跡部遺跡第41次調査(A T 2008-41)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市跡部北の町一丁目5～9で実施した工場建替え工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第41次調査(AT2008-41)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成21年2月23日～平成21年3月4日(実働8日)に、木村健明を調査担当者として実施した。調査面積は約200m²である。
1. 現地調査においては、飯塚直世・竹田貴子・田島宣子・中野一博の参加を得た。
1. 本書作成に関わる内業整理は、遺物実測－中野、遺物トレース－市森千恵子、その他－木村が行い、平成23年3月をもって終了した。
1. 本書の執筆は木村が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査概要.....	3
第1節 調査の方法と経過.....	3
第2節 基本層序.....	5
第3節 検出遺構と出土遺物.....	6
第3章 まとめ.....	9

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図.....	1
第2図 調査区地区割図.....	3
第3図 土層断面図.....	4
第4図 第1面平面図.....	5
第5図 第1面平面図.....	7
第6図 造構断面図.....	7
第7図 出土遺物実測図.....	8

表 目 次

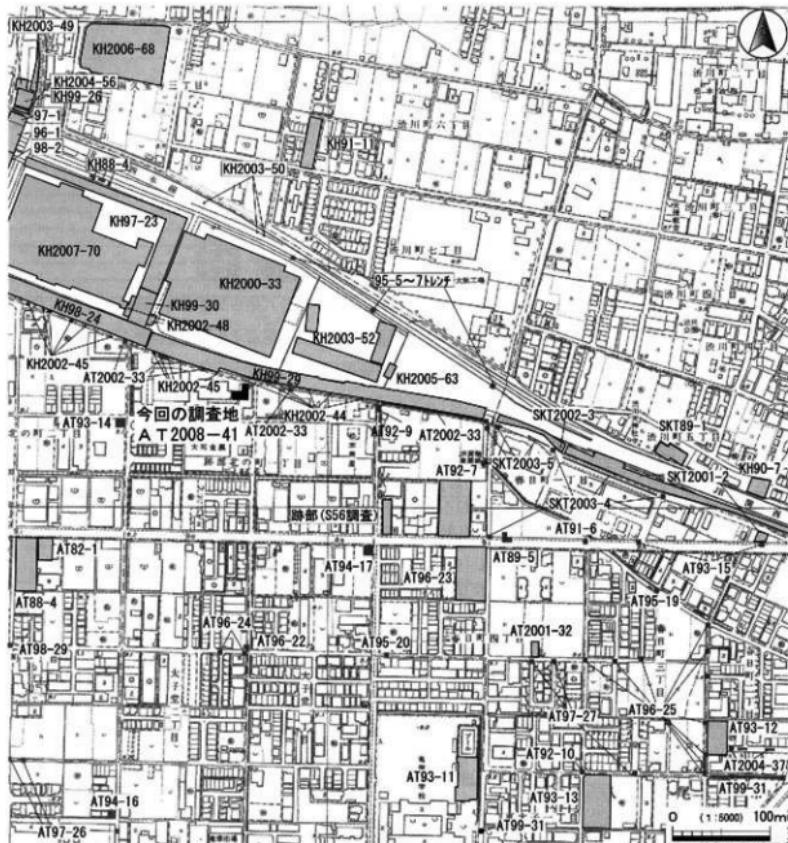
表1 周辺の調査一覧表.....	2
表2 第1面造構一覧表.....	6
表3 第2面造構一覧表.....	6

図 版 目 次

図版1 東壁	南壁	下層確認トレンチ南壁
図版2 第1面全景(南東から)	第2面全景(南東から)	
図版3 出土遺物 SD101・202、3層	側溝	

第1章 はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に所在する弥生時代前期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、跡部本町一～四丁目、跡部北の町一、二丁目、跡部南の町一、二丁目、春日町一～四丁目、太子堂一・二丁目、東太子一丁目、安中町三丁目にわたる東西約1.4km、南北約0.5～1.0kmがその範囲とされている。地理的には、河内平野南部の北寄りに位置し、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。当遺跡の北側に久宝寺遺跡・渋川廃寺、東側に植松遺跡、南側に太子堂遺跡、西側に亀井遺跡が隣接する。



第1図 調査位置図

第1表 周辺の調査一覧

		次数	調査年(西暦)	面積(㎡)	文 獻
跡部遺跡 (A-T)	S 56	1981	92	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書1980・1981年度】1983 八尾市教育委員会	
	1	1982	50	【昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査-その成果と概要】1983 研究会	
	4	1988	300	【八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度】(財)八尾市文化財調査研究会報告	
	5	1989	70	【跡部遺跡発掘調査報告書】(財)八尾市文化財調査研究会報告31 1991 研究会	
	6	1991	16	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告】(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992 研究会	
	7	1992	220	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告】(財)八尾市文化財調査研究会報告39 1993	
	9	1992	20	研究会	
	10	1993	28	【(財)八尾市文化財調査研究会報告58】 1997 研究会	
	11	1993	380		
	12	1993	245	【平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告】1994 研究会	
	13	1993	348		
	14	1993	38	【(財)八尾市文化財調査研究会報告42】 1994 研究会	
	15	1993	34		
	16	1994	43.5	【(財)八尾市文化財調査研究会報告58】 1997 研究会	
	17	1994	43.5		
	19	1995	17	【(財)八尾市文化財調査研究会報告53】 1996 研究会	
	20	1995	23		
	22	1996	33	【(財)八尾市文化財調査研究会報告60】 1998 研究会	
	23	1996	308	【(財)八尾市文化財調査研究会報告81】 2004 研究会	
	24	1996	8	【(財)八尾市文化財調査研究会報告60】 1998 研究会	
	25	1997	116		
	26	1997	16	【(財)八尾市文化財調査研究会報告62】 1999 研究会	
	27	1997	20		
	29	1998	15	【(財)八尾市文化財調査研究会報告65】 2000 研究会	
	31	1999	117	【(財)八尾市文化財調査研究会報告67】 2001 研究会	
	32	2001	73	【(財)八尾市文化財調査研究会報告76】 2003 研究会	
	33	2002	142	【(財)八尾市文化財調査研究会報告75】 2003 研究会	
	37	2004	18.25	【(財)八尾市文化財調査研究会報告86】 2006 研究会	
	41	2009	200	本書	
久宝寺遺跡 (K-H)	4	1990	87	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ】(財)八尾市文化財調査研究会報告41 1993 研究会	
	7	1990	54	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告】(財)八尾市文化財調査研究会報告32 1991 研究会	
	11	1991	100	【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告】(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992 研究会	
	23	1997	7720	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告89 2006 研究会	
	24	1998	6,269	【久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書】(財)八尾市文化財調査研究会報告69 2001 研究会	
	26	1999	309	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告70 2002 研究会	
	29	1999	4,910	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告74 2003 研究会	
	30	1999	893	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告89 2006 研究会	
	33	2000	11,165	【平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告】2001 研究会	
	44	2002	55	【(財)八尾市文化財調査研究会報告76】 2003 研究会	
	45	2002	71		
	48	2002	55	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告83 2005 研究会	
	49	2003	120		
	50	2003	12	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告89 2006 研究会	
	52	2003	2,275	【平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告】2004 研究会	
	56	2004	267	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告83 2005 研究会	
	63	2005	94	【久宝寺遺跡】(財)八尾市文化財調査研究会報告89 2006 研究会	
	68	2006	1,247	【平成18年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告】2007 研究会	
	70	2006	11,900	【平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告】2008 研究会	
浅川廃寺 (S-K)	95-5 ~7	1995 1996	189 552	【久宝寺遺跡・竪革地区発掘調査報告書】(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第5集 1996 センター	
	96-1 97-1	1996 1997	173	【久宝寺遺跡・竪革地区発掘調査報告書Ⅱ】(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第26集 1998 センター	
	98-1 1-2	1998	2,103	【久宝寺遺跡・竪革地区発掘調査報告書Ⅲ】(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第60集 2001 センター	
	1	1989	350		
	2	2001	1,970	【浅川廃寺】(財)八尾市文化財調査研究会報告79 2004 研究会	
	3	2002	460		
	4	2003	123	【(財)八尾市文化財調査研究会報告78】 2004 研究会	
	5	2003	41	【(財)八尾市文化財調査研究会報告82】 2005 研究会	

*文献発行元 研究会→(財)八尾市文化財調査研究会
センター→(財)大阪府文化財調査研究センター

当遺跡は、昭和53年に春日町一丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際、弥生土器や鎌倉時代の瓦が出土したことにより、その存在が確認された。以後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって発掘調査が実施されてきている。特に当調査研究会第5次調査では、埋納状態を保った銅鐸が出土している。

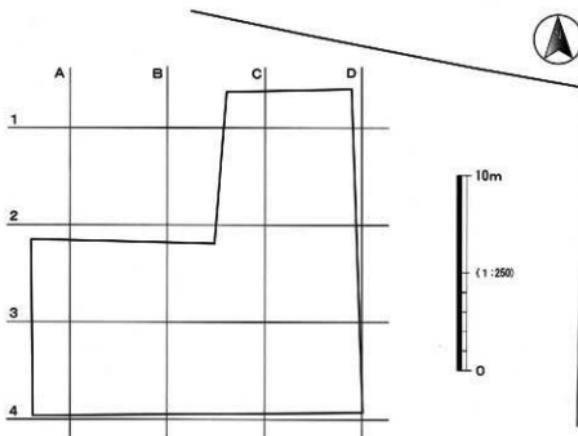
また今回の調査地の北側は久宝寺遺跡の範囲となっており、旧国鉄竜華操車場跡地内の土地区画整理事業に伴って大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって発掘調査が実施され、古墳時代前期の墓域などが検出されている。

第2章 調査概要

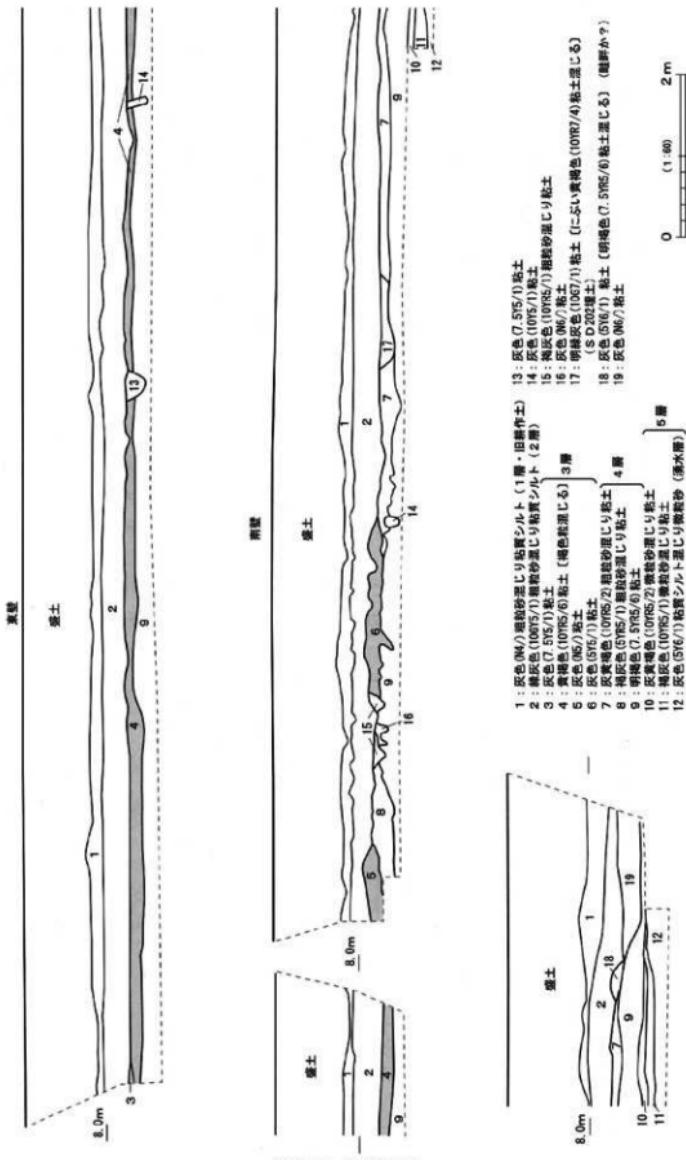
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、平成21年2月4・5日に実施した遺構確認調査〈跡部遺跡(2008-347)〉の結果を受けて実施した工場建替え工事に伴う調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で行った第41次調査である。調査対象範囲は、工場建設の基礎工事によって破壊される範囲の内、遺構確認調査で遺物が多く出土した地点を中心に設定された。調査区は平面形が「L」字形を呈し、調査面積は200m²である。

地区割は北西隅に設定した任意の点を基に5m四方のメッシュで割り付けた(第2図)。掘削は現地表下1.2mまでを機械掘削、それ以下の20cmを人力掘削によって調査を行った。



第2図 調査区地区割図



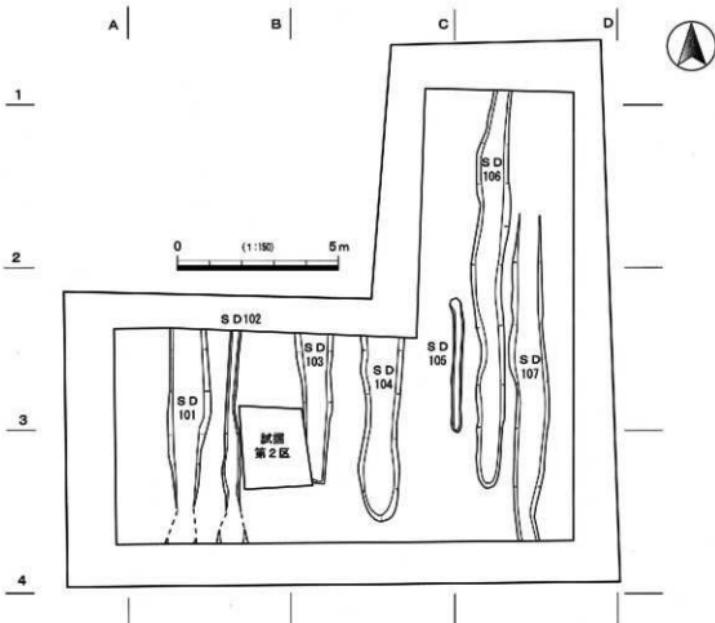
第3図 土層断面図

調査面は機械掘削終了後に検出した面を「第1面」と呼称し、上から順に調査面番号を付した。また第2面の調査終了後、調査区西端に3m×3mの下層確認トレンチを設定し、掘削を行った。遺構名は遺構略号・遺構検出面・遺構番号の組み合わせで表している。(例、SD103→第1面で検出した3番目の溝の意味)

第2節 基本層序

今回の調査地は、工場として利用されており、1.0mの盛土がなされており、その下に旧耕作土が存在する。基本層序として5層を確認した。

- 1層 旧耕作土である。層厚は10~20cmを測る。
- 2層 近世頃の耕作土と思われる緑灰色を呈する粘質シルト層である。この層まで機械掘削を行った。層厚は20~30cm程度である。
- 3層 上面で第1面を検出した。明黄褐色粘土ブロックを含む、オリーブ黄色~灰オリーブ色粘土層である。層厚は15cm程度で、層中に古墳時代~古代の遺物を多く含む。
- 4層 上面で第2面を検出した。明黄褐色粘土層で、層厚は30cmを測る。
- 5層 下層確認トレンチで確認した層である。湧水が著しい灰色微粒砂層である。



第4図 第1面平面図

第3節 検出遺構と出土遺物

第1面（第4図）

第1面は2層を除去して検出した遺構面であり、T.P.+7.7m前後を測る。南北方向に延びる溝7条(S D101~107)を検出した。出土遺物から中世の遺構面と考えられる。検出遺構の詳細は第2表にまとめた。

S D101~107

いずれも南北方向に延びる。調査区の南端は機械掘削が部分的に深く及んだため途切れる箇所があるが、S D105を除き調査区外に続く。溝の幅はS D102が20cm、S D105が30cmと狭い以外は0.8m~1.2mを測る。深さはいずれも5~10cm程度と浅く、断面形状は皿状を呈する。遺物はS D105以外の各溝から土師器・須恵器・瓦器などの破片が出土した。瓦器の破片を含むことから、中世以降の耕作に関連する溝と考えられる。

出土遺物の内、図示したのはS D101出土の2点である。1は須恵器蓋である。やや扁平な宝珠形つまみをもつ。2は小型壺の底部である。底面に回転糸切り痕が認められる。

第2表 第1面遺構一覧表

遺構名	法量(cm)			埋 土	出土遺物
	長さ	幅	深さ		
S D101	660	120	10	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器・瓦質土器・瓦
S D102	660	30	5	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器・瓦器
S D103	450	110	10	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器・瓦器
S D104	570	100	10	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器・瓦器
S D105	400	20	5	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器・瓦器
S D106	1220	80	8	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器
S D107	1000	110	8	灰色(7.5V5/1)粘土	土師器・須恵器

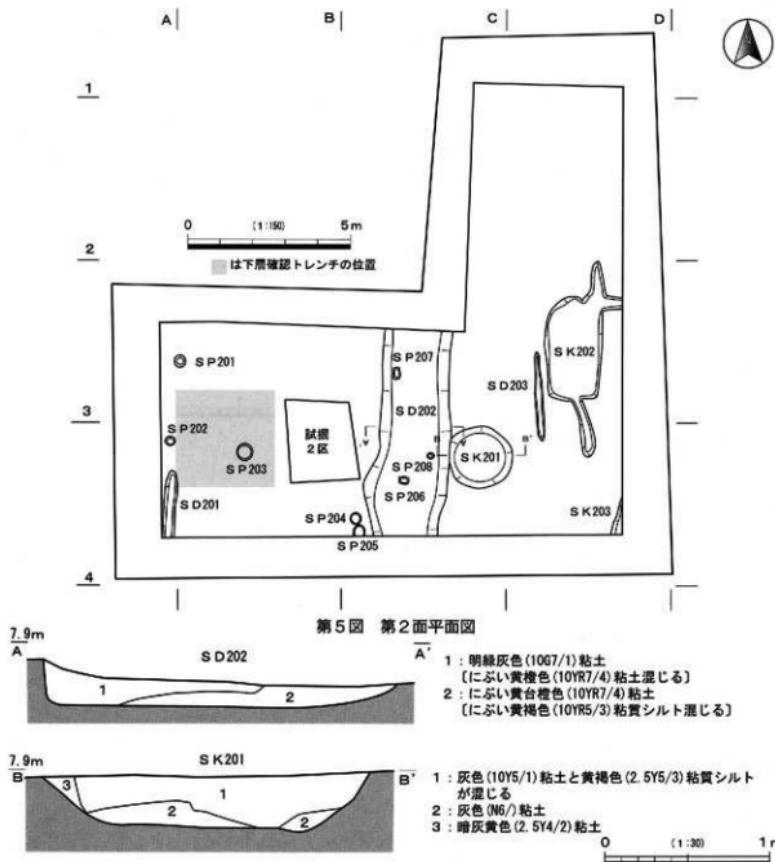
第2面（第5図）

第2面は3層を除去して検出した遺構面であり、T.P.+7.6m前後を測る。ピット8個(S P201~208)、溝3条(S D201~203)、土坑3基(S K201~203)を検出した。検出遺構の詳細は第3表にまとめた。

S P201~205

S P201~203は3B・4B区、S P204・205は4C区で検出した。いずれも平面形は円形を呈
第3表 第2面遺構一覧表

遺構名	法量(cm)			埋 土	出土遺物
	長さ	幅	深さ		
S D201	200	40	5	暗青灰色(5B67/1)粘土	
S D202	630	220	30	第6図に掲載	土師器・須恵器・黑色土器
S D203	260	20	10	暗青灰色(5B67/1)粘土	
S P201	40	40	30	暗青灰色(5B67/1)粘土	
S P202	30	30	13	暗青灰色(5B67/1)粘土	
S P203	50	50	20	暗青灰色(5B67/1)粘土	土師器
S P204	30	30	6	暗青灰色(5B67/1)粘土と明黄褐色(7.5YR5/6)粘土が混じる	
S P205	35	30	11	暗青灰色(5B67/1)粘土と明黄褐色(7.5YR5/6)粘土が混じる	須恵器
S P206	30	20	9	明黄褐色(10YR6/6)粘土〔青灰色(5B66/1)粘土混じる〕	
S P207	30	20	20	明黄褐色(10YR6/6)粘土〔青灰色(5B66/1)粘土混じる〕	
S P208	20	20	6	灰白色(7.5Y7/1)粘土	
S K201	200	190	32	第6図に掲載	土師器・須恵器・瓦
S K202	580	180	5	暗青灰色(5B67/1)粘土・明黄褐色(7.5YR5/6)粘土・灰白色(7.5Y7/1)粗粒砂が混じる	
S K203	120	40	10	灰白色(10Y7/1)微粒砂混じり粘質シルト	土師器・須恵器



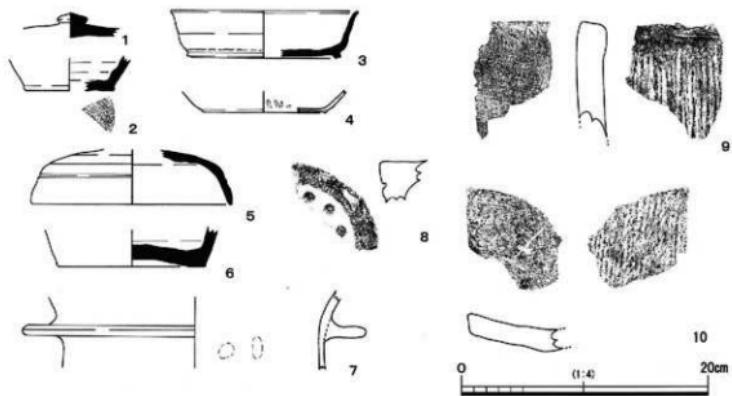
する。断面形状は S P 201が「U」字状、S P 202~205が皿状を呈する。遺物は S P 203から土器の細片、S P 205から須恵器の細片が出土したがいずれも固化し得なかった。

S P 206~208

いずれも S D 202掘削後に溝の底で検出した。平面形は S P 206・207が隅丸長方形、S P 208が円形を呈する。断面形状は S P 206・208が皿状、S P 207が台形状を呈する。遺物はいずれも出土していない。

S D 201

4 A区で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外へ延びる。断面形状は皿状を呈する。



第7図 出土遺物実測図

遺物は出土していない。

S D 202

3 B・4 B区で検出した南北方向の溝である。南北とも調査区外へ続く。断面形状は皿状を呈する。遺物は奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器が出土した。その内、図化し得たのは2点である。3は須恵器杯である。断面台形状の高台をもち、口縁部は外反し、丸く收める。4は黒色土器A類の底部である。高台は断面三角形状で低い。内面に密なミガキを施す。

S D 203

3 D区で検出した南北方向の溝である。断面形状は皿状を呈する。遺物は出土していない。

S K 201

4 C区で検出した円形の土坑であり、S D 202を切る。断面形状は皿状を呈する。遺物は土師器・須恵器の細片と平瓦が出土した。平瓦は近世のものであり、本来は第1面に帰属する遺構と考えられる。

S K 202

3 D区で検出した不定形の土坑である。長方形の土坑と南北方向の溝2条と東西方向の溝1条が重複しているように見えるが、切り合は確認できなかった。また底面も平坦で、断面形状はいざれも皿状を呈する。遺物は出土していない。

S K 203

4 D区で検出した遺構である。調査区外に続くため形状は不明であり、溝となる可能性もある。遺物は土師器・須恵器の細片が出土したが図化し得るものはなかった。

遺構にともなわない遺物

今回の調査では、全体的に出土遺物は少なく、しかもそのほとんどは細片である。しかし、事前の遺構確認調査と同様に、3層中からは比較的多くの遺物が出土している。側溝掘削時に出土したものも本来は3層に帰属すると考えられるものである。

出土したものは、土師器・須恵器・瓦器・瓦である。その内6点を図示した。5は須恵器蓋である。口縁部と天井部の境に沈線一条を施す。6は須恵器壺底部である。本来は平底と考えられるが、歪みのため一部上げ底となっている。7は土師器羽釜である。生駒西麓産の胎土をもつ。鍔は水平に延び、口縁部は外反する。8～10は瓦である。8は軒丸瓦である。瓦当面の一部が残存し、珠文が3個認められる。9・10は平瓦である。ともに凸面に繩タタキ痕、凹面に布目痕が認められる。図示した以外にも同様の平瓦の細片が数点出土しており、これらの瓦は、調査地の東約380mの地点に中心伽藍が存在する渋川廃寺に関連するものと考えられる。

第3章 まとめ

今回の調査地北側に隣接する久宝寺遺跡第29次調査では、弥生時代中期後半～近世に至る遺構が検出されており、第2・3面が今回の調査と対応すると思われる。第29次調査ではこれらの遺構面で奈良時代～鎌倉時代にかけての居住域に関連すると考えられる遺構が検出されている。今回の調査では、第1面で耕作関連の溝を検出し、第2面では溝・ピット・土坑などの遺構を検出したが、建物などとしてのまとめは見出せず、その性格は不明である。

全体として遺構の密度が低く、遺物の出土量も少ないため、本調査地は、耕作地として利用されていた可能性が高いと思われる。

参考文献

- ・西村公助2010「1)跡部遺跡(2008-347)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告61 平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図 版



東壁

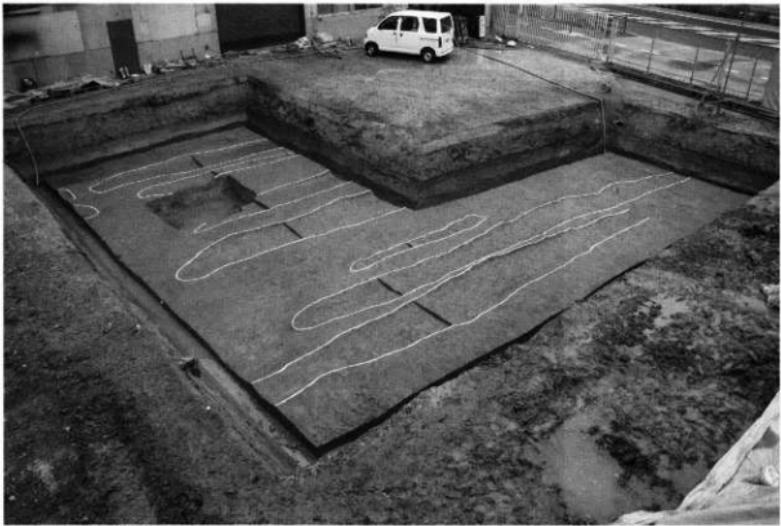


南壁



下層確認トレンチ南壁

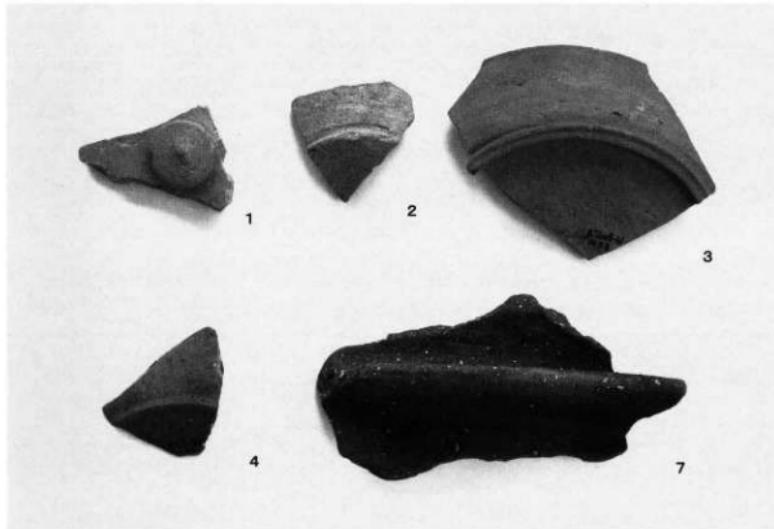
図版2



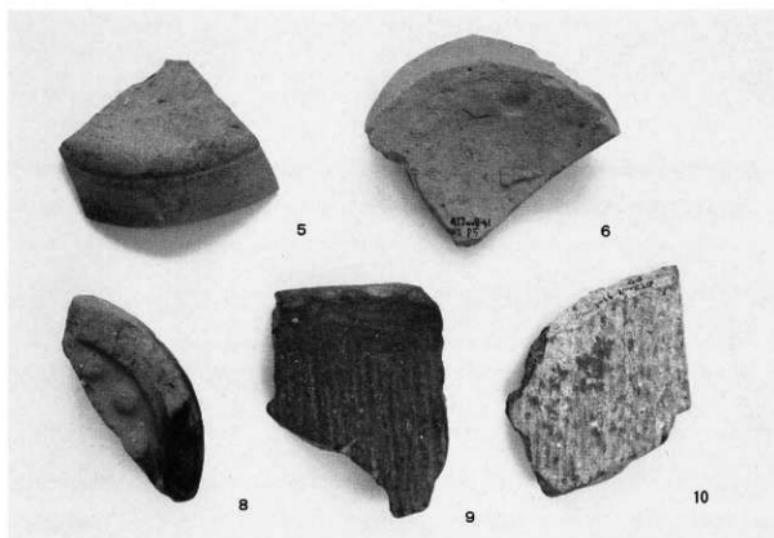
第1面全景（南東から）



第2面全景（南東から）



SD 101・202・3層出土遺物



側溝出土遺物

II 郡川遺跡第11次調査(KR2010-11)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市教興寺4丁目8番、9番で実施した分譲住宅建設に係る擁壁築造工事に伴う郡川遺跡第11次調査(KR2010-11)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成22年7月15日～7月21日(実働4日)に実施した。調査面積は約30m²である。
1. 現地調査には市森千恵子・伊藤和江・芝崎和美・永井律子・村田知子・山内千恵子が参加した。
1. 内業整理は下記を行い、現地調査終了後に着手して平成23年3月をもって終了した。
　　遺物復元－伊藤・山内
　　遺物実測－飯塚直世・市森・伊藤・芝崎・永井・村井俊子・村田
　　遺物トレース－市森
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	11
第2章 調査概要.....	12
第1節 調査方法.....	12
第2節 基本層序.....	12
第3節 検出遺構と出土遺物の概要.....	12
第3章 まとめ.....	18

挿図目次

第1図 調査地位置図	11
第2図 調査区位置図	12
第3図 平断面図	13
第4図 SK 1 出土遺物	14
第5図 SD 1 遺物出土状況	14
第6図 SD 1 出土遺物	15
第7図 SD 2 出土遺物	16
第8図 SD 3 出土遺物	16
第9図 SO 1 出土遺物	17

図版目次

図版1 1区全景(東から)	2区西壁	2区SK 1(東から)
図版2 2区全景(東から)	2区SD 1 遺物出土状況(東から)	同上(北東から)
図版3 3・4区全景(北から)	4区西壁	2区調査状況(北西から)
図版4 出土遺物(SK 1、SO 1)		
図版5 出土遺物(SD 1)		
図版6 出土遺物(SD 1、SD 3、SO 1)		

第1章 はじめに

郡川遺跡は大阪府八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川1～5丁目・教興寺1～7丁目・黒谷1～5丁目・垣内1～5丁目にあたる東西約1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山地西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連続と続く集落遺跡であると認識されている。



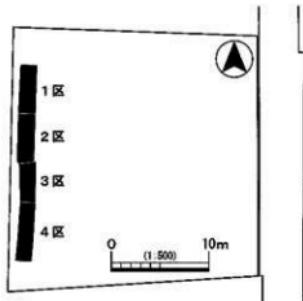
第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は、平成22年6月24日に実施した遺構確認調査〈郡川遺跡(2010-35)〉の結果を受けて実施した分譲住宅建設に係る擁壁築造工事に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第11次調査(KR2010-11)である。

調査区は幅約1.5m、長さ約20mの南北に細長いトンチ状を成す。地区割りは北から1～4区を設定し、1・2・4・3区の順に調査を実施した。掘削は、当初現地表(約T.P.+40.6～40.8m)下約0.2mまでを機械掘削する予定であったが、地盤改良の影響で硬化した部分を除去するため約0.3～0.5mを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行った。なお調査区の北端・南端は遺構確認調査地と重複している。標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区多角補助点〈1A219:T.P.+17.338m〉を使用した。



第2図 調査区位置図

第2節 基本層序

西壁を基本層序とする。

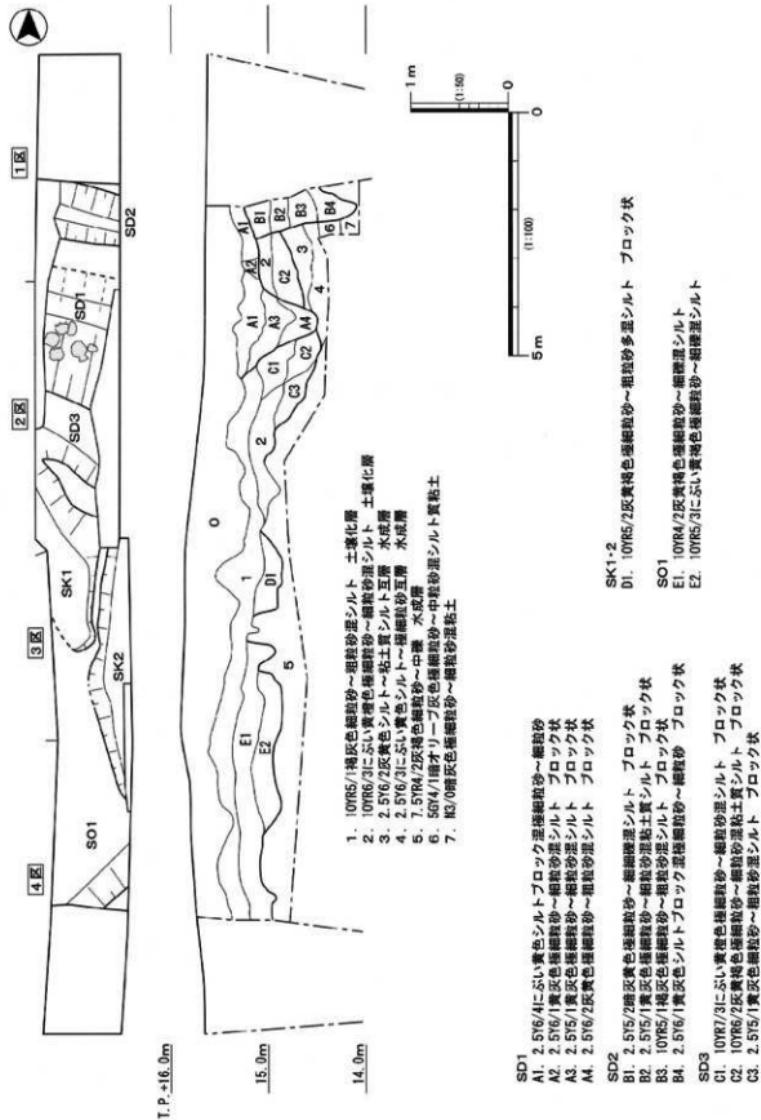
1層は全域で見られた土壤化層で、南ほど砂粒が優勢となっている。2層は北部で見られた土壤化層で、一部遺構内に落ち込んでいる。3・4層は粘土質シルト～極細粒砂の互層状をなす水成層である。調査区北壁までは及んでいない。5層は2区以南で確認した砂疊層で、洪水砂である。3～5層は一連の堆積の可能性がある。6・7層は粘土～シルト質粘土を基調とし、土壤化層と考えられる。

第3節 検出遺構と出土遺物の概要

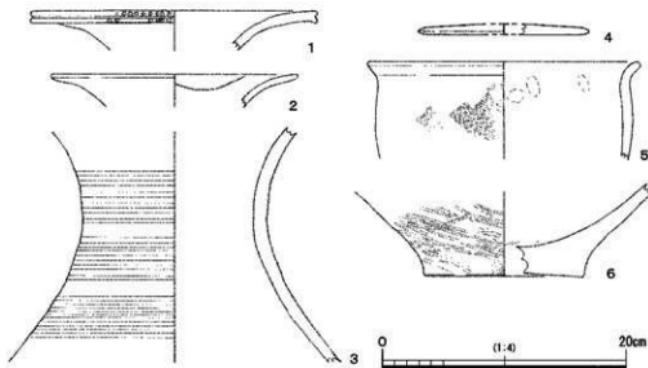
北部では2層、南部では5層上面で、土坑2基(SK1・2)、溝3条(SD1～3)、落ち込み1箇所(SO1)を検出した。

SK1

2～3区で検出した土坑で、検出部分の平面形は北西～南東方向に長い不整形である。規模は長辺3.8m以上・短辺1.5m以上・深さ約30cmを測る。埋土はブロック状の單一層である。遺物は弥生時代前期末～中期前半頃の土器が多く出土しており、1～6を図化した。1～3は広口壺である。1は口縁部端面に刻み目と凹線を巡らせる。2は口縁部内面に上に開く弧状のヘラ記号を施す。3は頸部～体部に多条沈線文を三段以上に施すもので、沈線は上から11・11・13条である。4は円盤状の蓋である。調整は下面ナデで、上面はヘラミガキと思われるが不明瞭である。上面の周縁には指頭圧痕が見られる。5は壺で、外面調整は斜方向の板ナデである。6は大形の壺底部である。



第3図 平断面図



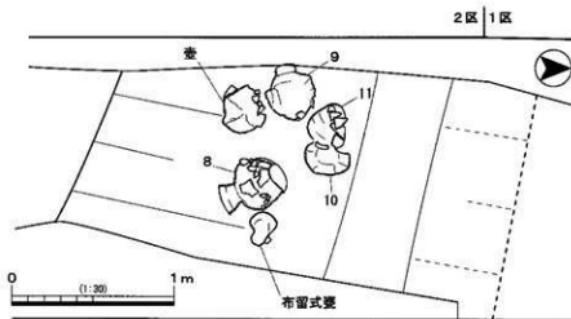
第4図 SK 1出土遺物

SK 2

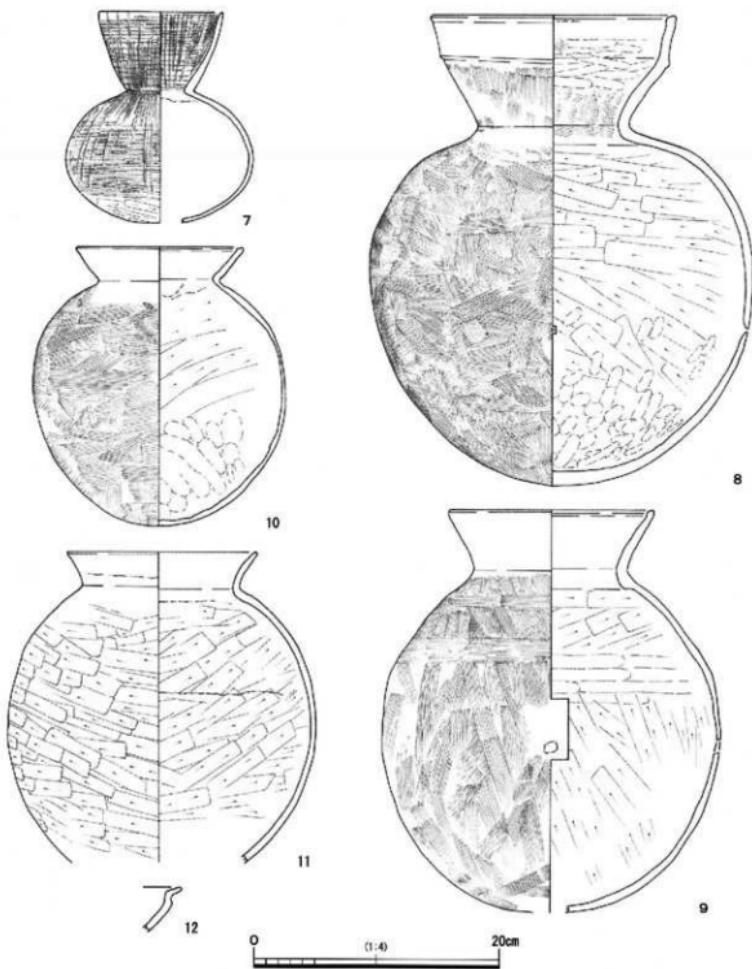
3～4区で弧状をなす西肩を検出したもので、東は調査区外に至り詳細は不明である。検出部分の規模は南北5.1m・深さ最大42cmを測る。埋土はSK 1と同じブロック状の単一層である。遺物は出土していない。

SD 1

1～2区で検出した東西方向の溝で、本来の遺構構築面は1層より上である。検出部分の規模は、幅約2.5m、深さは約0.8mを測る。埋土は基本的にブロック状の3層からなり、最上層(A1層)は洪水起原と思われる砂層を基調とする。北肩で見られるA2層については堤の盛土の可能性がある。遺物はA3層上面に貼り付く状況で古墳時代前期前半(布留式期古相)の壺・甕6個体がまとまって出土している。完形に近い土器も含まれ、本来はいずれも完形であった可能性がある。このうち図化できたのは8～11で、他に7・12がある。



第5図 SD 1遺物出土状況



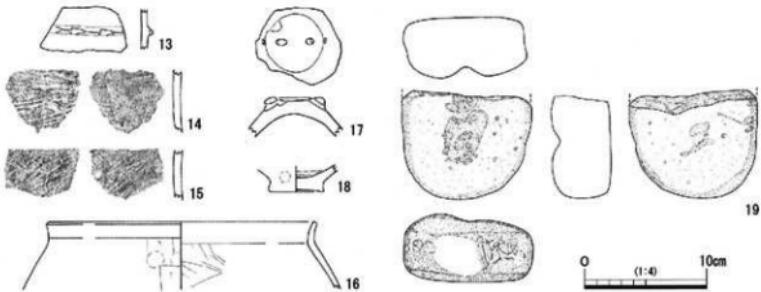
第6図 SD 1出土遺物

7はヘラミガキを多用する精製の壺で、口径10.2cm・器高17.3cm・体部最大径15.2cmを測る。底部外面にはヘラケズリが認められる。8は複合口縁壺で、口径20.0cm・器高40.7cm・体部最大径31.0cmを測る。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリを基調とし、口縁部はヨコナデ、頸部内面にはハケを施し、底部内面はナデ・ユビオサエである。底部外面には径15cm程度で平面形が五角形

に近い明瞭な黒斑を有する他、口縁部内面が焼けている。体部やや下位には焼成後の外からの穿孔1個(径2mm程度)を施している。形態的に山陰あるいは北陸地方からの搬入品と考えられる。9は直口の広口壺で、口径16.8cm・器高33.0cm・体部最大径27.4cmを測る。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリを基調とし、口縁部はヨコナデである。体部外面には不定形な黒斑を有する他、体部中位には8と同様、焼成後の外からの穿孔1個(径1.0cm程度)を施している。10は布留式壺で、口縁部の約1/3を欠く。口径13.6cm・器高22.9cm・体部最大径20.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ヘラケズリで、底部内面はナデ・ユビオサエである。肩部外面の2箇所に刺突文を施す。11は壺と思われるが、器壁が厚く、体部調整は内外面共にヘラケズリで、特異な個体といえよう。体部下位外面がやや焼け、底部内面は焦げている。12は縄文土器残鉢と考えられる小片で、時期は晩期に比定されよう。磨耗のため調整等は不明である。

SD 2

1区で検出した東西方向の溝で、検出部分の幅約1.2m、深さは約1.1mである。埋土はブロック状の4層からなり、最下層が砂層基調である。遺物は縄文時代晩期～弥生時代後期の土器や石器が出土しており、13～19を図化した。13～15は縄文土器深鉢片である。13は体部に突帯を巡らせるもので、突帯には刻み目を施している。14・15は条痕文を施した体部片で、14は内面ハケである。これらは縄文時代晩期に比定されよう。16～18は弥生土器である。16は壺で、体部外面に縱方向にヘラケズリを施すことから紀伊産の可能性があるが、詳細は不明である。17は蓋で、やや瘤む頂部には一对の紐孔を有する。18は壺底部である。これらの時期は、16・17が前期～中期、18は後期に比定される。19は砂岩製の凹石で、上面の二箇所に凹部が見られる。上面・下面共に比較的平滑で、また側面の一部が非常に平滑になっており、磨石としての使用が窺える。



第7図 SD 2出土遺物

SD 3

2区で検出した東西方向の溝で、南肩を検出したが、北部はSD 1・2に削平されており詳細は不明である。検出部分の深さは約0.6mである。埋土はブロック状の3層からなり、南肩付近には基本層序2層が落ち込む状況が見られた。遺物は弥生時代前期頃の土器片の他、石器ではサヌカイト製の石錐(20)が出土している。20は両面から調整剥離を施すが、片面の頭部に主要剥離面を残す。頭頂部は欠損している。

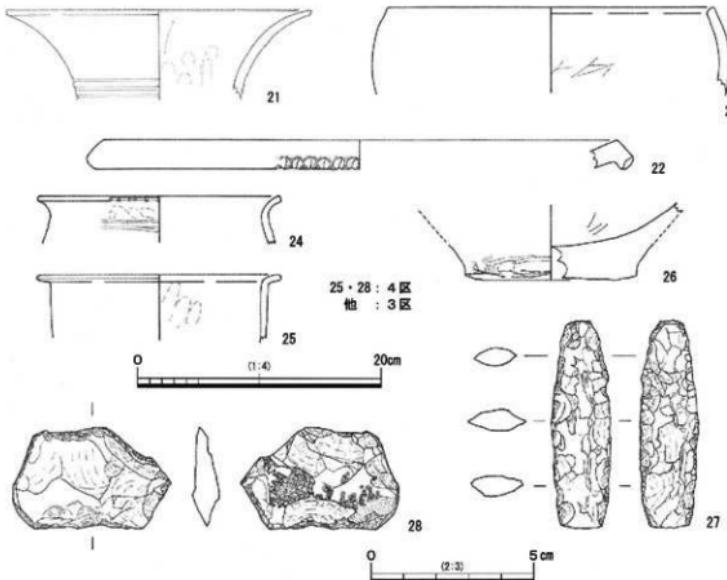


第8図 SD 3出土遺物

S O 1

3~4区で検出したもので、北東~南西方向の肩から北西方向に落ち込む。深さは20~40cmで底部には凹凸が見られ、埋土は自然堆積と思われる2層からなる。自然地形である可能性もある。弥生時代前期~中期の土器・石器(石槍・剥片等)が多く出土しており、21~28を図化した。

21・22は広口壺である。21は頸部に3条以上の範描沈線を巡らせる。22は外下方に垂下させた口縁端部に刻み目を施す。23は無頸壺と考えられる。24・25は壺で、24は口縁端部に刻み目を施し、頸部下位に2条の範描沈線を巡らせる。26は大形の壺底部である。これらの土器は、21・24~26が前期後半、22・23が中期に比定されよう。27・28はサヌカイト製の石器である。27は石槍で、先端・基部は欠損しており、残存長12.6cm・幅3.6cm・最大厚1.3cmを測る。刃は両側の下半分が潰れている。刃部は両面から調整剥離を施しているが、両面共に先端から約1/3以下には中心に主要剥離面を残している。28は削器であろう。平面形は不整な六角形を呈し、一辺は自然面のままであるが、他の五辺には刃を作り出している。調整剥離は両面からで、片面に自然面、反対の面に主要剥離面が残る。全体的に刃潰れが見られる。



第9図 S O 1出土遺物

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生・古墳時代の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ4箱を数える。弥生時代では前期後半～中期前葉、後期の集落遺構を確認した。後期の遺構は北端のSD2のみであるが、調査地南端にあたる遺構確認調査では当該期の土坑を検出している。北約200mで実施した第2次調査地では、当地よりも時期の遅る前期中段階の遺構を確認している。

古墳時代では前期前半(布留式期古相)のSD1がある。上層で見られた古墳時代前期前半の土器集積には、穿孔を施した土器が見られ、祭祀的な性格を考慮する必要があろう。

北部ではほぼ東西方向の溝SD1～3が密集する状況で検出されている。いずれも深さ1m前後を測る大規模な溝で、時期的には弥生時代前期～古墳時代前期と幅がある。前代の溝を踏襲するように同位置に掘削され続けていた可能性が考えられよう。

SD1・2からは縄文時代晩期の土器が少量ではあるが出土している。東約300mの教興寺跡第2次調査(T.P.+26.5m)で土器集積が確認されているが、当地周辺においても当該期の集落が存在した可能性がある。

参考文献

- ・樋口 紫2011「(13)郡川遺跡(2010-35)の調査」『八尾市内遺跡平成22年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告65 平成22年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・原田昌則1999Ⅲ『郡川遺跡(第2次調査)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告64』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一2002『教興寺跡(第1次調査・第2次調査)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告72』財團法人八尾市文化財調査研究会

図 版



1区全景(東から)



2区西壁



2区SK 1(東から)



2区全景(東から)



2区 S D 1 遺物出土状況(東から)



同上(北東から)



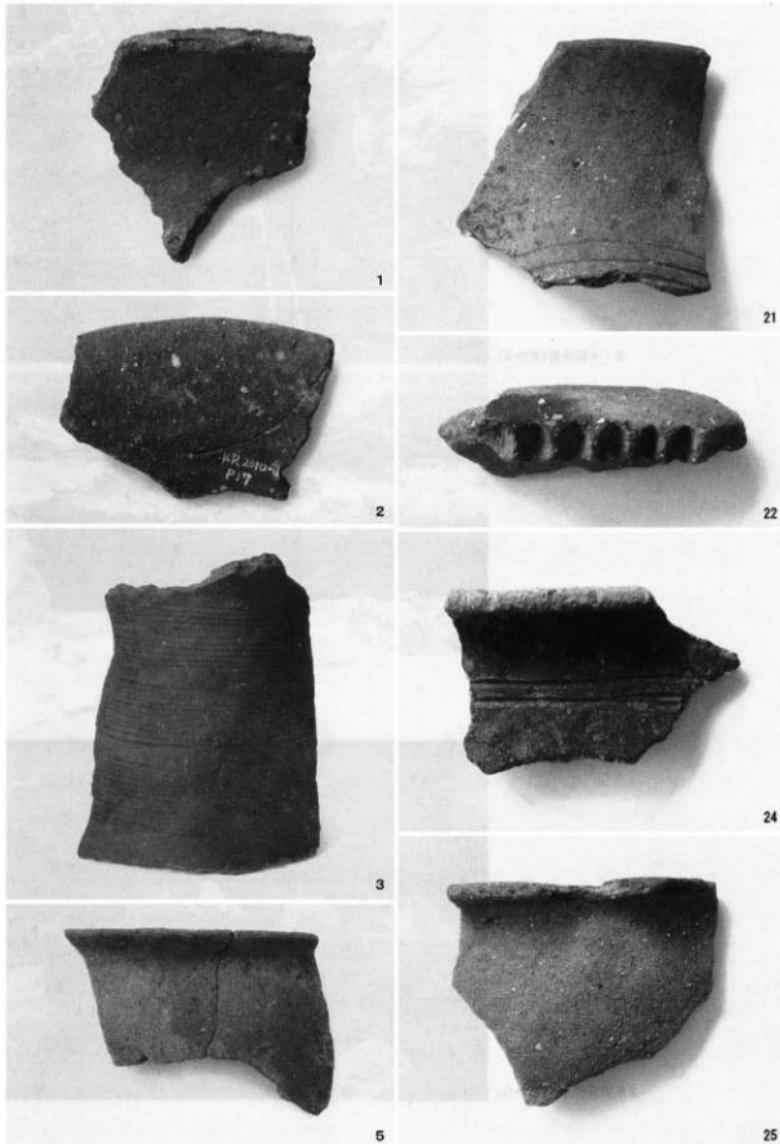
3・4区全景(北から)



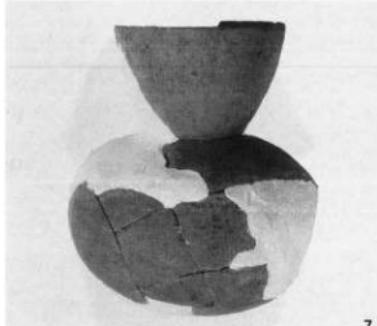
4区西壁

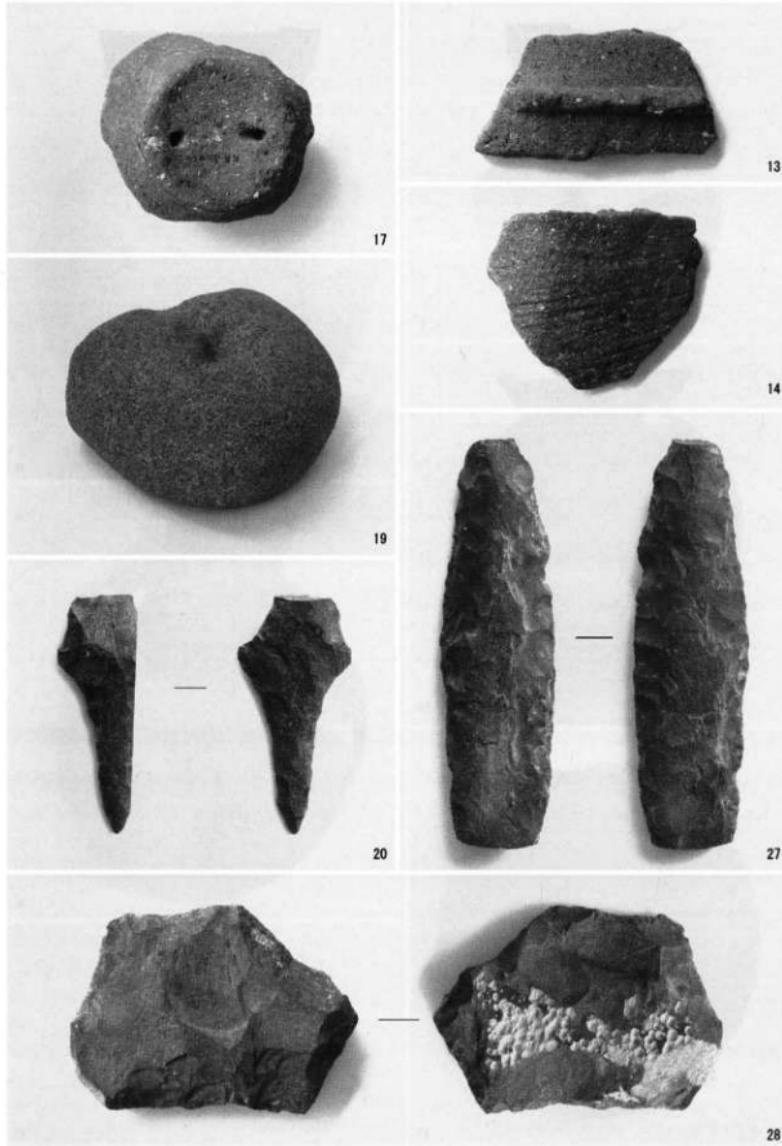


2区調査状況(北西から)



SK 1(1~3・5), SO 1(21・22・24・25)





S D 2 (13・14・17・19)、S D 3 (20)、S O 1 (27・28)

III 小阪合遺跡第44次調査(K S 2009-44)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市青山町四丁目247番地で実施した倉庫建設工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第44次調査(KS2009-44)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年3月17日～3月30日(実働6日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約36m²である。
1. 現地調査においては、梶本潤二・竹田貴子・永井律子・中浜輝志・西出一樹・山内千恵子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－飯塚直世・市森千恵子・伊藤静江・芝崎和美・村井俊子・山内、遺物トレース－市森が行った。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　　文　　目　　次

第1章 はじめに.....	19
第2章 調査概要.....	20
第1節 調査の方法と経過.....	20
第2節 基本層序.....	20
第3節 検出遺構と出土遺物.....	21
第3章 まとめ.....	29

挿図目次

第1図	調査地位置図	19
第2図	調査区位置図	20
第3図	S K121出土遺物	21
第4図	1・2区平断面図	22
第5図	3・4区平断面図	23
第6図	S O321出土遺物	25
第7図	5・6区平断面図	26
第8図	S D521出土遺物	27
第9図	5区第8層出土遺物	28
第10図	S P621出土遺物	28
第11図	包含層出土遺物	29

図版目次

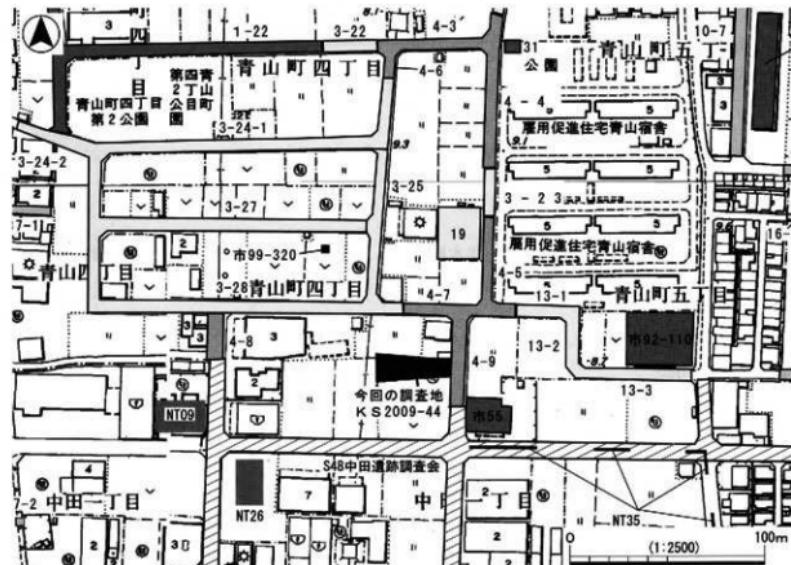
図版1	1区第1面(北から) 1区S K121(北から) 3区第1面(北から) 3区S O321(西から)	1区第2面(北から) 2区第1面(北から) 3区第2面(北から) 4区第1面(北から)
図版2	4区第2面(東から) 5区第2面(南から) 6区第1面(南から) 6区S P621・622(西から)	5区第1面(南から) 5区第8層内南東部土器出土状況(北から) 6区第2面(南から) 6区S P621櫛板(南西から)
図版3	出土遺物 S K121 S O321	
図版4	出土遺物 S O321 S D521 5区第8層	
図版5	出土遺物 5区第8層 S P621 包含層	

第1章 はじめに

小阪合遺跡は八尾市のはば中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1～5丁目、若草町、山本町南7～8丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡は、昭和30年に若草町で行われた大阪府営住宅建設工事の際、古墳時代の遺物が多量に出土したことから、その存在が知られるようになった。そして昭和57年以降、土地区画整理事業や公共下水道、民間開発等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会により数多く実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南端部に位置しており、周辺では道路部分の第3・4・13次調査、共同住宅建設に伴う第19次調査を当研究会が実施している。また南側の中田遺跡域では、道路部分で中田遺跡調査会による調査や、公共下水道工事に伴う第35次調査、民間開発に伴う第9・26次調査、市教委55年調査等がある。今回の調査地に近接する市教委55年調査では、古墳時代初頭(庄内式期新相)の土坑2基が検出され、他地域からの搬入土器を多く含む多量の土器が出土し、この資料は『中田1丁目39土坑出土土器』(米田1986)として、当該期の土器研究において標式資料と認識されている。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

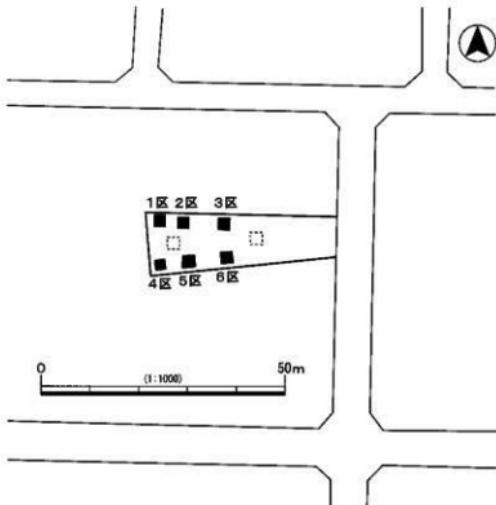
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、平成22年1月29日に実施した遺構確認調査〈小阪合遺跡(2009-419)〉の結果を受けて実施した倉庫建設工事に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第44次調査(KS 2009-44)である。

調査対象は建物基礎部分6箇所で、各調査区の規模は、1・4区が $2.3 \times 2.3\text{m}$ 、2・3・5・6区が $2.5 \times 2.5\text{m}$ で、総面積は約36m²を測る。

調査は、現地表下約1.4mまでを機械掘削とし、以下約0.25mについて人力掘削により実施した。また適宜下層確認調査を実施した。

遺構名は遺構略号+地区名+面+番号とした。
調査で使用した標高の基準は、調査地東部道路上に位置する四級基準点相当の八尾市街区多角補助点〈IA235 : T.P. +9.624〉を使用した。方位は工事設計図に準じた。



第2図 調査区位置図

第2節 基本層序

調査地全体を通して見られる地層を基本層序とし、第0～8層を設定した。またそれ以外の地層名については、地区毎に、半角数字で地区名+番号(01～)層とした。

- 第0層 盛土
- 第1層 2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト。旧水田耕土。T.P. +8.7～8.9m。
- 第2層 7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂混粘土質シルト。T.P. +8.5～8.7m。
搅拌されグライ化した作土で、時期は近世であろう。
- 第3層 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土。T.P. +8.4～8.6m。
- 第4層 10YR5/1褐灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト。T.P. +8.3～8.5m。
3・4層は搅拌された作土で、時期は中世～近世であろう。3層は北部で見られた。1～5区では3・4層上面が第1面である。

第5層 10YR5/1褐色細粒砂～中粒砂多混粘土質シルト。T.P. +8.2～8.3m。

搅拌されMn斑を含む土壤化の著しい層相である。1～4区では上面が第2面である。

第6層 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂混粘土質シルト。T.P. +8.0～8.3m。

鉄分が多く含むため固く締まる層相である。第2面遺構は主に当層上面が検出面である。

第7層 10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂混粘土質シルト。T.P. +7.8～8.1m。

第8層 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。T.P. +7.9m以下。

第6層以下はシルト質粘土～粘土質シルトからなり、基本的に水成層と捉えられる。たゞ5区では弥生時代後期の土器が多く出土しており、大規模な溝等の遺構埋土となっている可能性がある。

第3節 検出遺構と出土遺物

1区

〈第1面〉

第3層上面(T.P. +8.5m)で南北方向の溝1条(S D111)を検出した。

S D111は調査区西半を占めるもので、規模は幅1.0m以上・深さ約25cmを測る。埋土はブロック状の單一層(A1層)である。耕作痕であろう。

〈第2面〉

第5層上面(T.P. +8.3m)で土坑2基(S K121・122)、溝1条(S D121)を検出した。

S K121は南部で検出され、南は調査区外に続く。東西約1.0m・南北0.5m以上・深さ約45cmを測る。断面椀状を呈し、埋土はブロック状の4層(B1～B4層)からなる。遺物は底体部の一部を欠く布留式期古相の壺(1)がB2～B3層から出土している。

1は底体部外面の全面が縦～斜方向のハケ調整で、口縁部外面、底体部外面が煤ける。口径13.8cm・器高約18.3cm・体部最大径18.9cmを測る。

S K122は検出部で東西約35cm・南北約18cm・深さ約6cmを測る。埋土はブロック状の單一層である。遺物は出土していない。

S D121はほぼ東西方向に伸び、検出長約0.9m・幅約15cm・深さ約5cmを測る。埋土はS K122と同じである。遺物は出土していない。

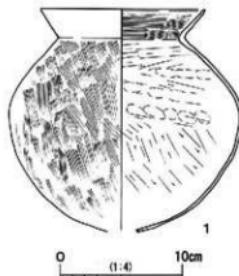
2区

〈第2面〉

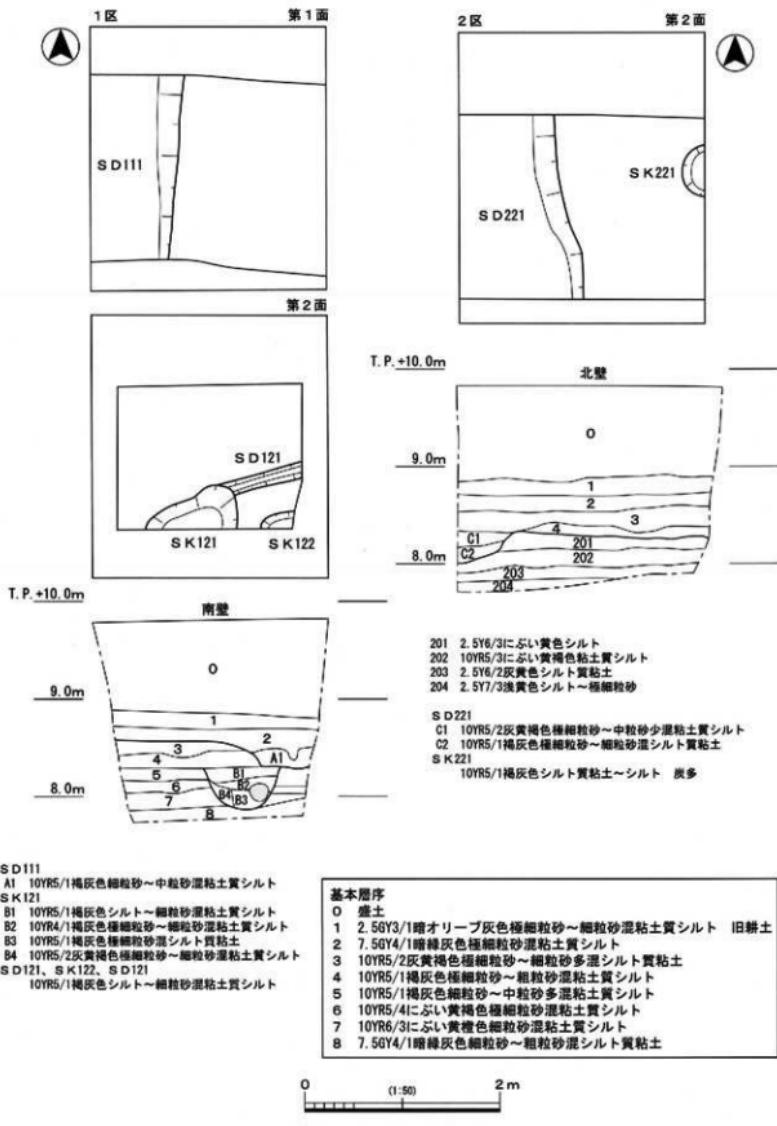
201層上面(T.P. +8.3m)で土坑1基(S K221)、溝1条(S D221)を検出した。201～203層は、基本層序5～7層に対応すると考えられるが、より砂質が強い層相である。

S K221は東部で検出され、検出部分は直径約55cmの半円形を呈する。深さ約10cmで、埋土は炭を多く含むブロック状の單一層である。

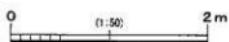
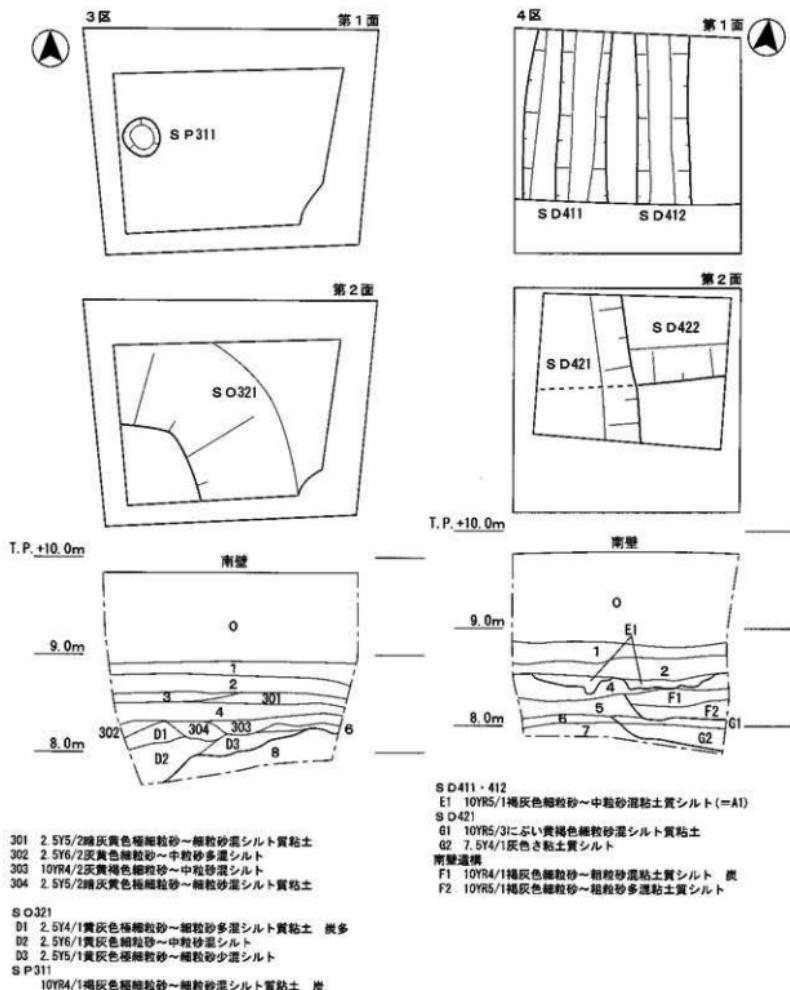
S D221は南北方向に伸び、幅1.2m以上・深さ約32cmを測る。埋土は炭を含むブロック状の2層(C1・C2層)からなる。古墳時代前期(布留式期)までの土器が出土している。



第3図 S K121出土遺物



第4図 1・2区平断面図



第5図 3・4区平面面図

3区

〈第1面〉

第4層上面(T.P.+8.5m)でピット1個(S P311)を検出した。

S P311は直径約40cmの円形を呈し、深さ約15cmを測る。断面逆台形で、埋土は炭を含むブロック状の單一層である。時期不明の土師器片が出土している。

〈第2面〉

第8層上面(T.P.+8.2m)で落ち込み1基(S O321)を検出した。

S O321は調査区南西部から北・東に向かって落ち込む状況で、溝の可能性もある。深さは最大で約60cm、埋土は3層(D1~D3層)からなり、上層には炭が多く含んでいる。弥生時代後期~古墳時代初頭(庄内式期古相)の土器が多く出土している。2~22を図化した。

2~11は壺で、法量的に小型(2~4)、中型(5~7)、大型(8~11)に分けられる。2は外面の平行タタキが口縁部に及び、口縁部内面はハケである。外面に黒斑を有する。3は口縁端部に刻み目を施す。4は頸部が約半周にわたってひしゃげている。内面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。5は口縁部が外湾するものである。外面調整は水平方向の平行タタキで、下半は(板)ナデを加えて消している。口縁部外面、肩部以下の外面が煤けている。精良な胎土で搬入品であろう。6は一部残る部分もあるが、外面の平行タタキをナデ消している。6・7は器壁が厚く、外底面にヘラケズリを施す点が共通し、共に体部下半が煤ける。10は突出しない小さめの平底を有するもので、外面調整は平行タタキをナデ消しているが、下半部は雑である。ほぼ完形。11は外面平行タタキで、下半には下から上へのヘラナデを疎に加える。12~14は壺である。12は小型の直口壺で、調整は体部外面斜めハケ、口縁部外面には縱方向のヘラミガキを加える。13・14はヘラミガキを多用する精製の壺である。13は複合口縁壺の可能性があり、最大径の位置に直径3cm程度の小さな黒斑を有する。15~18は高杯で、15・16はヘラミガキを多用する精製の有稜高杯である。15は口径11.0cmの小型品で、胎土中に赤色酸化粧が目立つ。16は口縁部端面及び端部やや下位に沈線を巡らせる他、調整では杯底部外面最上位にヘラケズリを施す特徴がある。17は柱状部が大きく、調整はヘラミガキを多用する。杯中央部は閉塞部分が欠落したものと思われるが明確ではない。裾上部に四方孔を施すが、内面にはその際に生じたと考えられる粘土塊1個が付着している。18も四方孔を施す脚部で、16と同一個体の可能性がある。裾端部に黒斑を有する。19は小形の器台である。20はヘラミガキ調整、21・22はタタキ調整の鉢で、22は有孔鉢である。これらのうち5・10・16・18・19等が古墳時代初頭(庄内式期古相)に位置づけられよう。

4区

〈第1面〉

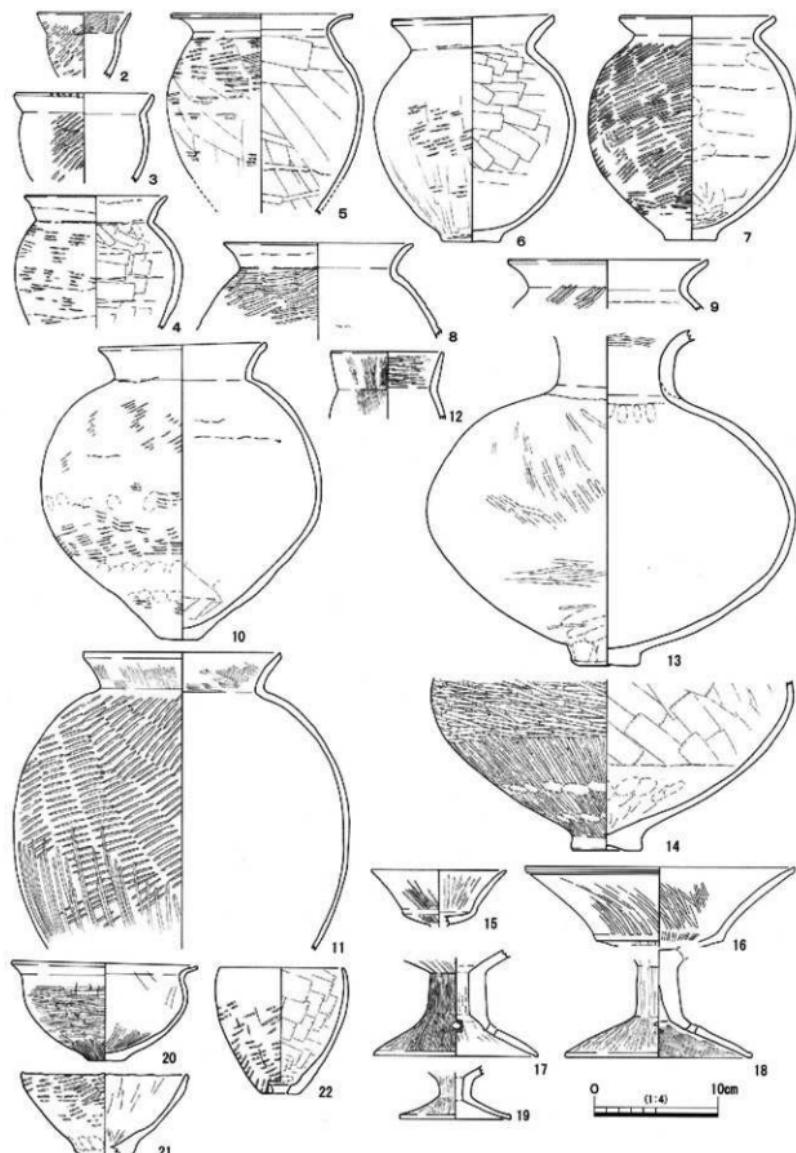
第4層上面(T.P.+8.5m)で南北方向の溝2条(S D411・412)を検出した。

S D411は幅約0.8m・深さ約15cm、S D412は幅約0.5m・深さ約20cmを測る。埋土は共にS D111と同様のブロック状の單一層で耕作痕であろう。

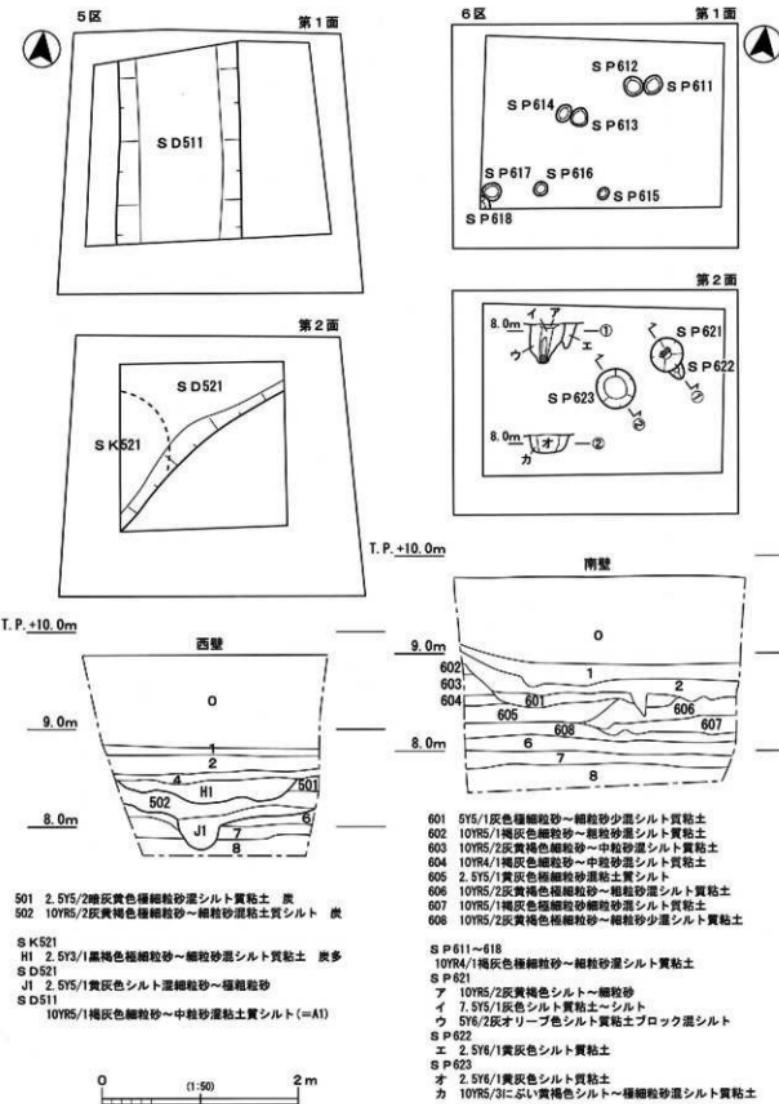
〈第2面〉

第6層上面(T.P.+8.1m)で溝2条(S D421・422)を検出した。また平面には及ばないが、南壁で第5層上面構築の遺構を確認した(南壁遺構)。

S D421は南北方向に伸び、北部はS D422に削平されている。幅1.1m以上・深さ約35cmを測る。



第6図 SO 321出土遺物



第7図 5・6区平面面図

埋土は2層(G1・G2層)からなり、下層から古墳時代初頭(庄内式期)の土器片が出土した。

S D 422は東西方向に伸び、幅0.9m以上・深さ約10cmを測る。埋土は第5層が落ち込むもので、北に下がる自然地形の可能性もある。南壁遺構は東西1.0m以上・深さ約30cmを測り、埋土は炭を含むブロック状の2層(F1・F2層)からなる。

5区

(第1面)

501層上面(T.P.+8.5m)で南北方向の溝1条(S D 511)を検出した。501・502層は、Fe斑・炭を含み攪拌の著しい土壤化層である。

S D 511は幅約1.2m・深さ約20cmを測る。埋土はS D 111と同様のブロック状の単一層で耕作痕であろう。

(第2面)

第4層下面(T.P.+8.3m)で土坑1基(S K 521)、第6層上面で溝1条(S D 521)を検出した。

S K 521は西部で検出したもので、西は調査区外に続いている。規模は南北1.8m以上・東西30cm以上・深さ約25cmを測る。弥生時代後期の土器が出土している。土坑としたが、掘方ラインが明瞭ではなく、501・502層も含めてS D 521の埋土である可能性がある。

S D 521は北東-南西方向に伸びる南肩を検出した。規模は幅1.2m以上・深さ約15cmを測り、西壁際では底部が窪む。埋土は流水を示す細粒砂-極粗粒砂である。弥生時代後期の土器が出土しており、23を図化した。23は小型壺である。調整は平行タタキで、底部は外面のナデにより周縁が下方に盛り上がっている。底部及び口縁部の一部に黒斑を有する。 第8図 S D 521出土遺物
(第8層出土遺物)

5区8層からは弥生時代後期の土器が多量に出土しており、全体が遺構埋土である可能性もある。24~32を図化した。

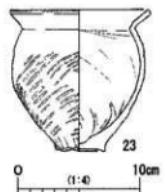
24~26は壺で、口頸部は24が直口、25は受口状である。いずれもヘラミガキ調整で、24は先行する平行タタキ、ハケが見られる。24・25は体部が焼けている。24は肩部にヘラ記号を有する。27は高杯で、四方孔を施す。28~31は甕である。いずれも調整は平行タタキで、28・31は上位に水平方向に施すもので、28は板ナデ、31はハケを加えている。31は口縁部や体部内面に粘土紐接合痕が明瞭に残っている。32は鉢で、調整は口縁部がヘラミガキ、体部はハケ・ナデである。底部外面に黒斑を有する。

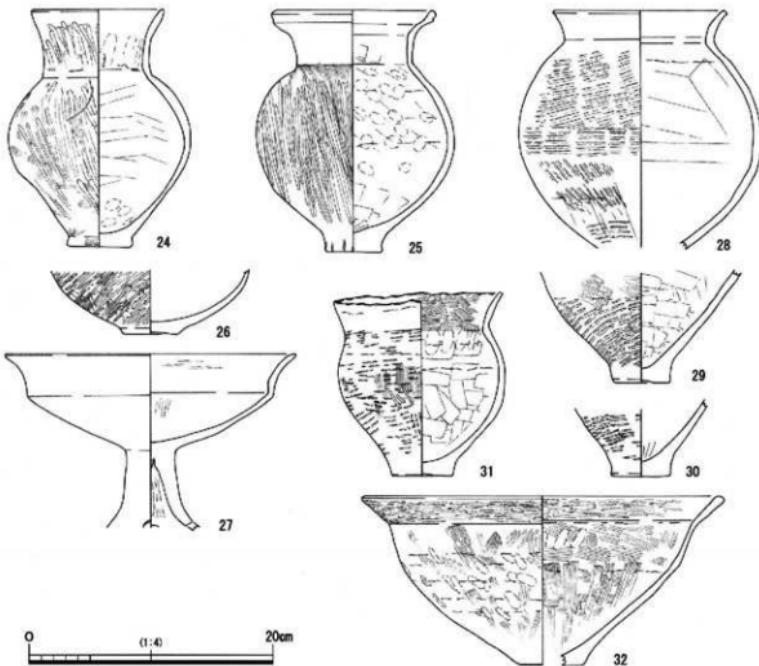
6区

601層は第2層に準じる水田耕作土である。602・603層は東部で見られ、攪拌された作土である。第2層・601層に対応する島畑耕作土であると思われる。604・605層は土壤化層。606~608層も攪拌され土壤化する。

(第1面)

604層上面(T.P.+8.6m)でピット8個(S P 611~618)を検出した。直径12~20cmを測り、深さはS P 612・613・615・616が10~20cm、他が5cm程度である。埋土はブロック状の単一層である。遺物はS P 613から時期不明の土師器片が出土している。





第9図 5区8層出土遺物

これらのピットの時期は中世頃と考えられるが、明確ではない。

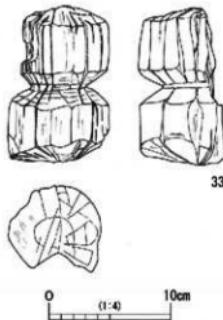
〈第2面〉

第6層上面(T.P.+8.2m)でピット3個(S P 621~623)を検出した。また東壁では605層上面(T.P.+8.5m)構築の遺構を確認している(東壁構造)。

S P 621は直径約35cmの円形を呈し、深さ約40cmを測る。直径約5cmの柱根が遺存しており、底には礎板として直径約8cm・長さ約12cmの木錘(33)を横位に置いている。埋土は3層(7~9)からなる。古墳時代初頭(庄内式期)の土師器片が出土している。

S P 622はS P 621に削平されており、直径約15cm・深さ約25cmを測る。埋土は炭を含む単一層である。時期不明の土師器片が出土している。

S P 623は直径約38cmの円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は2層からなる。



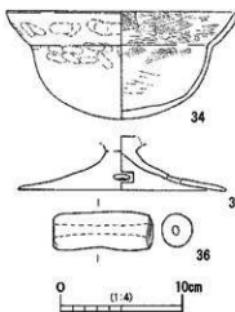
第10図 S P 621出土遺物

III 小阪合遺跡第44次調査(K S 2009-44)

東壁遺構は南北約65cm・深さ約25cmを測り、埋土は炭を多く含むブロック状の2層からなる。古墳時代前期(布留式期)の土器が出土している。

包含層出土遺物

34は鉢。全体に表面黒色を呈し、焼けているものと思われる。調整は外面ナデ、内面は上位ハケ、底部ヘラケズリである。1区第5層出土。35は椀形高杯の脚部と思われる。四方孔を有する。3区第1面出土。36は長さ8.0cm・直径約2.7cmを測る土錘である。一方の端面が窪んでいる。3区第1面出土。同形態の土錘は北西約80mの第3次調査S D321から大量に出土している。



第11図 包含層出土遺物

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期、中世の集落遺構、中世～近世の生産関連遺構を検出した。

弥生時代後期では5区8層から多くの土器が出土しており、遺構の可能性もある。

弥生時代後期末～古墳時代初頭前半(庄内式期古相)の遺構としては3区S O321や6区のピット(S P621～623)がある。周辺での当該期の遺構としては、前述の第3次調査S D321や、北西約30mの第3次調査S D316、南東約40mの第4次調査第9調査区S D4があるが、S O321はほぼこれらの溝を結ぶライン上に位置していることから、同一の溝である可能性がある。

古墳時代前期(布留式期)は1・2・6区の他、遺構確認調査区でも遺構が見られ、全域に広がっているものと考えられる。

中世では6区第1面検出のピット群がこの時期と考えられる。

近世以降は全域で生産関連遺構を検出した。

参考文献

- 坪田真一2011「5）小阪合遺跡(2009-419)の調査」「八尾市内遺跡平成22年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告65 平成22年度国庫補助事業」八尾市教育委員会
- 高萩千秋1987「小阪合遺跡第3次調査」「小阪合遺跡-八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査-昭和58年度第2次調査・第3次調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告11」(財)八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋1988「小阪合遺跡-八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査-昭和59年度第4次調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告15」財團法人八尾市文化財調査研究会



図 版

III 小阪合遺跡第44次調査(K S 2009-44)

図版
1



1区第1面(北から)



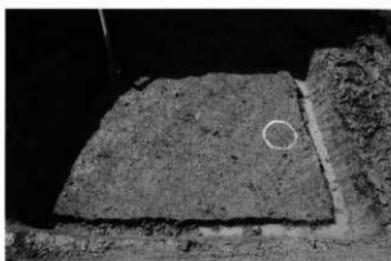
1区第2面(北から)



1区SK121(北から)



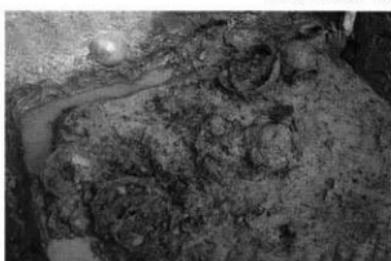
2区第1面(北から)



3区第1面(北から)



3区第2面(北から)



3区SO321(西から)



4区第1面(北から)



4区第2面(東から)



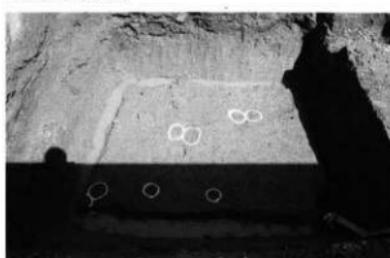
5区第1面(南から)



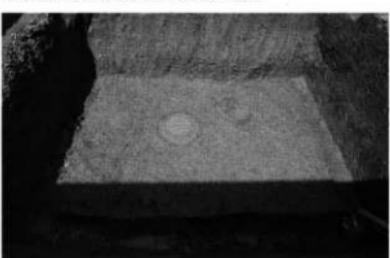
5区第2面(南から)



5区第8層内南東部土器出土状況(北から)



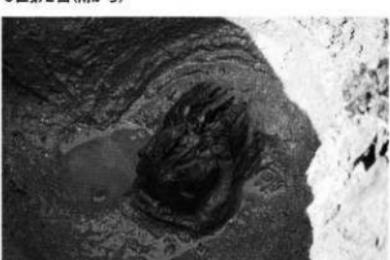
6区第1面(南から)



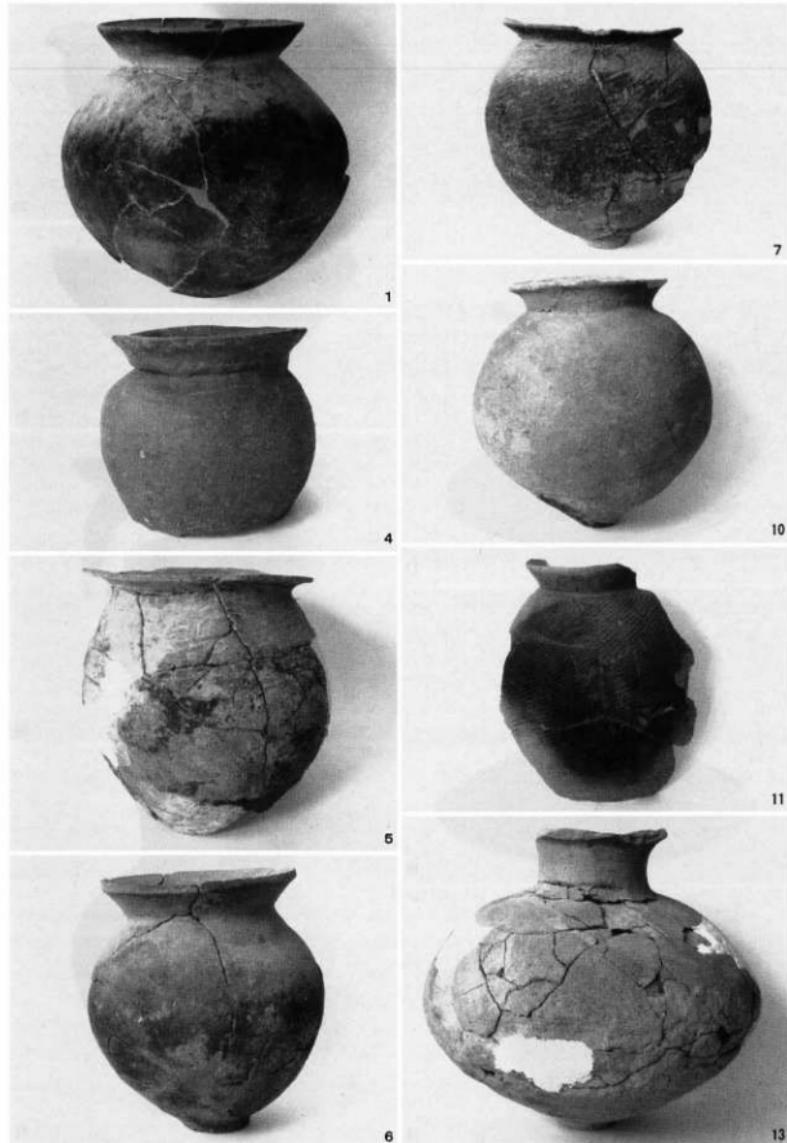
6区第2面(南から)



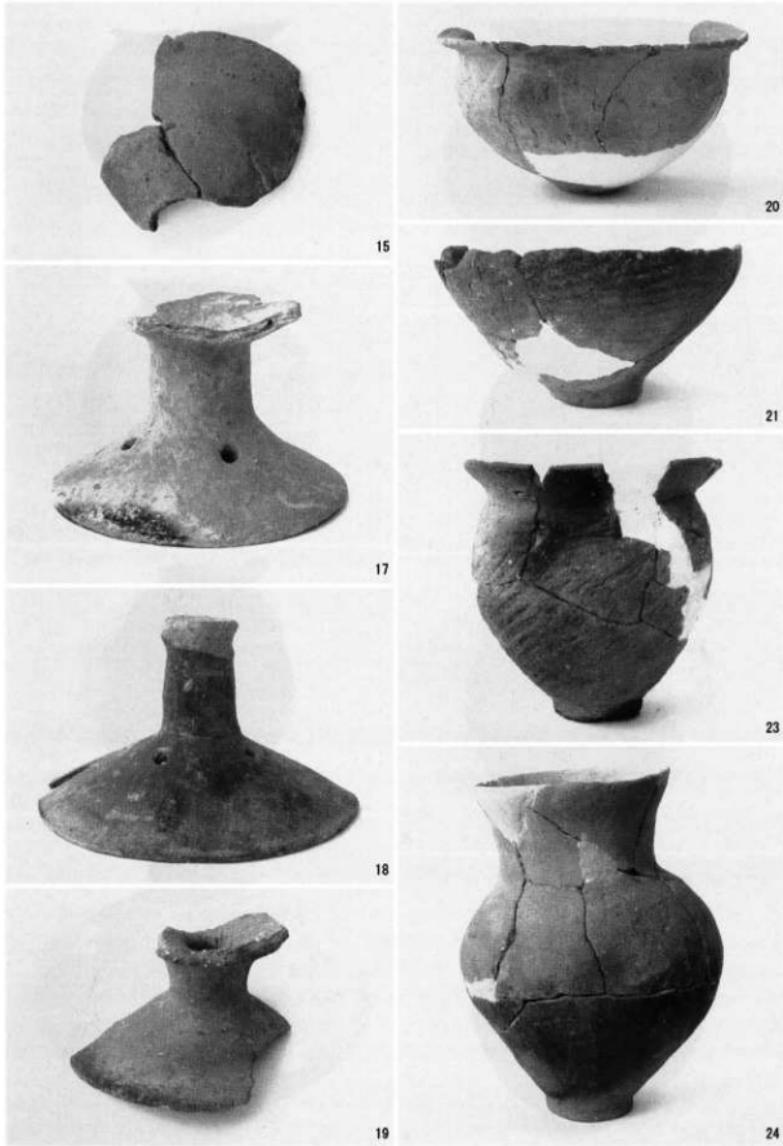
6区S P 621・622(西から)



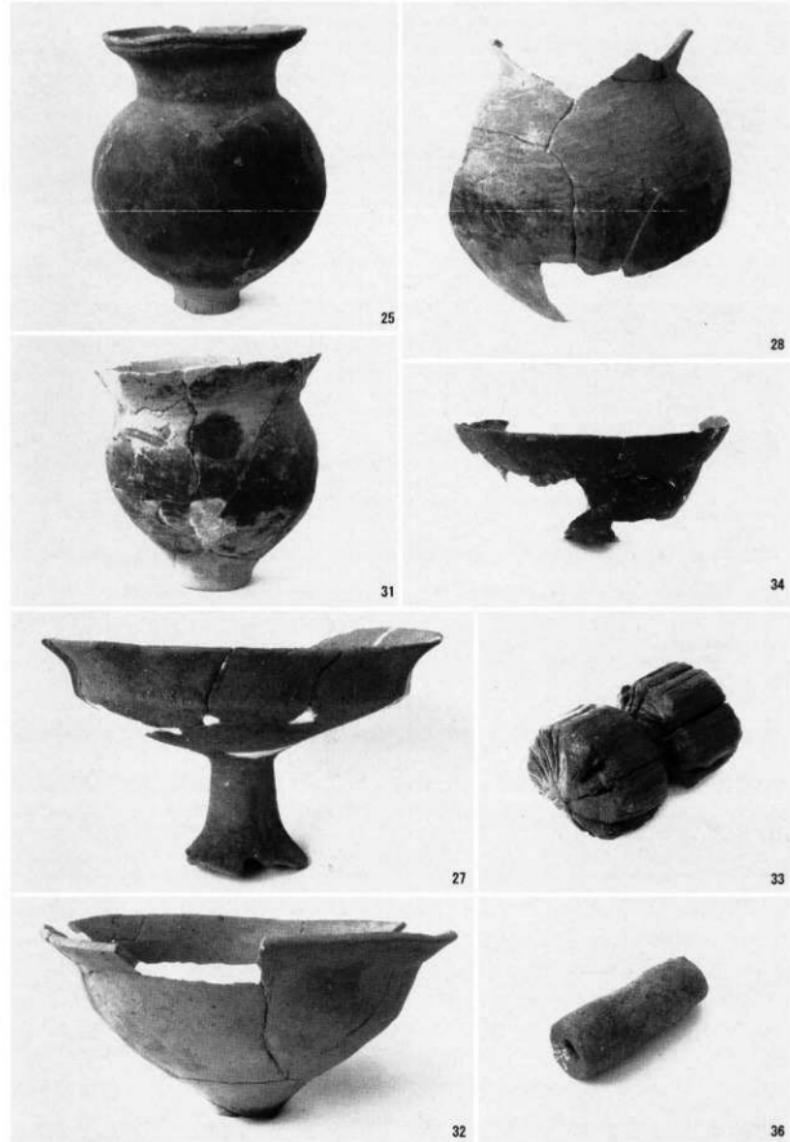
6区S P 621礎板(南西から)



SK121(1)、SO321(4~13)



S O 321(15~(21)、S D 521(23)、5区第8層(24)



5区第8層(25~32)、S P 621(33)、包含層(34・36)

IV 成法寺遺跡第22次調査(S H2010-22)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市清水町一丁目9番1、9番3で実施した事務所建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第22次(S H2010-22)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第687号 平成22年3月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾商工会議所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年5月27日～6月21日(実働15日間)にかけて、高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約504m²である。
1. 現地調査においては、飯塚直世・市森千恵子・梶本潤二・芝崎和美・田島宣子・永井律子・村井俊子・村田知子・徳谷尚子・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務、執筆・編集は高萩が行った。

本　　目　　次

第1章 はじめに.....	31
第2章 調査概要.....	32
第1節 調査方法と経過.....	32
第2節 基本層序.....	33
第3節 検出遺構と出土遺物.....	37
第3章 まとめ.....	38

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	31
第2図 調査区位置及び区割図	32
第3図 1区断面図	33
第4図 2~4区断面図	35
第5図 5~7区断面図	36
第6図 平面図	37

図 版 目 次

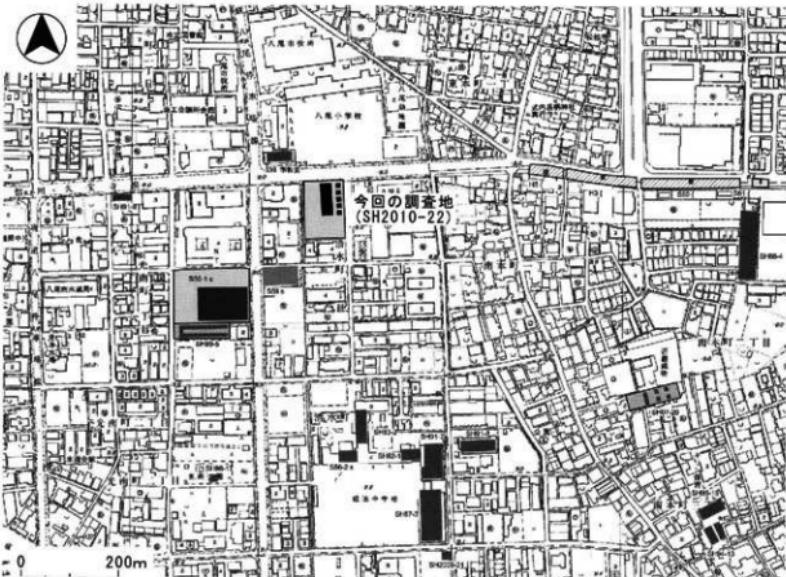
図版一	1区第2面(南から)	1区北部第1面(南から)
	1区中央第2面水田畦畔の高まり(東から)	1区南部第2面畦畔の高まり(南から)
	1区水田畦畔状の高まりの断面状況(東から)	1区下層確認トレンチ(南から)
	1区砂層下の確認(北から)	1区砂層下の確認(東から)
図版二	2区(西から)	2区(南から)
	3区(西から)	3区(南から)
	4区(西から)	4区(南から)
	5区(西から)	5区(南から)
図版三	6区(西から)	6区(南から)
	7区(西から)	7区(南から)
	1区調査状況(北から)	1区掘削状況(南から)
	7区機械掘削状況(西から)	7区人力掘削状況(南から)

第1章 はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する弥生時代～中世にかけての複合遺跡である。行政区画では光南町一・二丁目・清水町一・二丁目・南本町一～四丁目・高美町一・二丁目・松山町一丁目・明美町一丁目・陽光園一丁目に所在する。地理的には、河内平野中央付近を北西方向に流下する長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地しており、当遺跡周辺の同一沖積地上には東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡、南に矢作遺跡、北に東郷遺跡が接している。

当遺跡範囲内では、昭和56年度以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会により発掘調査が継続的に実施されており、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物の存在が確認されている。今回の調査地付近では、当地より南西100mの所で、市教委(1981年度)が実施した発掘調査で古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代後期の掘立柱建物などの遺構を検出している。さらにその西の隣接地では当研究会(1989年度)第5次調査で市教委が検出された古墳時代前期の方形周溝墓の南西部の一部、古墳時代中期の埴輪棺などを検出している。当地より南へ約250mの市立成法中学校内では5回(1982～1991年度)にわたり校舎等の建替工事に伴う調査で、古墳時代前期～奈良時代の遺構・遺物を検出している。

今回の調査地は当遺跡範囲内の北部に位置し、当研究会が実施する第22次調査(SH2010-22)にある。



第1図 調査地周辺図

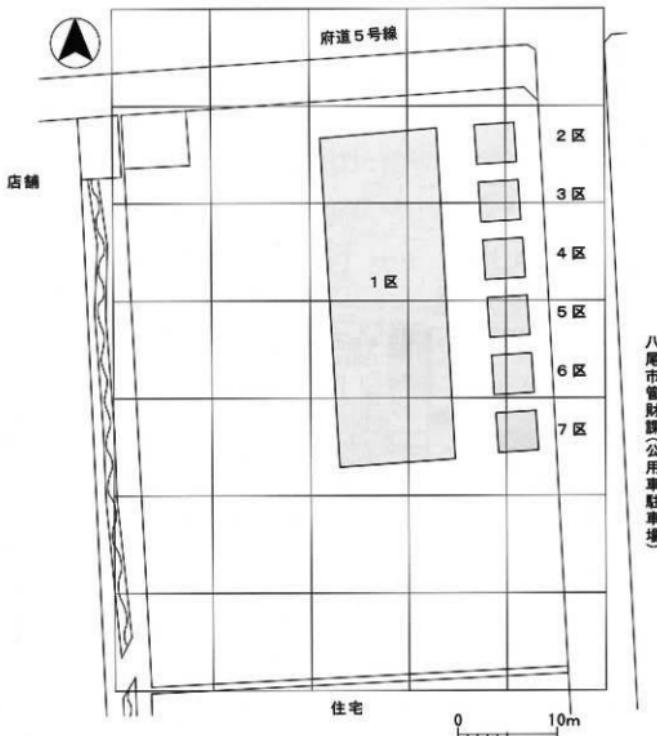
第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の調査は、事務所建設工事に伴う発掘調査である。発掘調査は市教委の指示書に基づいて申請者と協議を重ね、申請者・市教委・当研究会の三者による契約書の締結を交わした。

調査では市教委からの指示書に基づいて、調査地に建設される建物の基礎部分を対象に1～7区の7箇所の調査区を設定した。1区は $12 \times 34\text{m}$ の規模の調査区で、ほかは $4 \times 4\text{m}$ の規模の調査区6箇所である。調査总面积は約 504m^2 を測る。

掘削については、現地表下 2.1m までの地層について慎重に機械掘削で排除し、対象となる飛鳥時代～中世に比定される時期の層の検出に努めた。また、その下層については遺構・遺物の有無を確認するため、1区内に南北方向の下層確認トレンチ(規模幅 $0.5 \times 30\text{m}$)を設定した。さらに機械による掘削を行い、現地表下 4m までの地層の確認に努めた。



第2図 調査区位置及び区割図

第2節 基本層序

調査区は7箇所で、それぞれの調査区の地層を観察して断面図を作成した。以下、各調査区の層名及び断面図(第3図・第4図)である。なお、各調査区の層番号は頭に調査区番号を付した。(例: 1区2層→102層)

1区

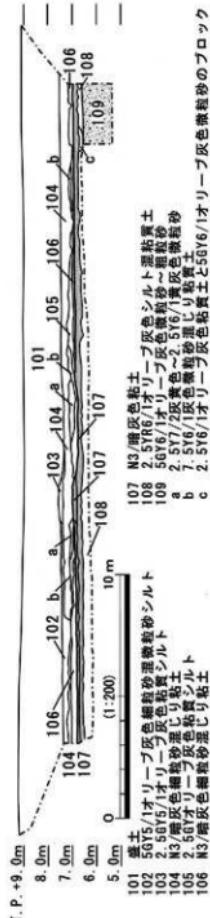
- 101層 盛土。層厚0.8~2.3m。1区では既往建物の基礎部分により深くまで削平されていた。
- 102層 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂混微粒砂シルト。層厚0.1~0.2m。
- 103層 2.5GY5/1オリーブ灰色粘質シルト。層厚0.8m。土師器片を含む。
- 104層 N3/暗灰色細粒砂混じり粘土。層厚0.2m。
- 105層 2.5GY1オリーブ灰色粘質シルト。層厚0.2m。土師器の小片を微量に含む。
- 106層 N3/暗灰色細粒砂混じり粘土。層厚0.15m。第1面。
- 107層 N3/暗灰色粘土。107" 層N3/暗灰色細粒砂混粘土。107" N3/暗灰色粘土。水田土。層厚0.1m前後。土師器の小片を微量に含む。水田土と考えられる。この上面が第2面である。
- 108層 2.5YR6/1オリーブ灰色シルト混粘質土。層厚0.2~0.5m。
- 109層 5GY6/1オリーブ灰色微粒砂~粗粒砂。層厚1.0m以上。洪水層。下部に植物遺体を含む。
- a層 2.5Y7/2灰黄色~2.5Y6/1黄灰色微粒砂。層厚0.2~0.3m。水平のラミナがみられる。
- b層 7.5Y6/1灰色微粒砂混じり粘質土。層厚0.2cm。
- c層 2.5Y6/1オリーブ灰色粘質土と5GY6/1オリーブ灰色微粒砂のブロック。

2区

- 201層 盛土。層厚0.8m。
- 202層 旧耕土。層厚0.1m。既往建物前までの耕作土である。
- 203層 5G4/1暗緑灰色シルト。層厚0.6m。
- 204層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.4m。
- 205層 10YR6/3にぶい黄橙色シルト混粘質土。層厚0.1~0.25m。
- 206層 N3/暗灰色粘土。層厚0.4m以上。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

3区

- 301層 盛土。層厚0.7m。
- 302層 旧耕土。層厚0.05~0.2m。
- 303層 5G4/1暗緑灰色シルト質土。層厚0.45m。
- 304層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.4m。
- 305層 7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト。層厚0.2m。



第3図 1区断面図

306層 N3/暗灰色粘土。層厚0.3m以上。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

4区

401層 盛土。層厚0.7m。

402層 旧耕土。層厚0.1~0.2m。

403層 5G4/1暗緑灰色シルト質土。層厚0.4m。

404層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.3m。

405層 7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト。層厚0.25m。

406層 5G6/1緑灰色微砂。層厚0.1m。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

407層 N3/暗灰色粘土。層厚0.4m以上。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

5区

501層 盛土。層厚0.8m。

502層 旧耕土。層厚0.2m。

503層 5G4/1暗緑灰色シルト質土。層厚0.45m。

504層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.3m。

505層 7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト。層厚0.15~0.25m。

506層 7.5YR5/1にぶい褐色粘質シルト。層厚0.2m。洪水層。

507層 10YR6/3にぶい黄橙色粘質シルト。層厚0.8m。

508層 N3/暗灰色粘土。層厚0.3m。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

6区

601層 盛土。層厚0.9m。

602層 旧耕土。層厚0.2m。

603層 5G4/1暗緑灰色シルト質土。層厚0.3~0.35m。

604層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.3m。

605層 7.5YR3/3にぶい褐色粘質シルト。層厚0.25~0.4m。

606層 7.5YR4/2灰褐色粘質土。層厚0.1m。

607層 N3/暗灰色粘土。層厚0.3m以上。水田土と考えられる。この上面が第2面である。

7区

701層 盛土。層厚0.8m。

702層 旧耕土。層厚0.1~0.15m。

703層 5G4/1暗緑灰色シルト質土。層厚0.6m。

704層 5G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.3m。

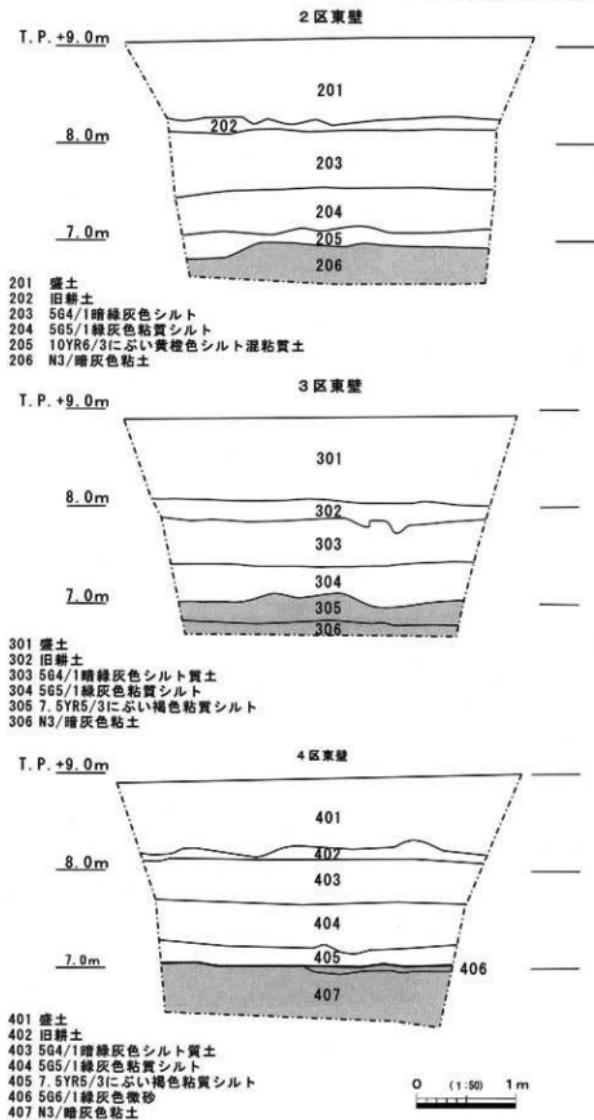
705層 5G6/1緑灰色シルト混粘質土。層厚0.2~0.3m。

706層 5G7/1明緑灰色微粒砂。層厚0.3m。

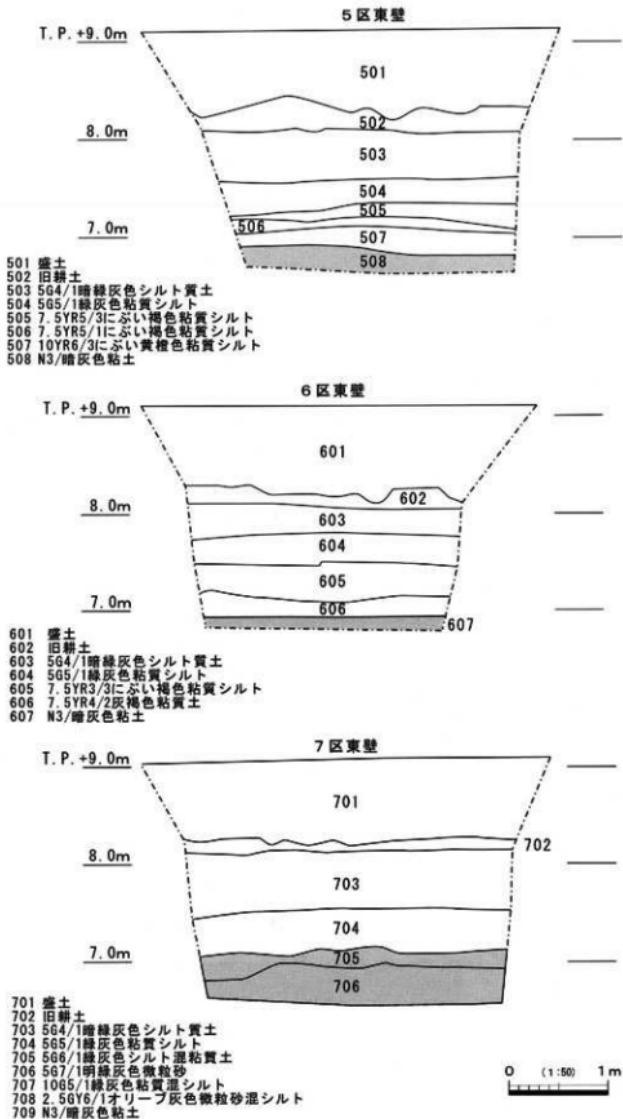
707層 10G5/1緑灰色粘質混シルト。層厚0.3m。

708層 2.5GY6/1オリーブ灰色微粒砂混シルト。層厚0.1~0.2m。洪水層。

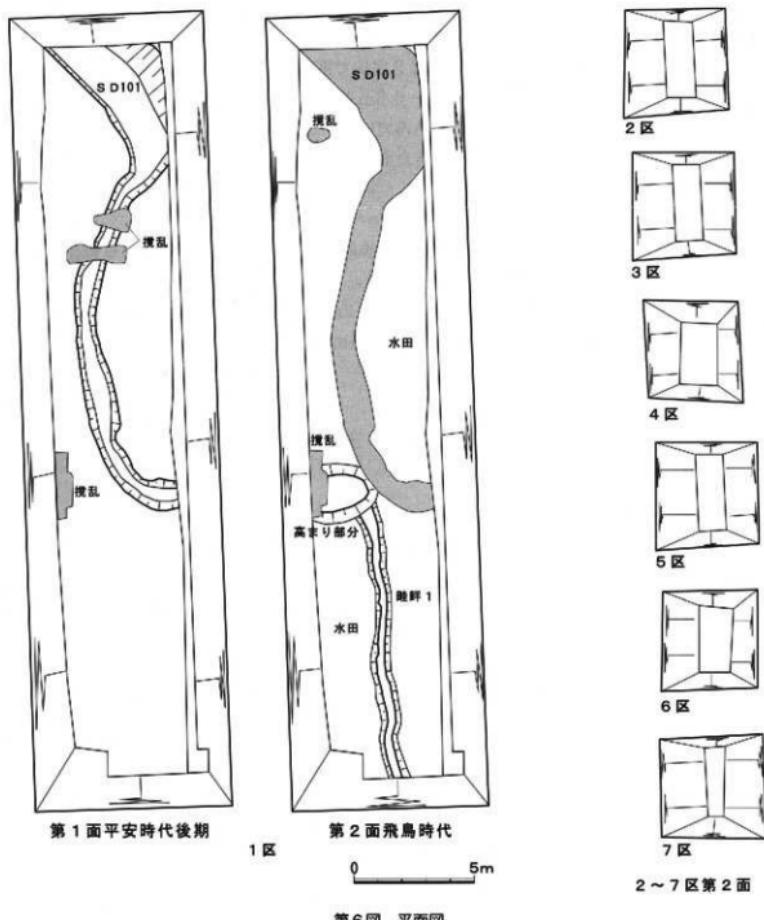
709層 N3/暗灰色粘土。層厚0.3m以上。水田土と考えられる。この上面が第2面である。



第4図 2~4区断面図



第5図 5~7区断面図



第6図 平面図

第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下2.2m(T.P. +7.2m)前後に存在する土層上面(第1面)で、中世(平安時代末～鎌倉時代)の溝1条(SD101)、現地表下2.5m(T.P. +6.9m)前後に存在する土層上面(第2面)で飛鳥時代ごろと考えられる水田を検出した。1区の中央部で高まり部分がみられ、そこから南へ伸びる畦畔状の高まりを検出した。調査で出土した遺物量はコンテナ箱に1箱分で、ほとんどが小片である。以下、検出した遺構・遺物について記す。

第1面

溝(SD101)

1区の北部で検出した溝である。溝は平面S字状で南北方向に伸びる。幅は1~3mを測り、北側が広がっている。検出部での深さは0.3~0.5mを測る。この溝は下層で確認されている水田を覆う洪水等の自然災害による層より切り込んでいる。この層からは平安時代後期ごろの遺物が出土しており、この時期又はそれ以後にできた溝と考えられる。

第2面

水田

全区で検出した水田である。水田面は平安時代後期頃の洪水等により埋没したものと考えられる。1区の南部で確認した水田面はフラットである。1区中央付近に径約1.5mの高まりがあり、そこから畦畔1が南方向に伸びる。畦畔1は幅約0.7m前後で、高さ0.03~0.05mの低いものであった。また、検出した水田面は1区の西端が約0.1m前後低くなっている。

第3章　まとめ

今回の調査は成法寺遺跡範囲の北部に位置し、遺構・遺物の存在が未知のところであった。周辺調査では南東に飛鳥~奈良時代の土師器・須恵器が多量に廃棄されている遺構、西に古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代後期の建物跡、南に古墳時代前期の土器類を含む溝、奈良時代の建物跡等が確認されている。さらに遺跡名を異にするが、当地より北西へ100mの地点で古墳時代前期の土器が集積する遺構を検出している。

今回の調査では、当遺跡で初めて飛鳥時代の水田が検出された。周辺の既往調査では北の市庁舎(東郷遺跡37次調査)で検出されており、関連がうかがえる。また当地は周辺調査で検出している同時期の遺構検出面より約0.5m以上低いことから生産域(水田)として土地利用されていものと推測される。

平安時代後期の時期のものは、飛鳥時代の水田が埋没した後にその上面から切り込んだ溝を検出しておらず、何回かの洪水等に見舞われていたものと考えられる。

参考文献

- ・高萩千秋他 1986『成法寺遺跡』八尾市光南町1丁目29番地の調査(財)八尾市文化財調査研究会報告1
- ・原田昌則他 1991『成法寺遺跡』<第1次~第4次・第6次調査報告>(財)八尾市文化財調査研究会報告33
- ・坪田真一 1992「I 成法寺遺跡(第5次調査)」「平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)」八尾市文化財調査研究会報告35
- ・原田昌則 1999「II 東郷遺跡第37次調査」財団法人八尾市文化財調査研究会報告64(財)八尾市文化財調査研究会

図 版



1区第2面(南から)



1区北部第1面(南から)



1区中央第2面水田畦畔状の高まり(東から)



1区南部第2面畦畔の高まり(南から)



1区水田畦畔状の高まり部分の断面状況(東から)



1区下層確認トレンチ(南から)



1区砂層下の確認(北から)



1区砂層下の確認(東から)



2区(西から)



2区(南から)



3区(西から)



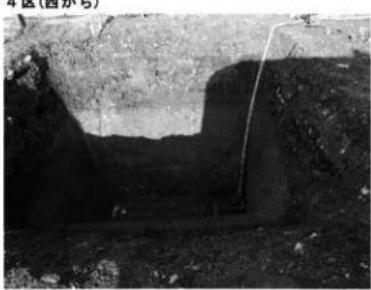
3区(南から)



4区(西から)



4区(南から)



5区(西から)



5区(南から)



6区(西から)



6区(南から)



7区(西から)



7区(南から)



1区調査状況(北から)



1区掘削状況(南から)



7区機械掘削状況(西から)



7区人力掘削状況(南から)

V 東鄉遺跡第70次調查(T G 2007-70)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市本町7丁目85番1他で実施した共同住宅建設に伴う東郷遺跡第70次調査(TG2007-70)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成20年3月3日に着手し、同年4月1日に終了した(実働20日)。調査面積は314m²である。
1. 現地調査には、梶本潤二・川崎純弘・芝崎和美・竹田貴子・田島宣子・中浜輝志・西出一樹・村井厚三・和田直樹の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成23年3月をもって終了した。
　　遺物復元 - 岩本順子・梶本・竹田・田島・都築聰子・中浜・西出
　　遺物実測 - 飯塚直世・市森千恵子・芝崎・永井律子・中野一博・中村百合・村井俊子・若林節子・和田
　　遺物トレース - 市森
　　遺構デジタルトレース - 坪田・米井友美(当時嘱託)
1. 本書の作成にあたっては、遺物レイアウト・遺物文章・遺物写真撮影を木村健明(当時嘱託)、遺構図作成を米井が主に担当し、それ以外は坪田が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめ	39
第2章 調査概要	40
第1節 調査方法	40
第2節 基本層序	40
第3節 検出遺構と出土遺物	41
第3章 まとめ	63

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	39
第2図	地区割り図	40
第3図	西区東壁断面図	41
第4図	第1面平面図	41
第5図	S O102出土遺物	42
第6図	S E 201平断面図	42
第7図	S E 201出土遺物	42
第8図	第2面平面図	43
第9図	S E 202平断面図	44
第10図	S E 202出土遺物	44
第11図	S E 203平断面図	45
第12図	S E 203出土遺物	46
第13図	S E 204平断面図	46
第14図	S E 204出土遺物	46
第15図	S E 205平断面図	47
第16図	S E 206平断面図	47
第17図	S E 206出土遺物	47
第18図	S E 207平断面図	48
第19図	S E 207出土遺物	48
第20図	S E 208平断面図	48
第21図	S E 209平断面図	49
第22図	S E 210出土遺物	49
第23図	S E 211出土遺物	49
第24図	S E 210・211平断面図	50
第25図	S E 212出土遺物	50
第26図	S E 212平断面図	51
第27図	S E 213平断面図	51
第28図	S E 214・215平断面図	52
第29図	S E 214出土遺物	52
第30図	S E 215出土遺物	53
第31図	S E 216出土遺物	53
第32図	S E 216～219平断面図	54
第33図	S E 217出土遺物	55
第34図	S E 218出土遺物	55
第35図	S E 219出土遺物	56
第36図	S E 220出土遺物	56
第37図	S E 220～222平断面図	57
第38図	S E 221出土遺物	58
第39図	S E 223・224平断面図	58
第40図	S E 224出土遺物	59
第41図	S D 201～204断面図	60
第42図	S D 201出土遺物	61
第43図	S O 201・202断面図	62
第44図	S O 202出土遺物	62
第45図	第4層出土遺物	63
第46図	井戸変遷図	64

表 目 次

表1	第2面土坑一覧表	59
表2	第2面ピット一覧表	60

図 版 目 次

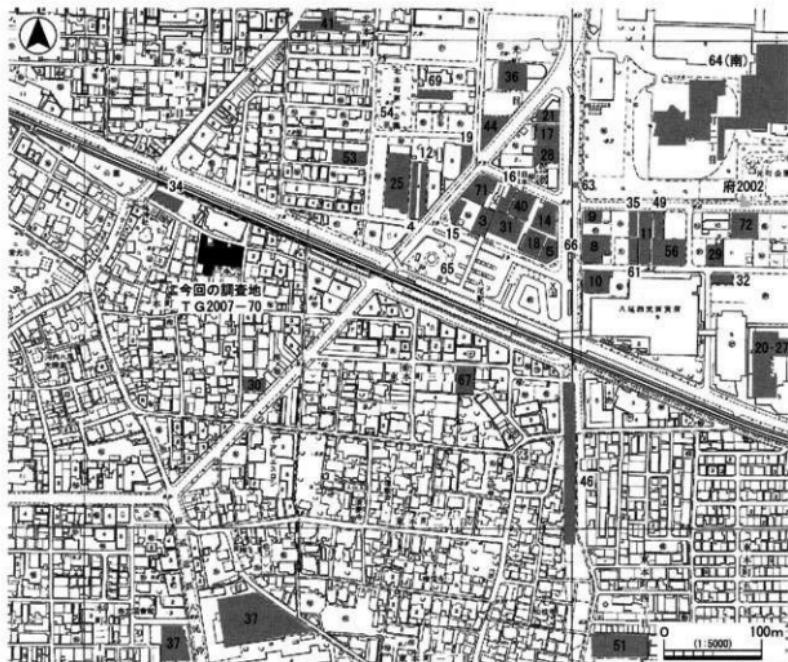
- 図版1 調査地全景(東から) 西区機械掘削(北東から)
西区第1面(北西から) 西区第2面(東から)
東区第1・2面(東から)
- 図版2 S E 201(東から) S E 202(北から) S E 202(上が北) S E 202(南から)
S E 203(北から) S E 203(南から) S E 203(上が南) S E 204(西から)
- 図版3 S E 205(南から) S E 205(南から) S E 206(東から) S E 207(南から)
S E 207(南から) S E 208(東から) S E 209(西から) S E 209(西から)
- 図版4 S E 210~224(南から)
S E 210・211(北東から) S E 211(北西から) S E 212(東から) S E 214・215(南から)
- 図版5 S E 214(南西から) S E 214(南から) S E 214(上が南) S E 215(北西から)
S E 216~218(北から) S E 216(北から) S E 217(北から) S E 216(北西から)
- 図版6 S E 218(北から) S E 216・218(北西から) S E 219(南から) S E 219(南から)
S E 220(東から) S E 220(上が西) S E 220(東から) S E 220~222(東から)
- 図版7 S E 222(東から) S E 223(西から) S E 224(東から) S E 224(東から)
S E 224(東から) S D 201畦北壁 S O 202(西から) 噴砂(西区南壁)
- 図版8 出土遺物 S E 201 S E 202 S E 203
- 図版9 出土遺物 S E 203 S E 206
- 図版10 出土遺物 S E 207 S E 210 S E 211 S E 212 S E 214
- 図版11 出土遺物 S E 215 S E 216 S E 217 S E 218
- 図版12 出土遺物 S E 219 S E 220
- 図版13 出土遺物 S E 220 S E 221 S E 224 S D 201
- 図版14 出土遺物 S D 201 S O 202 第4層

第1章 はじめに

東郷遺跡は八尾市の中央やや北西部に位置し、現在の行政区画では本町1・7、北本町2、東本町、光町、桜ヶ丘、莊内町がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。同地形上で北は萱振遺跡、南は成法寺遺跡、西は宮町遺跡、八尾寺内町、南東は小阪合遺跡と接している他、遺跡範囲内の東部は東郷廃寺推定地となっている。

当遺跡発見の契機は、昭和46年、八尾市東本町2丁目での水道管理設工事の際、墨書き人面土器が出土したことによる。そして昭和56年度以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、これらの成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。周辺では、北西約50m地点で第34次調査(TG90-34)を実施しており、平安時代後期・鎌倉時代・近代の造構・遺物が検出されている。

なお今回の調査地は、南北朝期の1336(延元元)年に修築され、1583(天正11)年に廃城となる『八尾城』の推定地の一画に当たっている。



第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は、平成20年2月3日に実施した遺構確認調査（東郷遺跡(2007-344)）の結果を受けて実施した共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が東郷遺跡内で行った第70次調査である。

調査地は1箇所であるが、残土処理の都合から西区・東区に分割し、西区→東区の順に調査を実施した。

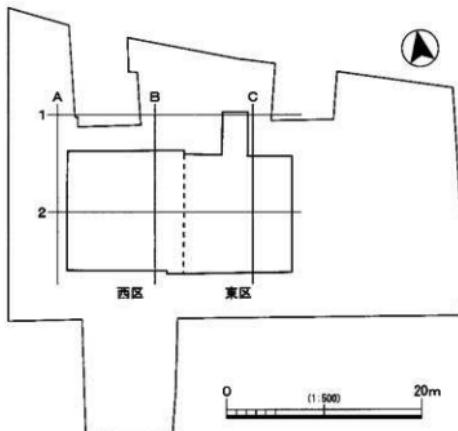
掘削は、現地表下1.2~1.4mを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行った。

地区割りは、調査区平面形に合わせて任意の10mメッシュを設け、南北ラインにアルファベット（西からA~C）、東西ラインに数字（1・2）を冠し、10m四方の地区名は北西交点のポイント（1 A~2 C）に代表させた。なお平板実測図と1/2500地形図との合成によると、この南北ラインは座標北から東に約10.0度振っている。

調査で使用した標高は、調査地の北東約250mに位置するベンチマーク（T.P.+7.755m）から運んだ。

調査面は機械掘削が終了し、人力による調査で検出された面を「第1面」と呼称し、以下、上から順に調査面番号を付した。

遺構名は、遺構略号+面+遺構番号とした。

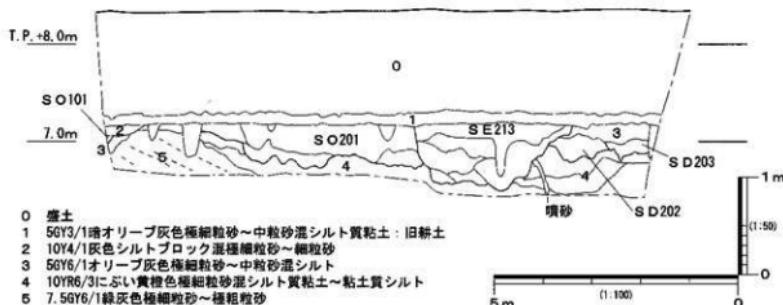


第2図 地区割り図

第2節 基本層序

西区東壁を基本層序とする。

第0層は盛土、第1層は旧耕土で、調査地全域に見られる。第2層は西区に見られる。第3層をブロック状に多く含む搅拌層で、作土であろう。第1・2層下面が第1面で、T.P.+7.0~7.1mを測る。第3層は調査地全域に見られる。土壤化し汚れた層相である。第4・5層は自然堆積層で、北から南東方向に下がる堆積である。上部は土壤化している。北部では第4層は見られない。西区では第4層を掘削しており、飛鳥~奈良時代に比定される土師器小形高杯、須恵器杯身が少量出土している他、調査前の遺構確認調査では飛鳥時代の土師器杯が出土している。第3~5層上面が第2面で、T.P.+6.9~7.0mを測る。なお調査区南部では、第5層の液状化による噴砂が随所に見られた。



第3図 西区東壁断面図

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

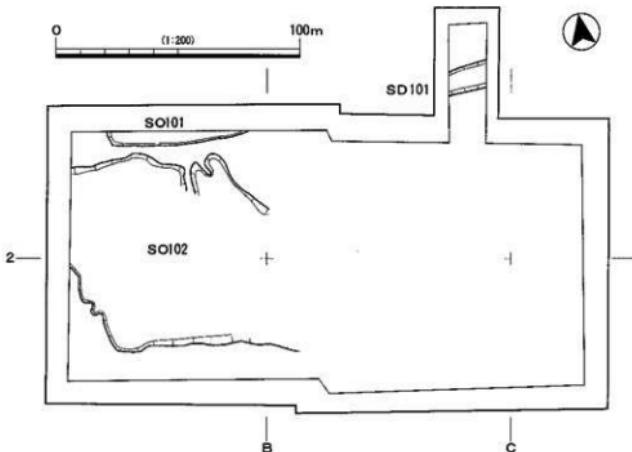
第1・2層の下面で、溝1条(SD101)、落込み2基(SO101・102)を検出した。近世の耕作関連遺構と考えられる。

SD101

1B区の第1層下面で検出した北東～南西方向の溝で、幅約1.0m・深さ約30cmを測る。断面逆台形を成し、埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混シルト～粘土質シルトである。遺物は13世紀前半の瓦器椀、土師器皿、須恵器甕片が出土しているが、巻き上げによるものであろう。

SO101

西区北端で南部を検出した落込みで、北に広がる。規模は東西5.7m以上・南北60cm以上・深



第4図 第1面平面図

さ約7cmを測り、埋土は7.5Y5/1灰色シルトブロック混極細粒砂である。位置的にSD101と連続する可能性もある。遺物は瓦器椀、須恵器片が出土しているが図化したものは無い。

S O102

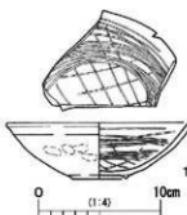
西区中央に広がる落込みで、規模は南北約8.0m・東西8.0m以上・深さ10~20cmを測る。埋土は7.5Y4/1灰色極細粒砂～細礫混粘土質シルト(ブロック状)である。遺物は土師器、瓦器、須恵器、陶器、屋瓦が出土しており、瓦器椀(1)を図化した。暗文は内面のみで、見込みは粗い格子状、体部～口縁部は圓線状である。高台は断面三角形状を呈する。13世紀初頭に相当する。

(第2面)

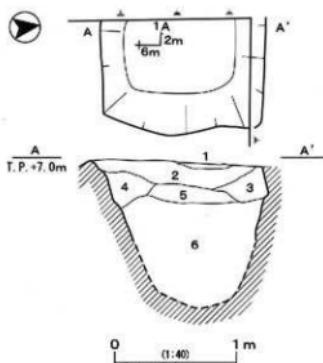
第4・5層上面で井戸24基(S E201~224)、土坑7基(S K201~207)、ピット10個(S P201~210)、溝5条(S D201~205)、落込み1基(S O201)を検出した。井戸は枠あるいは枠の痕跡を有するものが12基、その他は素掘り井戸あるいは枠を抜き取ったと思われるもので、規模等から井戸と判断したものである。なお第3層上面から切り込む遺構も含んでいる。

S E201

1A区北西角に位置し北・西が調査区外に至るため詳細は不明である。規模は南北1.5m以上・東西1.2m以上を測り、掘方平面形は方形を呈すると思われる。断面逆台形、深さ約1.2mで、埋土はブロック状の6層から成る。枠は認められない。遺物は瓦器摺鉢(2)、砥石(3)が出土した。2の口縁端部は面を成し、内面には条数は不明だが、1単位20本以上で構成される描目を施す。14世紀後半頃に比定される。3は砂岩系の砥石である。表裏および長側面に使用痕が認められる。全体に煤が付着する。長さ8.3cm、幅5.1cm、厚さ1.5cmを測る。

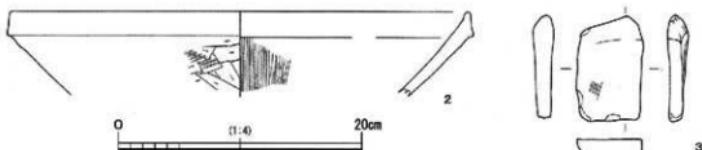


第5図 S O102出土遺物

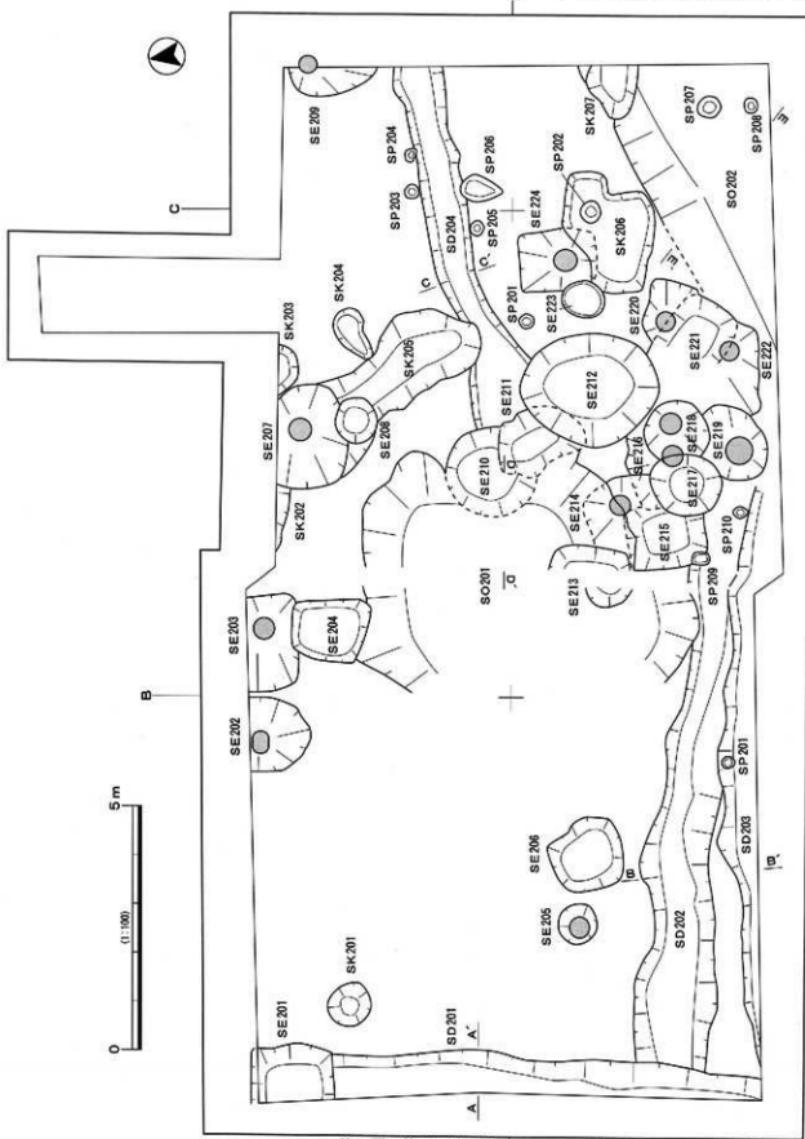


- 1 : 2.5Y5/1灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
- 2 : 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土ブロック状
- 3 : 5Y6/1灰色極細粒砂混シルト ブロック状
- 4 : 7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト ブロック状
- 5 : 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 6 : 2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂・粘土ブロック混粘土質シルト

第6図 S E201平断面図



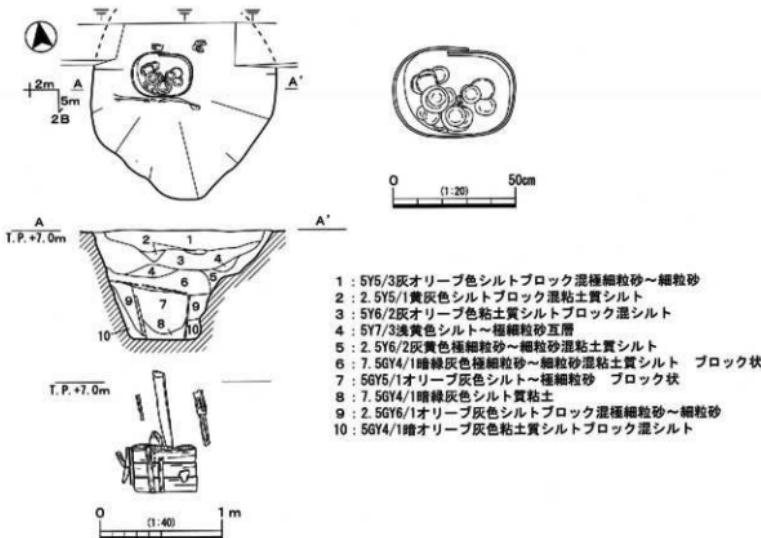
第7図 S E201出土遺物



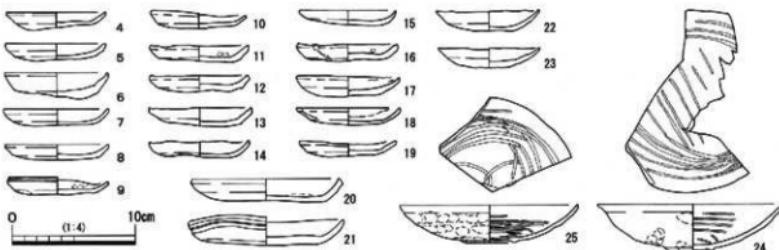
第8図 第2面平面図

SE 202

1 A区検出の曲物井戸である。掘方平面形は東西1.5m・南北1.5m以上の不整円形で、深さ約90cmを測る。曲物は梢円形で、掘方の中央やや西寄りに最下段のみが遺存しており、高さ約42cmを測る。曲物周囲には補強のための木杭・竹が巡る。埋土は10層から成り、1~7層は井戸廃絶後の埋め戻しに伴う層である。遺物は曲物内底部から完形の土師器皿19点・瓦器皿2点の他、土師器羽釜、瓦器碗、中国製青磁等が出土しており、4~24を図化した。4~21は土師器皿で、4~19が小皿、20~21が大皿である。いずれも口縁部にヨコナデ、底部内面にナデを施す。底部外側は未調整である。17~18以外は口縁部のナデが2段で、特に4・9・13は明瞭な面取りを施し、端面の中央にやや沈線が生じている。15・17・18以外は、ヨコナデにより、底部と口縁部の境に



第9図 SE 202平面断面図



第10図 SE 202出土遺物

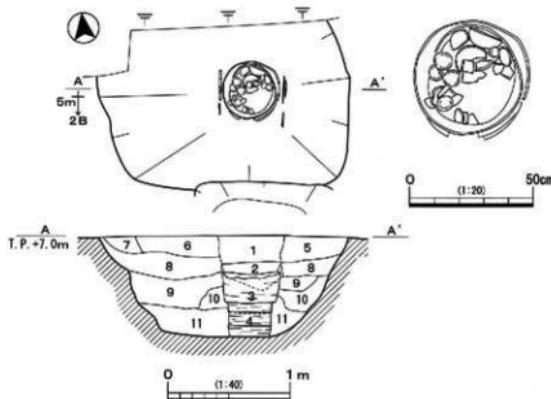
明瞭な段を生じる。12は底部に直線状の圧痕が認められる。16は外面に粘土板の接合痕跡が残る。19はヨコナデにより、口縁部外面に段が生じている。20は底部外面に直線状に圧痕が認められ、底部内面に指頭圧痕が残る。21は2段ナデを施すが、外面に圓線状のくぼみが生じている。底部中央にひび割れが認められる。22・23は瓦器皿である。口縁端部にヨコナデを施し、暗文は認められない。24・25は瓦器碗で、共に和泉型である。外面は指頭圧痕が認められるのみで、ヘラミガキは施さない。内面は粗いヘラミガキを施し、24は見込に平行線状暗文、25は連結輪状暗文を施す。高台は低平である。Ⅲ-3期に相当する。井戸の廃絶時期は13世紀前半に比定される。

S E 203

1区検出の曲物井戸である。掘方平面形は東西約2.0m・南北1.3m以上の隅丸方形に近い。深さ約80cmを測る。曲物は掘方の中央やや東寄りに下から2段分、高さ約55cmが遺存しており、曲物検出レベルでは方形枠と考えられる木材もわずかに遺存していた。埋土は枠内の1~4層、掘方の5~11層を確認した。遺物は曲物内底部から完形の土師器皿9点、瓦器碗4点、瓦器皿2点の他、土師器羽釜、中国製青磁等が出土しており、26~37を図化した。

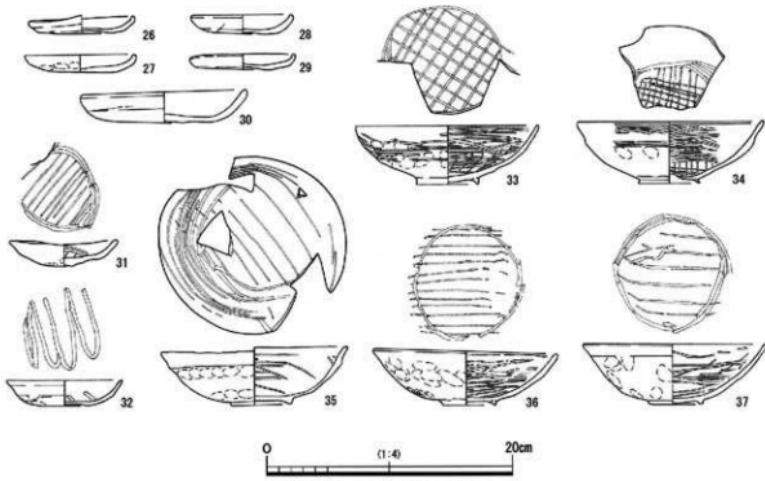
26~30は土師器皿である。26~29は口径8~9cmを測る小皿で、いずれも口縁部にヨコナデ、底部内面にナデを施し、底部外側は未調整である。27は完形であるが、平面形は楕円形を呈する。底部内面に煤が付着する。30は口径13.2cmを測る大皿で、内面に煤が付着する。灯芯の痕跡が認められることから、燈明皿として使用されたものである。31~32は瓦器皿である。ともに見込に平行線状暗文を施すが、31は9条とやや密に、32は4条と粗く施す。33~37は和泉型瓦器碗(Ⅲ-1~3期)である。33・34は外面に粗く、内面には密にヘラミガキを施す。見込は格子状暗文を施す。34はいぶしが不良で、灰白色を呈し、口縁部内面に浅い沈線が巡る。高台は断面三角形状を呈する。35~37は内面のみ粗いヘラミガキを施す。見込は平行線状暗文を施す。高台は低い四角形状を呈する。35は外面に煤が付着する。

これらの遺物から井戸の廃絶時期は13世紀前半頃に比定される。



- 1 : 7.5Y5/1灰色種細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 2 : 10YR6/2灰黄褐色種細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 3 : 7.5G0Y5/1緑灰色種細粒砂～粗粒砂混シルト～種細粒砂 植物遺体
- 4 : 2.5G0Y3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土
- 5 : 5Y5/1灰色種細粒砂～中粒砂混シルト～粘土質シルト ブロック状
- 6 : 10YR5/2灰黄褐色種細粒砂～中粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 7 : 2.5G0Y6/1オリーブ灰色種細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 8 : 5Y5/1灰色シルト～種細粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 9 : 10YR7/2c-1いぶい黄褐色シルトブロック混種細粒砂～粗粒砂
- 10 : 7.5G0Y5/1緑灰色種細粒砂～中粒砂ブロック質シルト
- 11 : 7.5G0Y6/1灰色粘土質シルトブロック混シルト

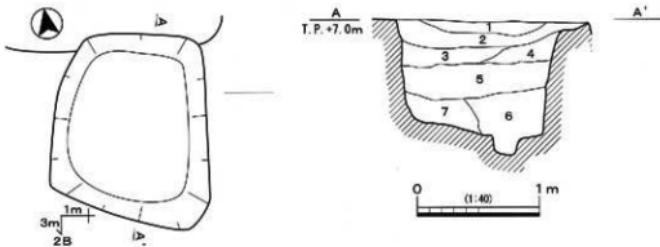
第11図 S E 203平面面図



第12図 S E 203出土遺物

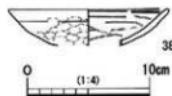
S E 204

1B区に位置し、北に隣接するS E 203を切っている。掘方平面形は東西約1.3m・南北約1.5mの隅丸方形で、深さ約1.1mを測る。枠は認められないが、底部は中央やや南寄りが窪み、ここに曲物を据えていた可能性がある。埋土はブロック状の7層から成る。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器碗、東播系須恵器鉢等が出土しており、これらから井戸の廃絶時期は13世紀後半頃に比定される。38は瓦器碗である。内面のみに粗いヘラミガキを施す。和泉型III～IV期か。



- 1 : 5Y5/3灰オリーブ色シルトブロック混極細粒砂～細粒砂
- 2 : 5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック混極細粒砂～細粒砂
- 3 : 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土ブロック混極細粒砂
- 4 : 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～粗粒砂
- 5 : 5GYS/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～粗粒砂
- 6 : 2.5GYS/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混シルト～細粒砂
- 7 : 2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混シルト

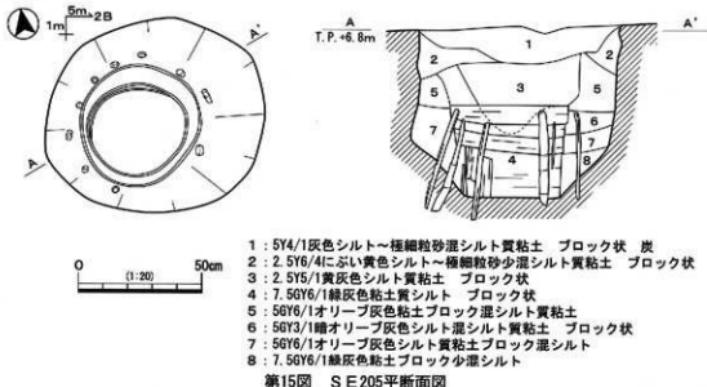
第13図 S E 204平面面図



第14図 S E 204出土遺物

S E 205

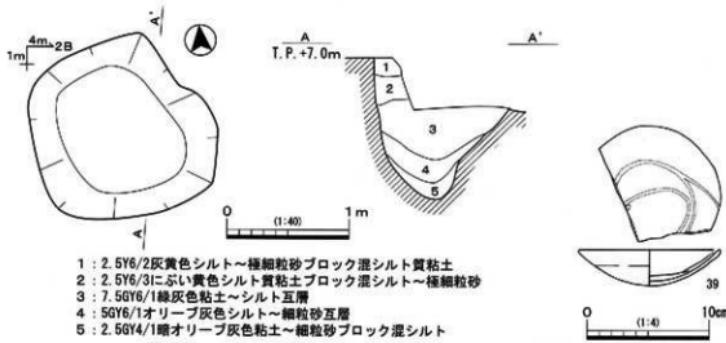
2 A 区検出の曲物井戸である。掘方平面形は東西約90cm・南北約80cmの円形で、深さ約70cmを測る。曲物は掘方の中央家や西寄りに下から2段、高さ約38cmが遺存しており、曲物周囲には補強のために打ち込んだ木杭・竹が巡っている。埋土は8層から成り、1~4層は井戸廃絶後の埋め戻しに伴う層、5~8層は掘方埋土である。遺物は土器師皿、瓦器椀、東播系須恵器鉢等が出土している。図化したものはないが、これらの遺物から、井戸の廃絶時期は13世紀後半頃に比定される。



第15図 S E 205平面面図

S E 206

2 A 区に位置し、掘方平面形は直径約1.5mの不整円形で、深さ約1.2mを測る。埋土は6層から成り、中層はラミナの見られるシルト～粘土互層、上層・下層はブロック状を呈する。枠は認められない。遺物は土器師皿・羽釜、瓦器椀、東播系須恵器鉢、陶器、平瓦、動物遺体(亀)等が出土しており、瓦器椀(39)を図化した。内面に粗い螺旋状暗文を施し、高台をもたない和泉型IV-3期に相当する。井戸の廃絶時期は13世紀末～14世紀初頭頃に比定されよう。



第16図 S E 206平面面図

第17図 S E 206出土遺物

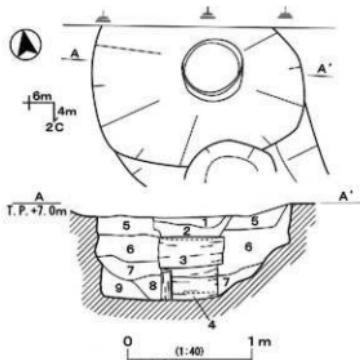
S E 207

1 B 区検出の曲物井戸である。掘方平面形は東西2.05m・南北1.2m以上の円形と思われ、深さ約80cmを測る。曲物は掘方の中央に下から2段、高さ約52cmが遺存している。埋土は9層から成り、1～4層は枠内、5～9層は掘方埋土である。1～3層は埋め戻しに伴う層と考えられ、4層の細疊層は機能時に枠内底部に敷かれていた層であろう。遺物は土師器皿・竈、瓦器椀・壺、東播系須恵器鉢、龍泉窯青磁、常滑焼、平瓦・瓦、木製品(横樋)等が出土しており、掘方出土の40、枠内出土の41・42を図化した。

40は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、体部内面にナデを施す。41は瓦器椀である。内面にのみ粗いヘラミガキを施す。断面が三角形状を呈する極めて低い高台をもつ。和泉型IV-2期に相当する。42は挽歯横樋で、黒漆塗りと考えられる。残存長8.4cm・残存幅3.8cm・棟幅0.8cm・棟厚0.9cmを測る。歯は極めて密に挽かれており、1cmあたり14本を数える。棟の断面形状では、背は丸く、高さ約2mmの挽実が生じている。出土遺物からみて井戸の廃絶時期は13世紀後半頃に比定される。

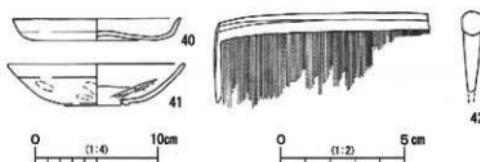
S E 208

1 B 区に位置し、北に隣接するS E 207を切っている。掘方平面形は直径約95cmの円形で、深さ約70cmを測る。埋土は5層から成る。枠は認められないが、埋土のうち互層状の自然堆積層である第4層が枠内埋土、第5層が掘方埋土とすれば、廃絶時に枠を抜き取ったとも考えられ、規模等も勘案して井戸とした。出土遺物は土師器羽釜、瓦器椀の細片のみで、時期は不明である。

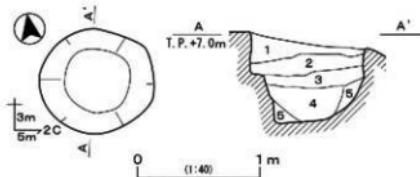


- 1 : 7.5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
- 2 : 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
- 3 : 7.5G4/1暗緑灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルト ブロック状
- 4 : 4.0Y6/1灰色シルト～粗粒砂混細織(～2cm)
- 5 : 7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
- 6 : 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状
- 7 : 2.5G5/1オリーブ灰色シルト～中粒砂 ブロック状
- 8 : 10Y6/1灰色シルト ブロック 混細粒砂～中粒砂
- 9 : 7.5Y5/1灰色シルト ブロック 混細粒砂～粗粒砂

第18図 S E 207平面面図



第19図 S E 207出土遺物



- 1 : 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 2 : 10Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土 ブロック状
- 3 : 5G6Y/1オリーブ灰色シルト質粘土 ブロック混シルト～細粒砂
- 4 : 2.5G4/1暗オリーブ灰色粘土～細粒砂互層
- 5 : 2.5G4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土 ブロック混細粒砂

第20図 S E 208平面面図

S E209

1C区検出の曲物井戸である。東部は調査区外に至るため詳細は不明であるが、掘方平面形は直径約1.8mの円形と思われ、深さ約1.0mを測る。曲物は掘方の北寄りに下から2段、高さ約42cmが遺存している。埋土は枠内で1層、掘方で1層を確認した。遺物は土師器片が出土したのみで、時期等は不明である。

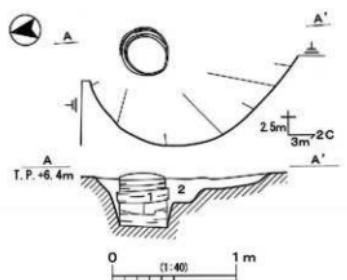
S E210

1・2B区に位置し、掘方平面形は直径約1.8mの円形で、深さ約1.4mを測る。埋土はブロック状の10層を確認した。枠は認められないが、規模等から井戸とした。遺物は土師器皿、瓦器椀・壺・三足釜、平瓦、刀子が出土しており、43・44を図化した。43は瓦器壺である。頭部の粘土紐接合部分が著しく分厚くなっている。口縁端部は短く外反し、端部は面を成す。体部外面に横位タタキを施す。44は鉄製品の刀子である。刃部の先端は欠損している。関部の背には段を有し、柄部に直径約2mmの目釘孔が1つ存在する。法量は残存長18.0cm、幅1.7cm、背の厚さ0.3cmを測る。

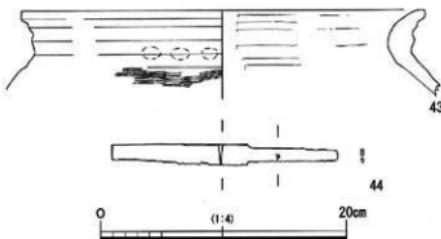
出土遺物から、井戸の廃絶時期は13世紀中頃に比定される。

S E211

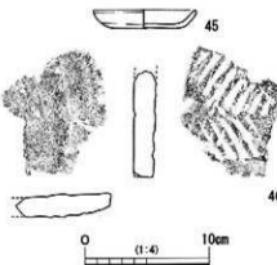
1・2B区に位置し、北に隣接するS E210を切っていいる。掘方平面形は南北1.7m以上・東西1.4m以上を測り、深さ約80cmを測る。埋土はブロック状の3層を確認した。枠は認められないが、規模等から井戸とした。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、東播系須恵器が出土しており、45・46を図化した。45は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、体部内面にナデを施す。46は平瓦である。磨耗が激しいが、凸面に綾杉文タタキを施すもので、東約0.8kmに位置する東郷廃寺所用の瓦と考えられる。出土遺物から、井戸の廃絶時期は13世紀後半に比定される。



第21図 S E209平面面図



第22図 S E210出土遺物



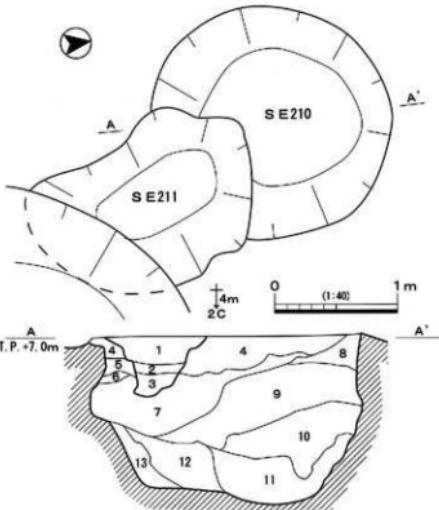
第23図 S E211出土遺物

SE 212

2B区に位置し、北に隣接するSE 211を切っている。掘方平面形は直径2.4~2.8mの円形で、深さ約1.0mを測る。埋土はブロック状の2層を確認した。枠は認められない。遺物は土師器皿、瓦器碗・壺、東播系須恵器壺、常滑焼、平瓦が出土しており、47~50を図化した。

47・48は東播系須恵器壺である。ともに頸部外面までタタキを施し、口縁部は短く外反する。端部は面を成す。47は口縁部の上面と外面全体に自然釉が付着する。49は常滑焼壺である。口縁端部を上方に拡張し、端部は面を成す。口縁内部上面と体部外面に自然釉が付着する。50は丸瓦である。凹面は布目で、糸切り痕が明瞭に残る。

出土遺物から廃絶時期は13世紀後半に比定される。



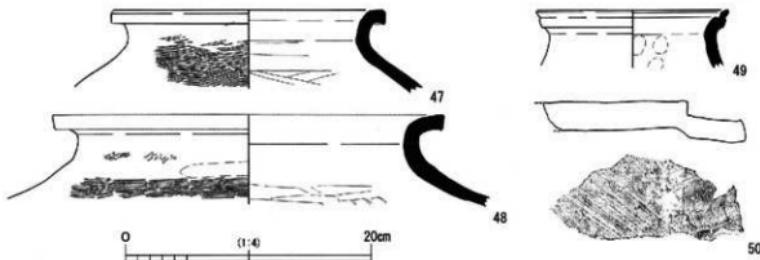
SE 211

- 1 : 2.5Y4/1黄灰色細粒砂～細礫、粘土質シルトのブロック
- 2 : 2.5Y5/3黄褐色細粒砂～中粒砂、粘土質シルトのブロック
- 3 : 5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂、シルト質粘土のブロック

SE 210

- 4 : 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂、シルト質粘土のブロック
- 5 : 2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土のブロック
- 6 : 7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂
- 7 : 2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂、シルト質粘土のブロック
- 8 : 10YR5/1褐色細粒砂～粗粒砂、シルト～粘土質シルトのブロック
- 9 : 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂、シルト～シルト質粘土のブロック
- 10 : 5GY5/1オリーブ灰色シルト～中粒砂、粘土のブロック
- 11 : 7.5GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂、シルト質粘土のブロック
- 12 : 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂少混シルト質粘土 ブロック状
- 13 : 7.5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂混シルト ブロック状

第24図 SE 210・211平面面図



第25図 SE 212出土遺物

S E213

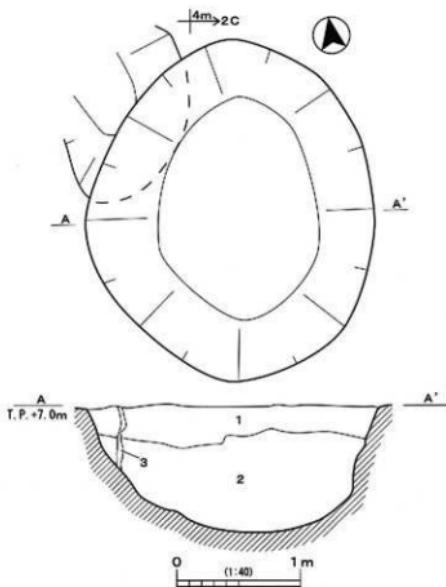
2B区、西・東区の境に位置する。西区ではS O201掘削時に上部を削平してしまっている。掘方平面形は南北約1.6m・東西約1.3mの不定形で、深さ約80cmを測る。埋土はブロック状の6層を確認した。枠は認められないが、1層中で立位の杭が見られ、枠等の何らかの構造物の痕跡と考えられる。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

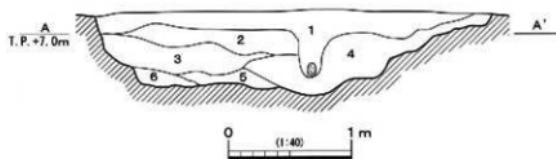
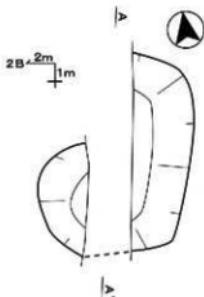
S E214

2B区検出の曲物井戸である。掘方は東西約2.0mであるが、南部をS E215に削平されているため形状等は不明である。深さは約1.2mを測る。曲物は掘方の東寄りに下から2段、高さ約60cmが遺存している。上部は一辺約70cmの方形を呈する縦板横棟構造で、高さ約55cmが北半部のみ遺存している。埋土は枠内で1~7層、掘方で8~13層を確認した。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、木製品(木球)等が出土しており、枠内出土の51~53を図化した。

51・52は瓦器椀である。51は口縁端部がヨコナデによって外反し、内面に段をもつ大和型である。外面に粗いヘラミガキ、外面に密なヘラミガキを施し、見込に同心円状暗文を施す。高台は断面三角形状を呈する。第Ⅲ段階A型式古段階に相当する。52は和泉型であり、内面のみ粗いヘ



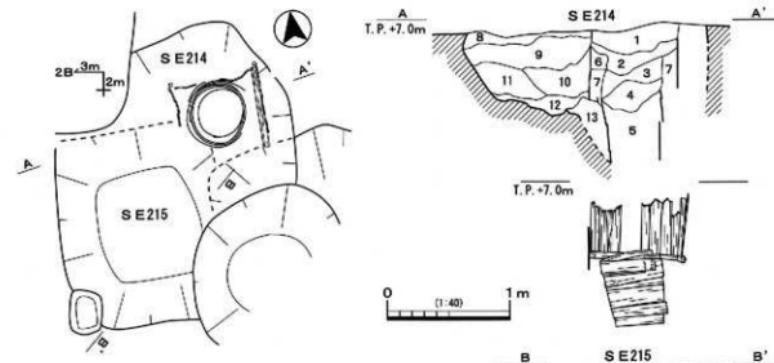
第26図 S E212平面面図
1 : 516/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトブロック
2 : 7.50Y6/1緑灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトブロック グライ化
3 : 噴砂



1 : 2.50Y5/1オリーブ灰色細粒砂～細粒混粘土質シルト～シルト ブロック状
2 : 7.50Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状
3 : 50Y5/1オリーブ灰色細粒砂～細粒混シルト ブロック状
4 : 2.50Y5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト ブロック状
5 : 7.516/1灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト ブロック状
6 : 10Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト ブロック状

第27図 S E213断面面図

ラミガキを施し、見込は平行線状暗文を施す。高台は断面三角形状を呈する。器高は高目であるが、和泉型Ⅲ-3期のものか。53は木球である。短径3.8cm、長径5.0cmを測る。幹から枝が4本出ている部分を使用している。加工は細かく施され、球形に近い状態になっているが、枝の部分



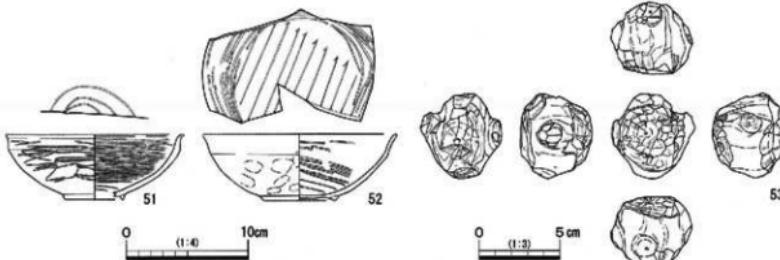
S E214

- 1 : 2.5G6/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
- 2 : 5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト
- 3 : 5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状
- 4 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト ブロック状
- 5 : 5G6Y/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト ブロック状
- 6 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂
- 7 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト
- 8 : 2.5G6/2灰黄色極細粒砂～中粒砂ブロック混シルト質粘土
- 9 : 10YR6/2灰黄色シルト質粘土～粘土質シルト ブロック状
- 10 : 5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土 ブロック状
- 11 : 2.5G6Y/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状
- 12 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 ブロック状
- 13 : 7.5G6Y/1緑灰色極細粒砂混粘土質シルト～シルト

S E215

- 1 : 10YR6/3/ぶい黄褐色細粒砂混シルト質粘土 ブロック状
- 2 : 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 ブロック状
- 3 : 5G6Y/1オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土～シルト ブロック状
- 4 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト ブロック状
- 5 : 2.5G6Y/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト ブロック状

第28図 S E214・215平面面図



第29図 S E214出土遺物

が若干盛り上がっており、やや角張った印象を受ける。出土遺物から井戸の廃絶時期は12世紀末～13世紀初頭に比定される。

S E215

2B区に位置し、掘方平面形は南北約1.7m・東西1.4m以上の隅九方形と思われ、深さ約1.1mを測る。埋土はブロック状の5層を確認した。枠は認められない。東部をS E217に削平されている。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、東播系須恵器、中国製白磁が出土しており、54・55を図化した。

54は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、底部にナデを施す。外面の一部に煤が付着する。55は瓦器椀である。体部内面のみ幅広の粗いヘラミガキを、見込には細い平行線状暗文を施す。口縁部内面に煤が付着する。器高は高目であるが、和泉型III-3期のものか。出土遺物から井戸の廃絶時期は13世紀前半に比定される。

S E216

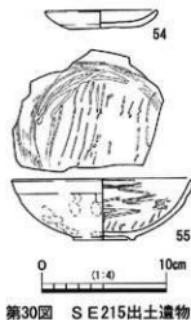
2B区検出の曲物井戸である。南部をS E217・218に、西部をS E214に削平されているため、掘方形状等は不明である。深さは約1.35mを測る。曲物は下から2段、高さ約55cmが遺存している。上部はS E214と同様の縱板横桟構造と考えられ、横桟の北辺のみが遺存していた。埋土は枠内2層、掘方1層を確認した。遺物は土師器羽釜、瓦器皿・三足釜等が出土しており、56～59を図化した。

56・57は瓦器皿である。ともに口縁端部がヨコナデによって外反する。見込には56は「×」状に圧痕が認められ、平行線状暗文を施す。57は不定方向の暗文を施す。58は瓦器椀である。体部内外ともに粗いヘラミガキを施す。和泉型III-2期に相当する。59は土師器羽釜である。口縁部が「く」字状に外反するもので、鋤下に煤が濃く付着する。森島分類のA型式、12世紀末に比定される。

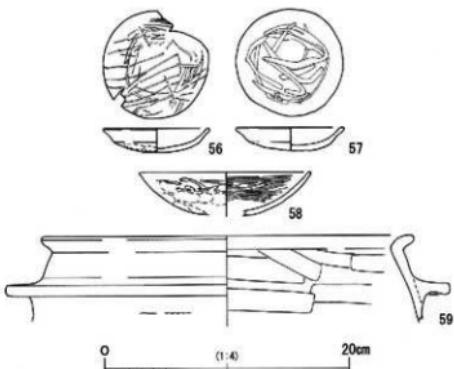
出土遺物から井戸の廃絶時期は12世紀末～13世紀初頭に比定される。

S E217

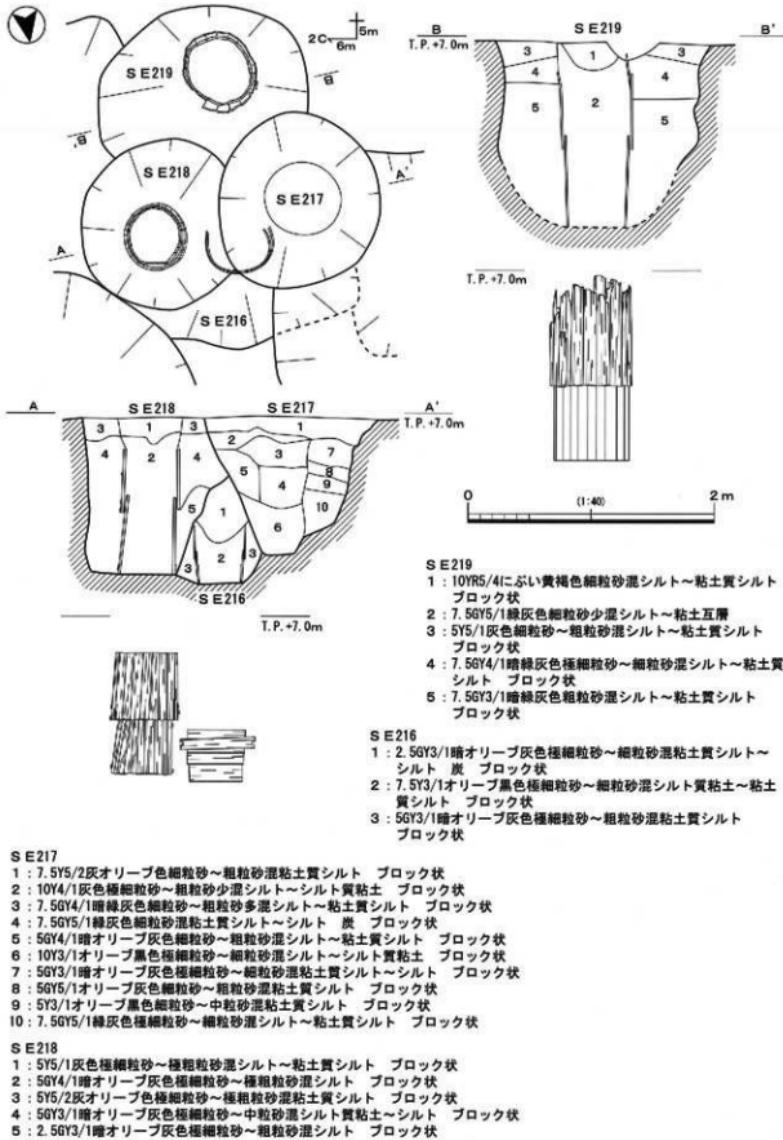
2B区に位置し、掘方平面形は直径約1.4mの円形を呈し、深さ約1.1mを測る。埋土はブロック状の10層を確認した。枠は認められないが、廃絶時に抜き取られたものと思われ、7～10層が本来の掘方埋土と考えられる。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、甕・羽釜、三足釜、平瓦(綾杉文タタキ)・丸瓦・道具瓦が出土しており、60～63を図化した。



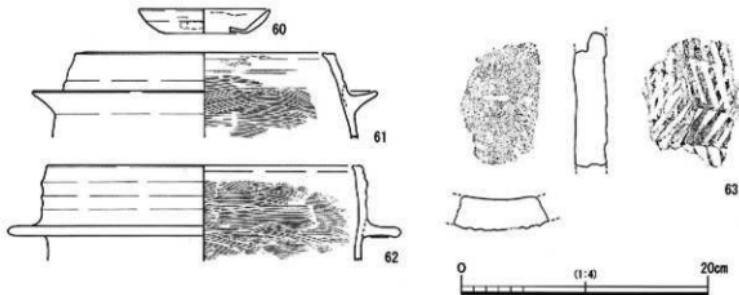
第30図 S E215出土遺物



第31図 S E216出土遺物



第32図 S E216～219平面図

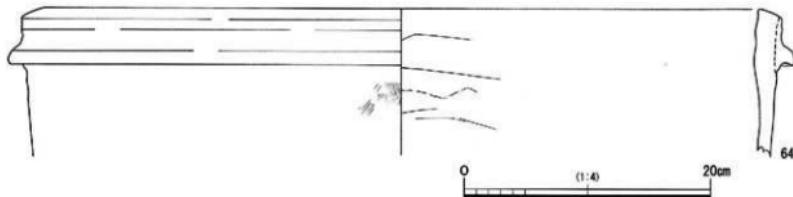


第33図 S E217出土遺物

60は土師器皿である。底部と口縁部の境が明瞭に屈曲する。61・62は瓦質土器羽釜である。61は口縁部がやや内傾し、62はほぼ直立する。ともに端部上面が水平な面を成す。鋤は61がやや斜め上方、62は水平にのびる。鋤の下には煤が付着する。森島分類のG型式である。63は平瓦である。凹面にナデ、凸面に綾杉文タタキを施す。凹面および断面の一部に煤が濃く付着することから、瓦の破片を何かに転用していたものと思われる。S E211出土の46と同様東郷廃寺所用の瓦と考えられる。出土遺物から井戸の廃絶時期は14世紀後半以降に比定されるが、S E218を切っていることから15世紀以降となる。

S E218

2B区検出の桶枠井戸である。西部をS E217に削平されているが、掘方平面形は南北約1.4m・東西1.2m程度の円形で、深さ約1.3mを測る。桶枠は掘方中央に位置し、直径約50cmを測り、2段が遺存している。上段は高さ約50cm、下段は高さ約65cmを測る。なお瓦器井筒片(64)が出土していることから、上部構造として井筒を使用していた可能性がある。埋土はブロック状で、枠内2層、掘方3層を確認した。遺物は土師器皿、瓦器梶・摺鉢・甕、東播系須恵器甕、平瓦が出土している。64は内径58.0cmを測り、口縁端部は外傾する面を成し、口縁部下方に断面台形を呈する鋤を巡らせる。出土遺物から井戸の廃絶時期は15世紀以降に比定される。



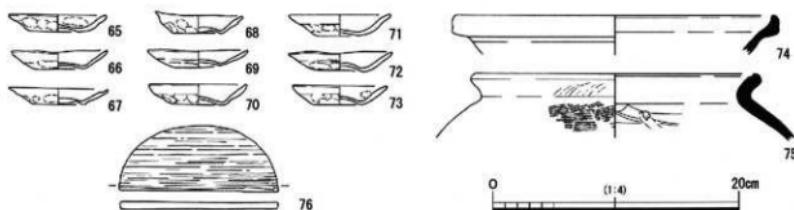
第34図 S E218出土遺物

S E219

2B区検出の桶枠井戸である。北部をS E217・218に削平されているが、掘方平面形は東西約1.7mで円形を呈すると思われ、深さ約1.5mを測る。桶枠は掘方の南寄りに位置し、直径約60cmを測り、2段が遺存している。上段は高さ約90cm、下段は高さ約75cmを測る。埋土はブロック状

で、枠内2層、掘方3層を確認した。なおS E218と同様、瓦器井筒片が出土していることから、上部構造として井筒を使用していた可能性がある。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀・火鉢・井筒、東播系須恵器鉢・陶器、平瓦・丸瓦、木製品が出土しており、掘方出土の65~74、枠内出土の75・76を図化した。65~73は土師器皿で、いわゆる「へそ皿」である。いずれも口縁端部にヨコナデ、底部内面にナデを施す。68・69・73は内面に灯芯の痕跡と思われる煤が付着する。74・75は東播系須恵器鉢・甕である。74は口縁部が外反した後、端部を上方に拡張するもので、端部は丸く収める。端部外面が黒色を呈する。第Ⅲ期第1段階に相当する。75は体部外面にタタキ、内面にナデを施し、口縁端部内面に凹線をもつ。口縁部内面および外面全体に自然釉が付着する。76は厚さ約6mmで、直径13cm程度の円形を呈すると思われる板材である。曲物底板と思われるが、釘穴などは認められないことから、はめ込み式の柄杓の底板等が考えられよう。

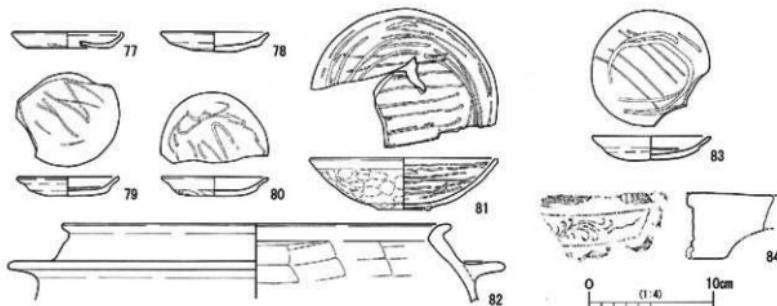
出土遺物から、井戸の廃絶時期は14世紀中頃以降に比定される。



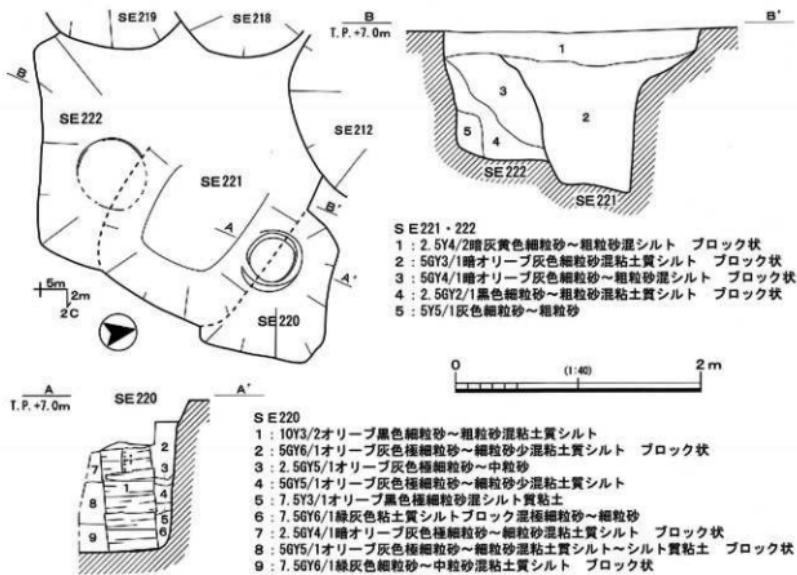
第35図 S E219出土遺物

S E220

2B区検出の曲物井戸である。南部をS E221に削平されているため、詳細は不明であるが、掘方平面形は東西1.2m・南北1.0m程度の方形に近いものと考えられる。深さは約1.2mを測る。曲物は下から3段、高さ約90cmが遺存している。埋土は枠内1層、掘方2~9層を確認した。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿・三足釜、東播系須恵器、平瓦・丸瓦等が出土しており、77~84を図化した。77~82は枠内出土、また83・84についてはS E221に帰属する可能性がある。



第36図 S E220出土遺物

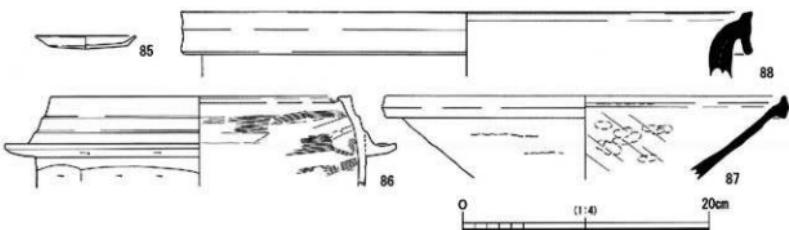


第37図 S E 220～222断面図

77は土師器皿である。底部と口縁部の境がヨコナデによって段を成し明瞭である。口縁部は2段ナデを施し、端部は屈曲して立ち上がる。78～80は瓦器皿である。いずれも口縁部はヨコナデによって外反する。見込の暗文は78が不定方向、79・80が平行線状である。79は内面、80は内外面ともいぶしが不良で、灰白色～灰色を呈する。81は瓦器碗である。内面のみ粗いヘラミガキを施す。見込は平行線状暗文を施す。和泉型III-3期に相当する。82は土師器羽釜である。口縁端部は短く外反し、端部は丸く収める。鍔はほぼ水平にのびる。口縁端部および鍔下に煤が付着する。83は瓦器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、端部が外反する。見込に平行線状暗文を施す。84は軒平瓦である。瓦当面は珠文をもたず、界線の内側に唐草文を施す。中心飾りは不明である。凹面は布目压痕が認められる。顎形態は、顎凸面と顎裏面は屈曲し、顎裏面と平瓦面は曲線を呈するF形態である。出土遺物から井戸の廃絶時期は13世紀前半に比定される。

S E 221

2B区に位置する。平面的にSE222との区別ができるいかなかったため詳細は不明であるが、掘方規模は東西約1.8m・南北1.6m程度で、深さ約1.3mを測る。埋土はブロック状の2層を確認した。枠は認められないが、瓦器井筒片が出土していることから、上部に井筒を使用していた可能性がある。なお面的には捉えられなかったが、西側のSE212・218との間に、もう1基井戸が存在した可能性がある。遺物は土師器皿・羽釜・瓦器碗・羽釜・井筒・常滑焼・中国製白磁・青磁・東播系須恵器・平瓦等が出土しており、85～88を図化した。



第38図 S E 221出土遺物

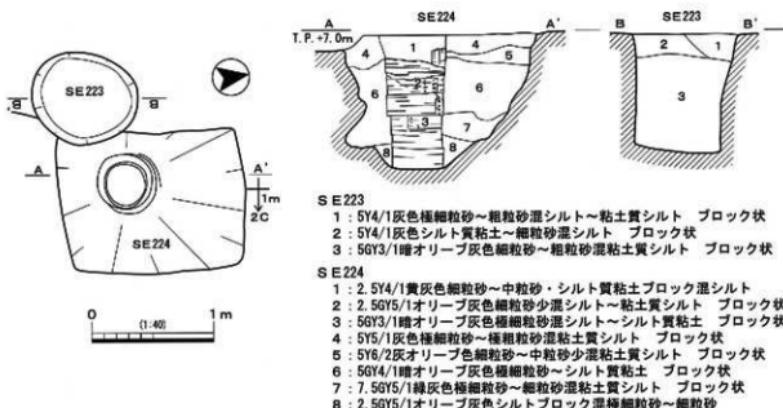
85は土師器皿である。底部と口縁部の境はヨコナデによって段を成し明瞭である。86は瓦器羽釜である。口縁部外面に段を持ち、口縁端部は面を成す。森島分類のF型式である。87は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上下に大きく拡張する。口縁端部外面に自然釉が付着する。第Ⅲ期第2段階に相当する。88は常滑焼壺である。口縁端部を上下に大きく拡張する。7型式に相当する。出土遺物から井戸の廃絶時期は14世紀代に比定される。

S E 222

2B区検出の桶枠井戸である。北部をS E 221に、西部をS E 219に削平されているが、掘方平面形は東西1.6m以上の方形と思われ、深さ約1.0mを測る。埋土はブロック状の3層を確認した。桶枠は廃絶時に抜き取られたようで、最下部の籠のみが遺存しており詳細は不明である。遺物についても掘方埋土を含めて大部分が削平されているため不明である。

S E 223

2B区に位置する。掘方平面形は直径約80cmの円形で、深さ約1.0mを測る。埋土はブロック状の3層から成る。枠は認められない。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器碗・鉢が出土しており、時期は13世紀代に比定される。



第39図 S E 223・224平面面図

S E224

2B区検出の曲物井戸である。南西部をS E223に削平されているが、掘方平面形は東西約1.2m・南北約1.5mの長方形を呈し、深さは約1.15mを測る。曲物は3段、高さ約90cmが遺存しており、上部には縦板がわずかに遺存していた。埋土はブロック状で、枠内1~3層、掘方4~8層を確認した。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、東播系須恵器、中国製白磁、平瓦等が出土しており、枠内出土の89~91を図化した。89は土師器皿である。平面形は梢円形を呈する。口縁部と底部の境はヨコナデによって段を成し明瞭である。口縁端部の1ヶ所に煤が付着しており灯明皿の可能性がある。90は瓦器椀である。内面のみに粗いヘラミガキ、見込に平行線状暗文を施す。高台は断面三角形状を呈するが、痕跡程度の状態である。和泉型III-3期に相当する。91は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上方に拡張し、端部は面を成す。端部の外面のみ黒色を呈する。第II期第2段階に相当する。

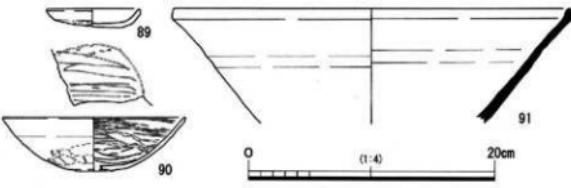
出土遺物から井戸の廃絶時期は13世紀前半に比定される。

S K201~207

平面形ではS K201が円形を成す以外は不整形なものである。S K201は深さ81cmを測り、井戸であった可能性もある。S K205は北部でS E207と接続する状況であり、何らかの有機的な関連が考えられる。遺物はS K205・206・207から14世紀代までの土師器・瓦器・須恵器が出土しているが、図化しえるものは無い。法量・埋土等は表1にまとめた。

S P201~210

主に東部で検出したが、規則性は見出せない。平面形では円形が多い。S P206が深さ50cmを測り、4層からなる埋土を有するが、他は深さ10~25cm程度で1~2層の埋土というものである。S P203~206はSD204の両肩間に位置しており、護岸の杭痕等の可能性も考えられよう。遺物表1 第2面土坑一覧表



第40図 S E224出土遺物

地区	平面形	法量(cm)			埋土
		長	短	深さ	
S K201	1A	円形	95	85	81 10W6/7明黄褐色土質シルトブロック混シルト～細粒砂 10W7/4にぶい黄褐色土質シルトブロック混シルト
S K202	1B	—	130以上	25以上	40 2.5G6/1オリーブ灰色シルト混細粒砂～細粒砂 2.5W6/25K黃色粘土質シルトブロック混細粒砂～中粒砂
S K203	1B	—	105以上	38以上	20 5G75/1オリーブ灰色粘土質シルトブロック混細粒砂～細粒砂
S K204	1B	梢円形	115	65	17 5W5/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト ブロック状
S K205	1B	不整形	400	160	15 2.5G74/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト 5W5/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト ブロック状
S K206	2B-C	不整形	250	185	29 10W4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト～粘土質シルト ブロック状
S K207	2C	—	115以上	100	35 5G74/1暗オリーブ灰色細粒砂

表2 第2面ピット一覧表

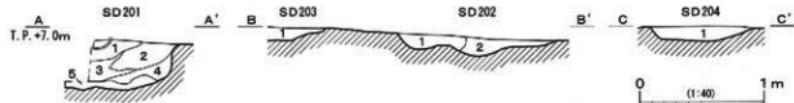
	地区	平面形	法量(cm)			埋土
			長	短	深さ	
S P 201	2A	円形	23	23	15	10YR5/2灰黄褐色シルト混シルト質粘土
S P 202	2B-C	円形	45	40	25	10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土 ブロック状
S P 203	1C	円形	28	25	20	5Y4/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト 5Y4/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂混シルト
S P 204	1C	不整形	30	20	13	7.5Y4/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
S P 205	1B	円形	32	28	11	7.5Y4/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混シルト
S P 206	1C	不整形	88	55	50	5Y4/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混シルト 5Y4/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 5Y5/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 7.5Y4/1灰褐色粘土ブロック混細粒砂～粗粒砂
S P 207	2C	円形	45	45	9	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト
S P 208	2C	円形	30	28	9	5Y5/1灰褐色細粒砂混シルト 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト
S P 209	2B	方形	35	25	23	2.5Y5/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
S P 210	2B	椭円形	30	25	26	2.5Y4/1灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 炭

はS P 206から平安時代頃の土師器・須恵器片、S P 207・208から時期不明の土師器片が出土した。法量・埋土等は表2にまとめた。

S D 201

調査地西端に位置する南北方向の溝で、東肩を検出した。規模は検出長8.7m・幅1.4m以上・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈する。埋土は4~6層から成り、ブロック状を呈する部分と、シルト～粘土の互層状を成す部分が見られ、最終的には人為的に埋められている。南部でS D 202を切っており、北部ではS E 201に切られている。また北部は北壁に及んでいないことから、S E 201付近で終結しているか、あるいは西に屈曲しているものと捉えられる。遺物は主に上層から12世紀中頃の土師器皿・羽釜、瓦器椀、輸入磁器等が出土しており、92~105を図化した。

92~99は瓦器椀である。いずれも和泉型II-2期相当で、外面に粗いヘラミガキ、内面に密なヘラミガキを施す。見込の暗文は99のみ平行線状で、他は格子・斜格子状である。98の見込には細かいハケが認められる。高台は97が断面台形状を呈する以外は、断面三角形状を呈する。100・101は土師器皿である。100は口縁の一部が片口状に下がる。101は器表面が灰白色を呈する。



S D 201

1. 5Y5/1灰褐色細粒砂～中粒砂少混シルト質粘土
2. 5GY5/1オリーブ灰色質粘土～シルト質粘土互層 植物遺体
3. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土ブロック混細粒砂～中粒砂
4. 2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土ブロック混シルト
5. 2.5Y6/1黄灰色粘土～シルト互層

S D 203

1. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
ブロック状

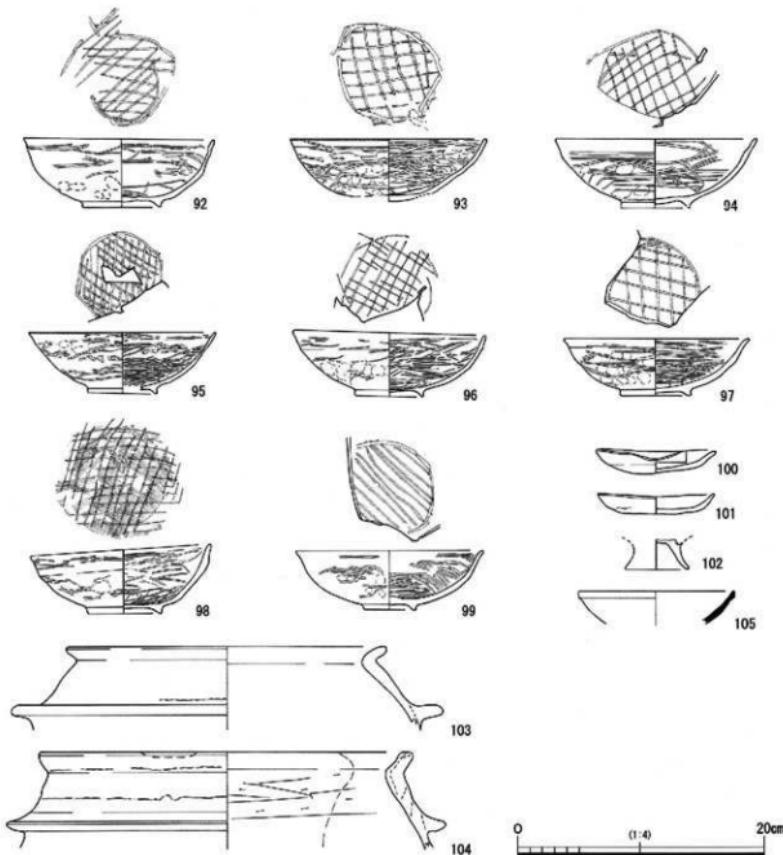
S D 204

1. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混シルト質粘土

S D 202

1. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～粗粒砂
2. 7.5GY6/1綠灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト ブロック状

第41図 S D 201~204断面図



第42図 S D 201出土遺物

102は土師器台付皿で、脚台部のみ残存しており、上面は接合面で剥離する。103・104は土師器羽釜で、ともに森島分類のA型式である。103は口縁端部を丸く收め、104は面を成す。104は内面に濃く煤が付着する。105は白磁碗である。口縁部に小さな玉縁をもつ太宰府分類のⅢ類である。残存範囲は内外面とも施釉される。

S D 202

調査地南部に位置する東西方向の溝で、深さ10~20cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はブロック状の2層からなる。時期不明の土師器片が少量出土している。

SD 203

調査地南端に位置する東西方向の溝で、深さ約10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単一層である。SD 202を切っている。中世頃の土師器、須恵器、瓦器碗が出土している。

SD 204

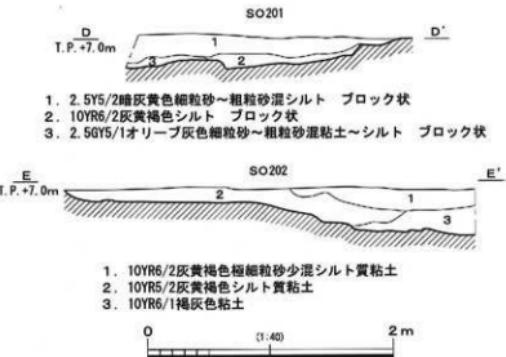
東区で検出した東西方向の溝である。規模は検出長7.6m・幅0.7~1.3mで、深さは10~15cm程度であるが、東端では深さが増し約50cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は単一層である。SE 210~212やSK 205に切られている。遺物は出土していない。

SO 201

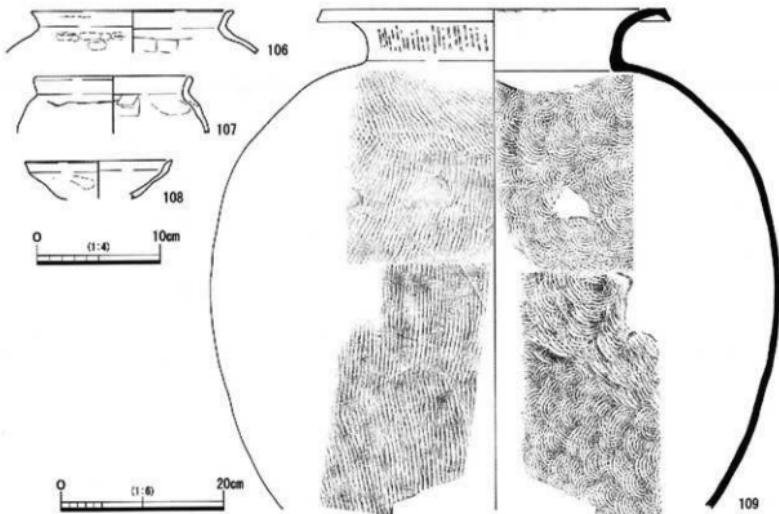
調査地中央で検出した落込みで、南北7.0m・東西5.0m以上・深さ最大45cmを測る。埋土はブロック状で、最大4層から成る。遺物は土師器皿、羽釜、瓦器碗、摺鉢、常滑焼、平瓦、焼土(壁?)が出土している。

SO 202

南東部で北東-南西方向の北肩を検出した。規模は検出長8.0m・幅3.4m以上・深さ最大38



第43図 SO 201・202断面図



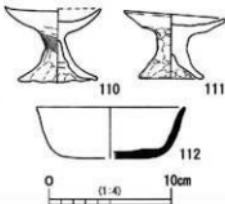
第44図 SO 202出土遺物

cmを測る。落ち込みとしたが、第4層と一連の堆積部分の可能性もある。また東壁では底のラインが南に上がってゆく状況が見られたことから溝の可能性もある。10世紀代に比定される土師器椀・甕、須恵器甕、黒色土器椀が出土しており、106～109を図化した。

106・107は土師器甕である。106は短い頸部をもち、口縁端部を外方へ拡張する。107は短い頸部をもち端部は丸く收める。体部外面に粘土紐の接合痕跡が認められる。108は土師器椀である。口縁端部は上方につまみあげる。109は須恵器甕である。口縁端部は下方に拡張し、面を成す。調整は外面が平行タタキで、体部は縦方向、肩部以上は左上がりの斜方向である。また頸部外面にも縦方向の平行タタキが残る。内面は同心円タタキを施す。

第4層出土遺物

第4層については西区で掘削を行っており、飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が出土した。110・111は手捏ね成形による土師器高杯である。皿状の杯部をもち、脚台部は粗雑なナデを施す。脚部内面には指頭圧痕が認められる。112は須恵器杯身である。底部から口縁部が斜め上方にのびる。口縁部は丸く收める。これらは奈良時代前半頃に比定される。



第45図 第4層出土遺物

第3章まとめ

今回の調査では、飛鳥～奈良時代の堆積層、及び平安時代～近世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ15箱である。

地層の観察から、調査地北側に流心をもつ東西方向の河川の存在が想定され、当地はその南に広がる後背湿地上に当たると考えられる。この堆積の最終段階と捉えられる層位(第4層)からは飛鳥～奈良時代の土器が出土しており、北側の自然堤防上に当該期の集落の存在が考えられる。

平安時代前半では南東部のS O202から土器が出土している。この北側に集落が存在するものと考えられるが、本調査では検出されなかった。平安時代後半では西端で南北方向の溝S D201を検出した。西に屈曲する可能性があり、集落の区画溝等の機能が考えられる。

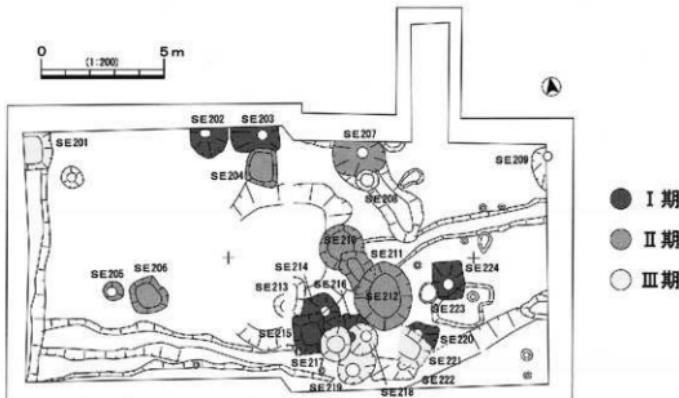
平安時代末～室町時代では24基もの井戸が検出され、特に2B区で見られた重複する井戸群は特筆される。200年以上に亘って7～8m四方の狭い範囲内に井戸の構築を続けており、単に湧水の豊富な地点であったのか、あるいは何か別の意味があるのか注目される。井戸群についても廃絶時期により大まかにI期(12世紀末～13世紀前半)、II期(13世紀後半～14世紀前半)、III期(14世紀後半以降)に分類した。井戸の構造ではI・II期が曲物、III期が桶となる。II～III期が八尾城の時期に相当すると考えられるが、今回の調査で当該期の遺構が確認されたことにより、調査地周辺に八尾城が存在した可能性が高くなったと言えよう。

註

- ・坪田真一2009「4) 東郷遺跡(2007-344)の調査」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告59 平成20年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

参考文献

- ・奈良歴史博物館1995「春季企画展 日本の櫛-別れの御櫛によせて-」
- ・中世土器研究会編1995「概説 中世の土器・陶磁器」
- ・森島康雄1990「中河内の羽釜」「中近世時の基礎研究VI」日本中世土器研究会



第46図 井戸変遷図

図 版



調査地全景(東から)



西区機械掘削(北東から)



西区第1面(北西から)



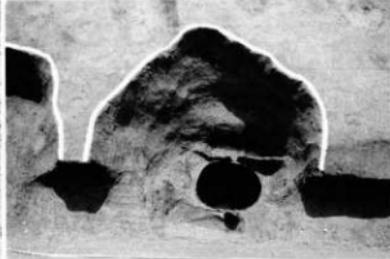
西区第2面(東から)



東区第1・2面(東から)



S E 201(東から)



S E 202(北から)



S E 202(上が北)



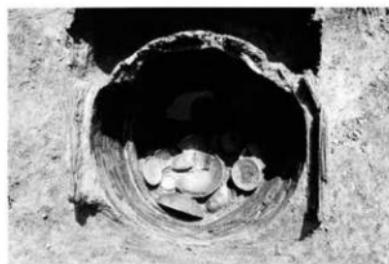
S E 202(南から)



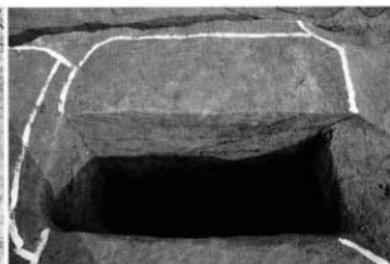
S E 203(北から)



S E 203(南から)



S E 203(上が南)



S E 204(西から)



S E205(南から)



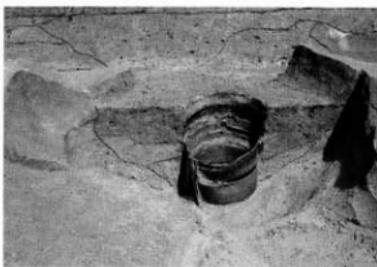
S E205(南から)



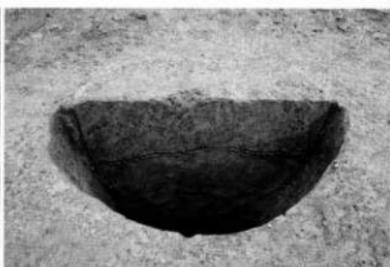
S E206(東から)



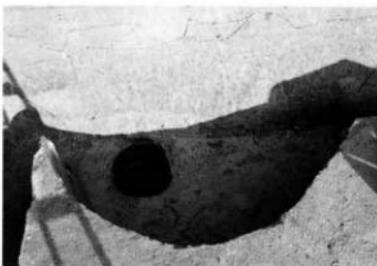
S E207(南から)



S E207(南から)



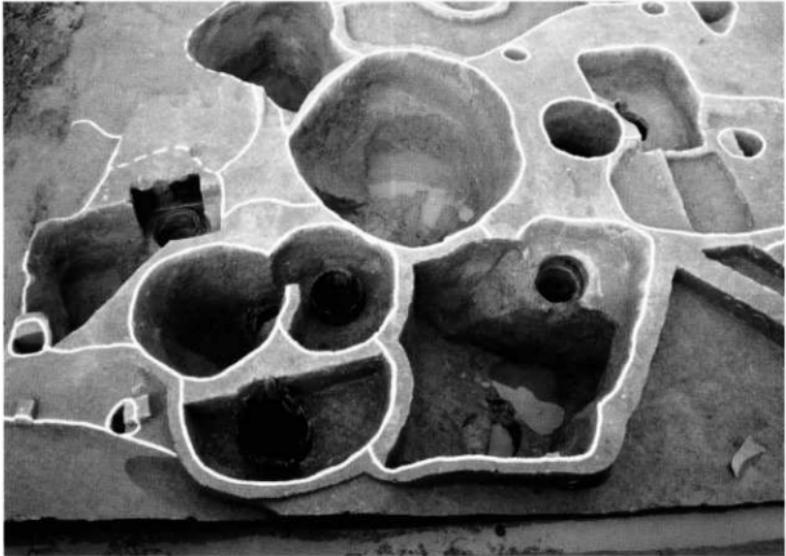
S E208(東から)



S E209(西から)



S E209(西から)



SE210~224(南から)



SE210・211(北東から)



SE211(北西から)



SE212(東から)



SE214・215(南から)



S E214(南西から)



S E214(南から)



S E214(上が南)



S E215(北西から)



S E216~218(北から)



S E216(北から)



S E217(北から)



S E216(北西から)

図版 6



S E218(北から)



S E216・218(北西から)



S E219(南から)



S E219(南から)



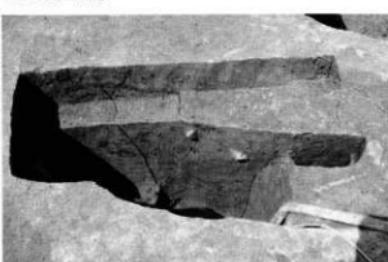
S E220(東から)



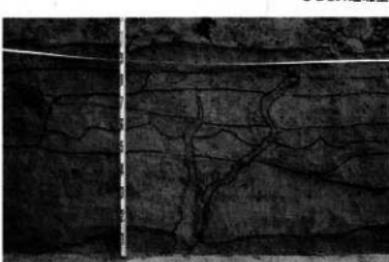
S E220(上が西)

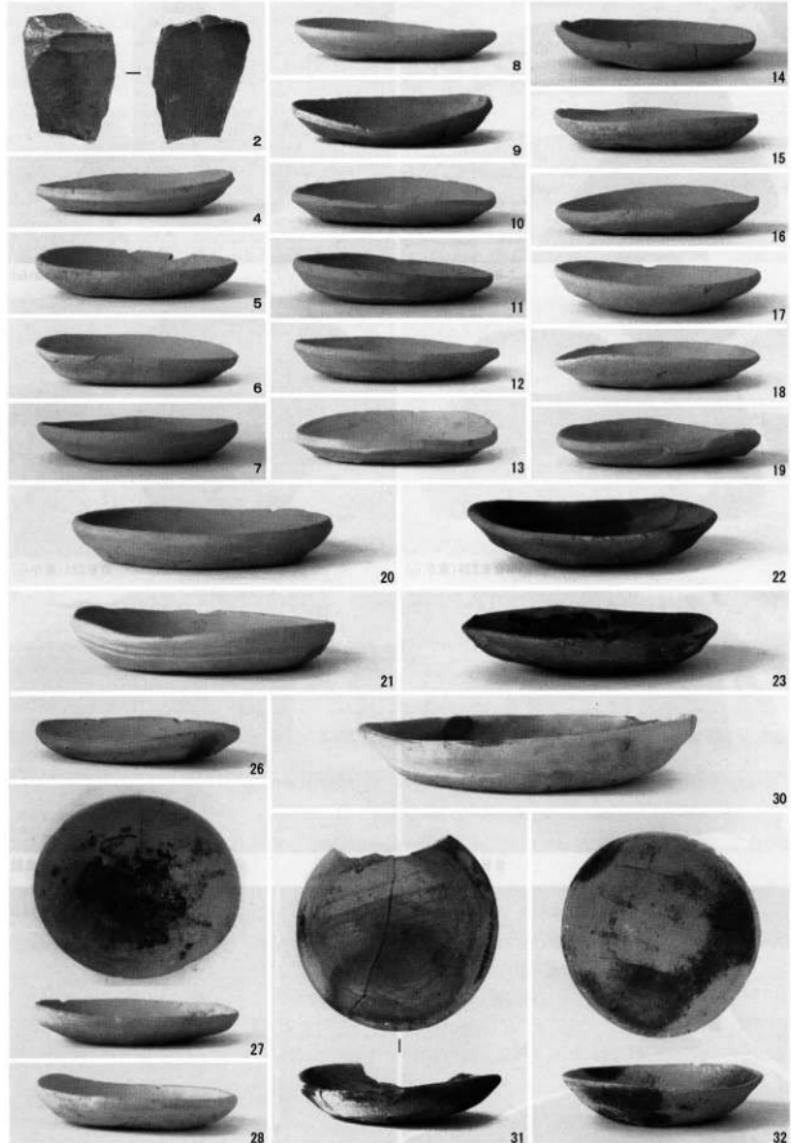


S E220(東から)

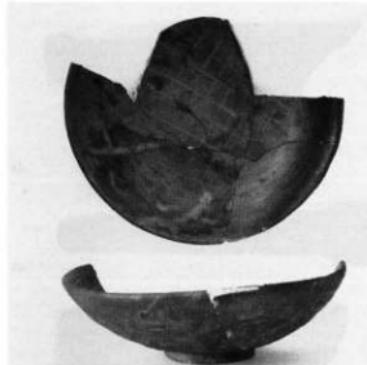


S E220～222(東から)





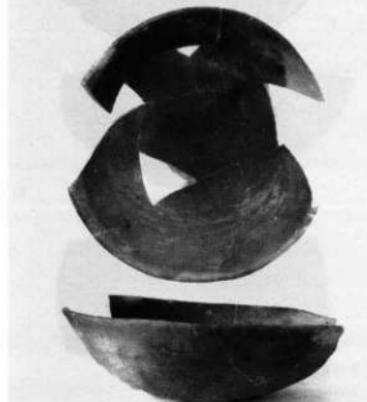
S E 201(2)、S E 202(4~23)、S E 203(26~32)



33



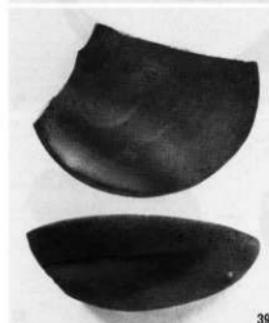
36



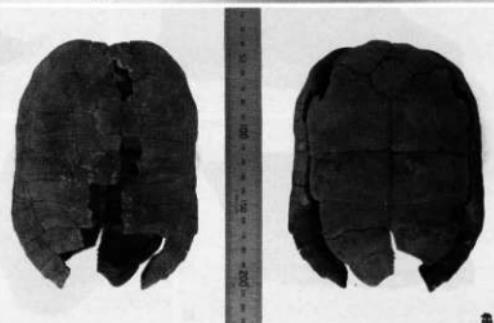
35



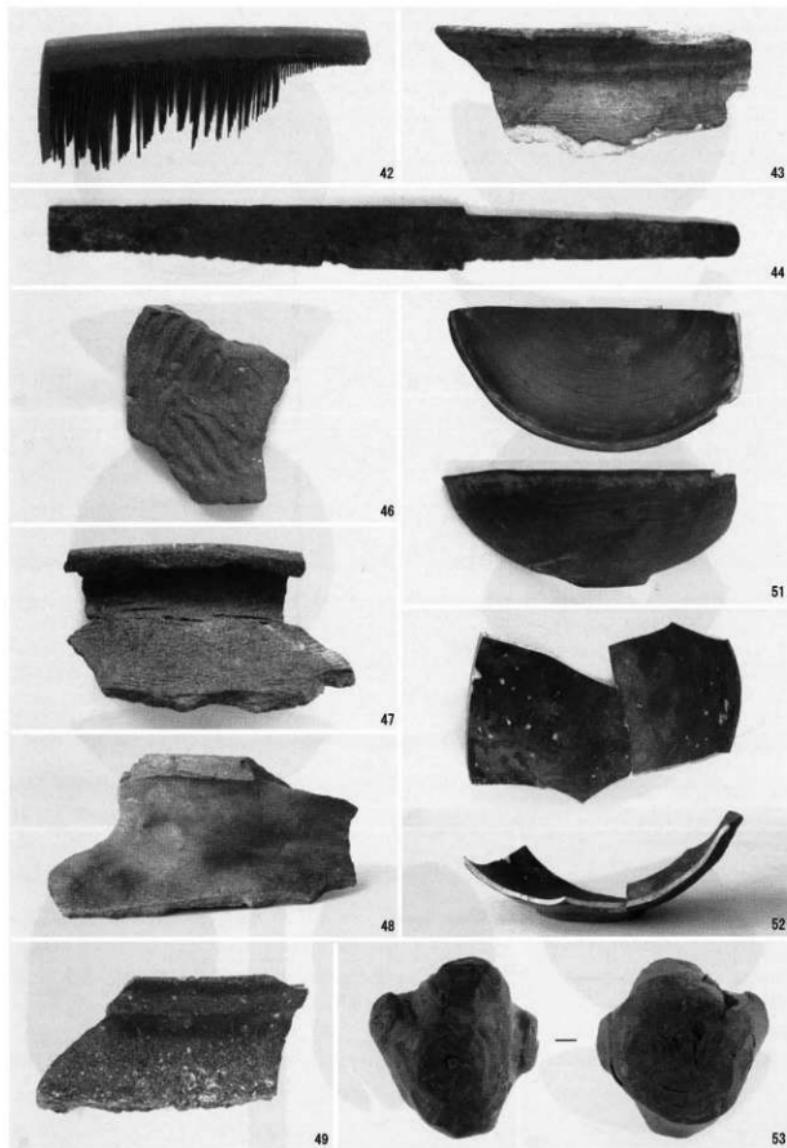
37



39



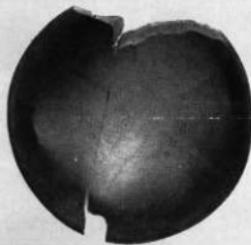
S E 203(33~37)、S E 206(39・龜)



S E 207(42)、S E 210(43・44)、S E 211(46)、S E 212(47~49)、S E 214(51~53)



54



55



56



57



58



59



60



61



62

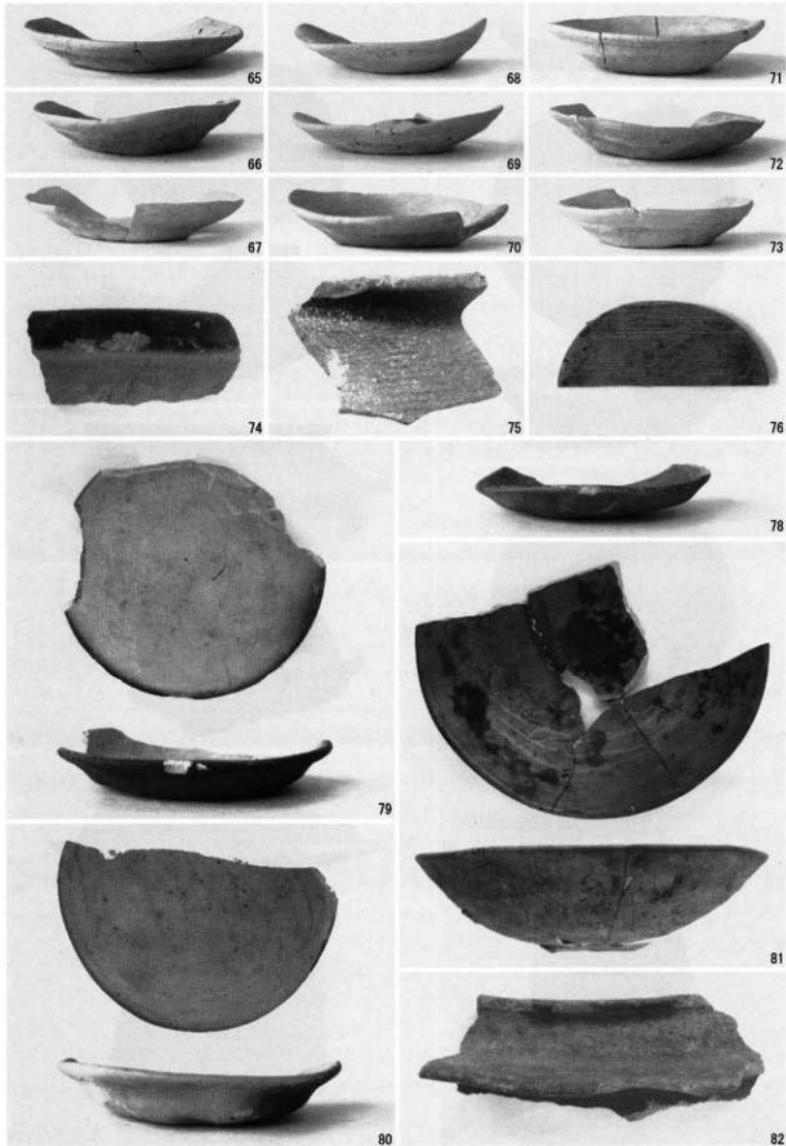


63

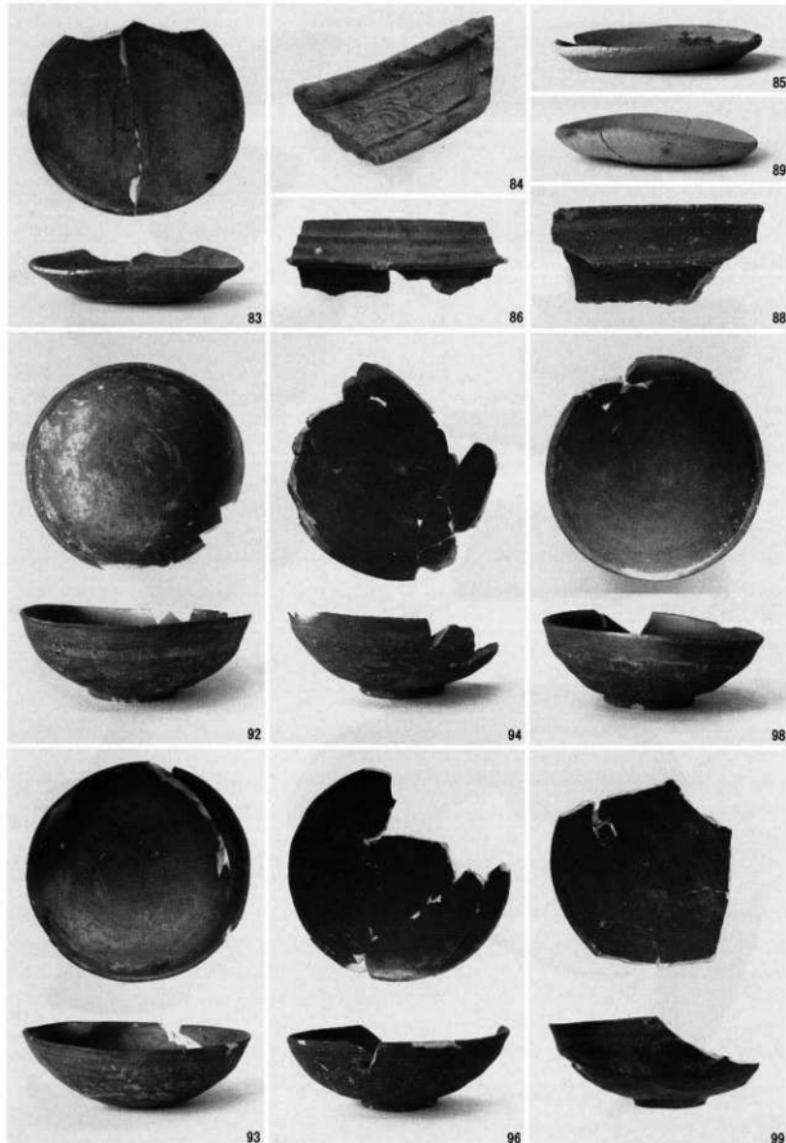


64

S E215(54・55)、S E216(56~59)、S E217(61~63)、S E218(64)



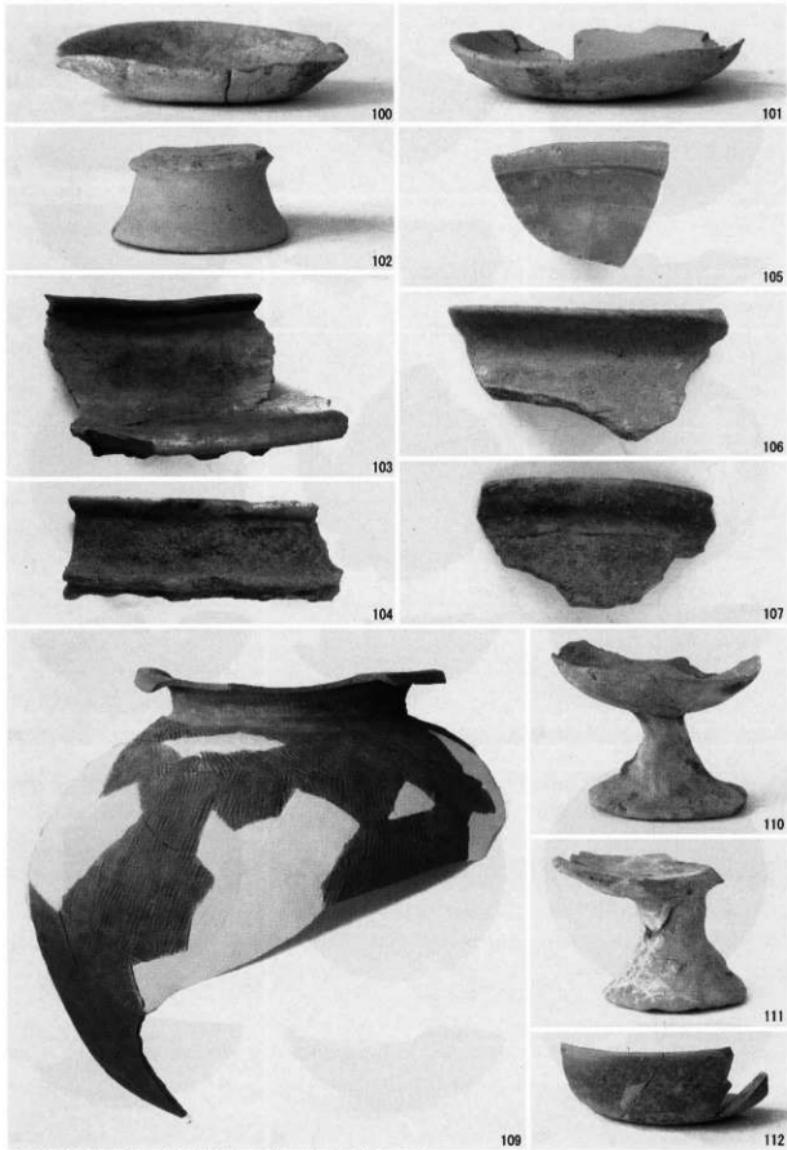
S E219(65~76)、S E220(78~82)



S E 220 (83・84)、S E 221 (85～88)、S E 224 (89)、S D 201 (92～99)

図版
14

出土遺物



S D 201(100~105)、S O 202(106~109)、第4層(110~112)

VI 水越遺跡第8次調査(MK2005-8)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市服部川3丁目14番、15-1番で実施した身体障害者療護施設建設に伴う水越遺跡第8次調査(MK2005-8)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成17年12月26日に着手し、平成18年1月26日に終了した(実働17日)。調査面積は356m²である。
1. 現地調査には、垣内洋平・國津れいこ・芝崎和美・鈴木裕治・曹 龍・田島宣子・藤原由理子・吉川一栄・若林久美子の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成23年3月をもって終了した。
　　遺物復元 - 岩本順子・竹田貴子・田島宣子・都築聰子
　　遺物実測 - 飯塚直世・芝崎・中野一博・永井律子・中村百合・若林久美子・和田直樹
　　遺物トレース - 市森千恵子
　　遺構デジタルトレース - 鈴木・坪田
1. 本書の作成にあたっては、遺物レイアウト・遺物文章・遺物図版を米井友美(当時嘱託)が、遺物写真撮影を木村健明(当時嘱託)が主に担当し、その他は坪田が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	65
第2章 調査概要.....	66
第1節 調査の方法と経過.....	66
第2節 基本層序.....	66
第3節 検出遺構と出土遺物.....	69
第3章 まとめ.....	76

挿図目次

第1図 調査地位置図	65
第2図 地区割り図	66
第3図 基本層序	67
第4図 第1面平面図	68
第5図 N R 101出土遺物	69
第6図 N R 102出土遺物	69
第7図 N R 103出土遺物	70
第8図 第2面平面図	70
第9図 S D 203出土遺物	71
第10図 N R 201出土遺物①	72
第11図 N R 201出土遺物②	73
第12図 2区第7層出土遺物	74
第13図 N R 202出土遺物	75

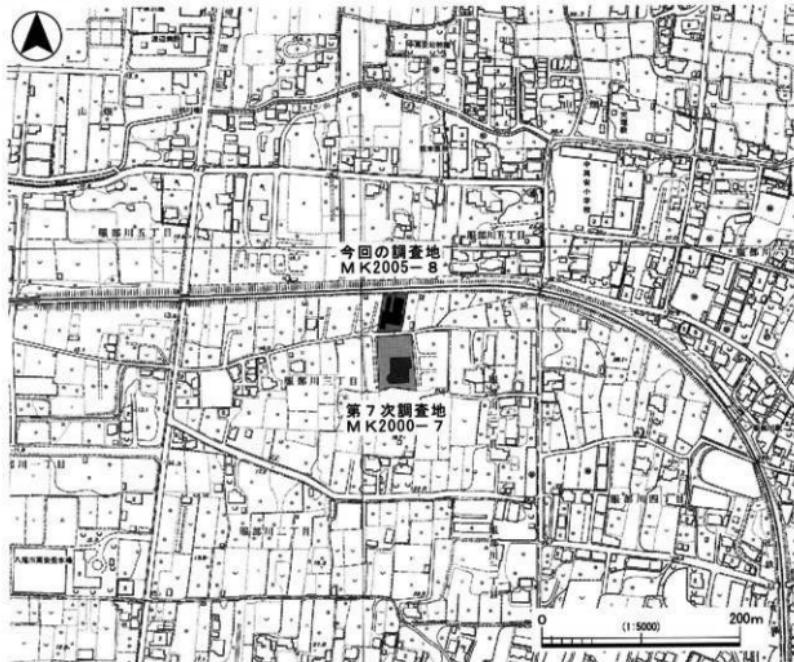
図版目次

図版1 1区第1・2面(南から)	1区N R 101・S D 201(東から)
2区第1面(南から)	2区N R 102(西から)
3区第1面(西から)	3区東部第1面(南から)
図版2 2区第2面(南から)	2区N R 201南壁
2区N R 201内土器出土状況(東から)	3区N R 201(西から)
3区S D 203・N R 202(東から)	3区東半第2面、下層確認トレンチ(南から)
図版3 出土遺物 N R 101 N R 102 N R 103 S D 203 N R 201	
図版4 出土遺物 N R 201	
図版5 出土遺物 N R 201	
図版6 出土遺物 N R 201 2区第7層	
図版7 出土遺物 2区第7層 N R 202	

第1章 はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では水越・千塚・服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡に接しており、東側には高安古墳群が広がっている。今回の調査地の南約250mには、すでに消滅しているが中期の前方後円墳である郡川西塚古墳が、またその東には郡川東塚古墳が東西に並んで立地している。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世にわたる複合遺跡であることが認識されている。今回の調査地周辺では、ほぼ全域で弥生時代後期を中心とした遺構や遺物包含層が検出されており、南側で実施した第7次調査(MK2000-7)では、縄文時代晩期の土器埋納ピットの可能性がある遺構の他、平安時代では土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されている。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

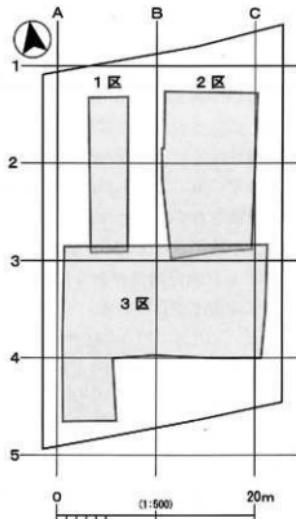
今回の調査は、平成17年11月28日に実施した遺構確認調査（水越遺跡(2005-322)）の結果を受けて実施した身体障害者療養施設建設に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第8次調査(MK2005-8)である。

調査地は1箇所であるが、残土処理の都合により平面形に沿って1～3区に分割して調査を実施した。また3区第2面については東西に分割(3区西・東)しての調査となつた。調査は1区→2区→3区西→3区東の順に実施した。

掘削は、現地表(T.P.+18.0～18.5m)下約1.5mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行つた。さらに3区東ではトレンチを設定し約T.P.+15.5mまでの下層確認を実施した。

地区割については調査地全域を含む任意の10mメッシュを設定し、南北ラインにアルファベット(西からA～C)、東西ラインに数字(北から1～5)のライン名を冠した。そして地区名は北西角の交点名に代表させた(1A区～4C区)。なお1/2500地形図と現地平面図との合成によると、この南北ラインは座標北から東に約10.0度振っている。

標高の基準は、第5次調査(MK95-5)実施の際に設置した南西約300mに位置する3級基準点(T.P.+14.027m)より移動した。



第2図 地区割り図

第2節 基本層序

2・3区東壁を基本層序とした。当地における地層の特徴としては、埋没河川の影響により全体的に砂粒が優勢な層相が続いている。

0層：盛土、及び攪乱。

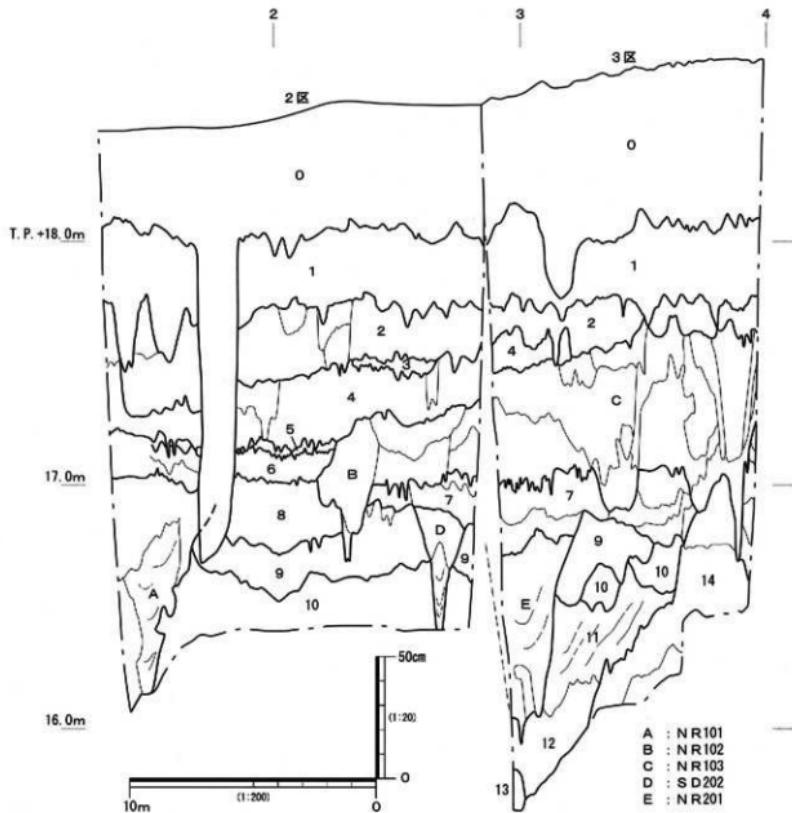
1層：5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～粗粒砂混シルト。層相は旧耕土であるが、攪乱されており機能していた状況ではない。整地に伴う層位と考えられる。

2層：10YR6/2灰黄褐色極粗粒砂混極細粒砂～細粒砂 Fe斑多。

3層：10YR6/3にぶい黃橙色中疊混シルト～細粒砂。

4層：10YR6/1褐灰色シルト混極細粒砂～粗粒砂 Mn斑多。

2・4層は攪拌が著しくMn斑・Fe斑を多く含む土壤化層である。面的な調査をしていないため詳細は不明であるが、NR101～103の氾濫による堆積土を作土化した層位と捉えられる。3層は攪拌されずに残った洪水砂であろう。2～4層は1区ではさらに厚くなつており、5～6層程度に分層される。



第3図 基本層序

5層：2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルト～粗粒砂 Fe斑・Mn斑少。

6層：10YR3/1黒褐色シルト混細粒砂～細礫 ブロック状を呈し、汚れた土壤化層で、一見黒色を呈する。

5・6層はNR101の上層に当たると思われる。

7層：10YR2/1黒色粘土～シルト互層 植物遺体含む。NR201埋没後の沼沢地状の様相。

8層：7.5Y3/1オリーブ黑色シルト混極細粒砂～粗粒砂。

9層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂多混粘土～シルト質粘土。

10層：5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混極細粒砂～極粗粒砂。

8～10層は調査地全域に広がる水成層で、砂粒の粒径・含有量の違いで数層に分層が可能であるが、ほぼ類似した均質な層位である。8・9層は弥生時代後期の土器を含んでいる。

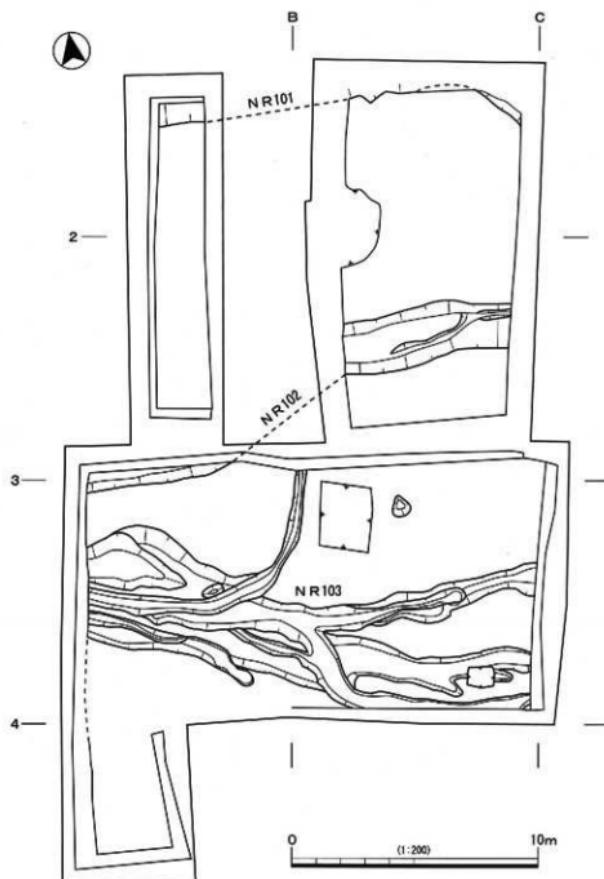
11層：2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂互層。

12層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂少混シルト～極細粒砂。

13層：5Y6/2灰オリーブ色極粗粒砂～細礫 ($\sim 3\text{ cm}$)。

11～13層は河川堆積で、南東から北・西に下がる堆積を確認した。底のレベルは3区中央でT.P.+15.5mを測り、さらに下がって行く状況である。

14層：5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土



第4図 第1面平面図

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

1～3区で東西方向の自然河川(NR101～103)を検出した。面的には調査地全域に亘る河川の底部を捉えたものである。堆積状況からみて、3区南部以北において、基本的に南から北に、頻繁に流路を変えながら長期間にわたって機能していたと考えられ、NR101が最終流路と捉えられる。なお埋土は北・西に行くにつれ上部の攪拌・土壤化が著しくなり作土化しているようであるが、作土中には河川の氾濫を示すシルト～砂礫層が部分的に遺存している。

NR101

1・2区北端の1A・B区で検出した東西方向の自然河川である。南肩のみの検出で北は調査区外に及ぶため詳細は不明である。規模は検出長約14.7m・深さ0.7m以上を測る。埋土はシルト～中疊の互層である。NR201を切っている。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土しており、1を図化した。1は弥生土器有孔鉢で、底部中央に円形の穴が穿たれている。外面・内面ともに調整はナデであるが、底部付近では、外面ではユビオサエ、内面では孔付近を中心にして放射状に工具の圧痕が残る。弥生時代後期後半(V様式)に比定される。

NR102

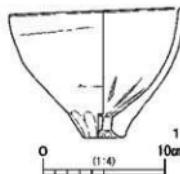
2区南部～3区西北部で検出した。規模は検出長6.8m、幅1.8～2.3m、深さ最大0.6mを測る。1区では明確な流路は認められず、砂礫層の面的な抜がりが見られた。埋土は10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～大疊(～10cm)の互層で、東部では下位に2.5Y3/1黒褐色シルト～細粒砂互層が堆積する窪みが認められる。遺物はローリングを受けた弥生時代後期～古墳時代前期の土器の他、時期不明の須恵器片が1点出土している。2・3を図化した。

2は弥生土器壺で、口縁部から体部にかけて残存する。調整は外面にタタキ、内面にハケが施され、口縁端部は下方に肥厚して端面をもつが、強いヨコナデで端面下部が凹線にくぼむ。弥生時代後期後半(V様式)に比定される。3は土師器直口壺で、口縁部以下が欠損しているため全形は不明であるが、古墳時代前期(布留式期新相)の小型丸底壺の可能性がある。

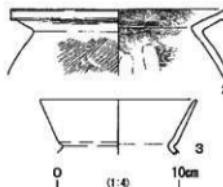
NR103

3区を横断する自然河川で、南肩は3区南壁中央と西壁中央を結ぶラインに求められる。上部はほぼ機械掘削により除去しており、平面的には流心の最深部を検出したにすぎない。規模は検出長18.5m・深さ最大1.0mを測る。底部のレベルは東端部がT.P.+16.7～16.9m、西端が16.2～16.3m、埋土上面のレベルは東端部がT.P.+17.7m、西端が17.2mを測る。北部中央から南下して西に屈曲する流心が1条認められるが、NR102から分岐する流路であろう。埋土は基本的に流心部が砂礫層、上層は上部細粒化が認められる砂層～シルトであるが、さらに下部には先行する河川埋土として粘土～細粒砂の堆積が見られる。遺物はローリングを受けた弥生時代後期の土器の他、6世紀頃の須恵器が数点出土している。4・5を図化した。

4は土師器鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁は緩やかに外反して広がる。調整は荒



第5図 NR101出土遺物

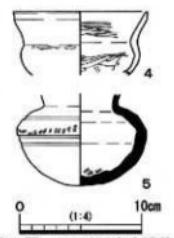


第6図 NR102出土遺物

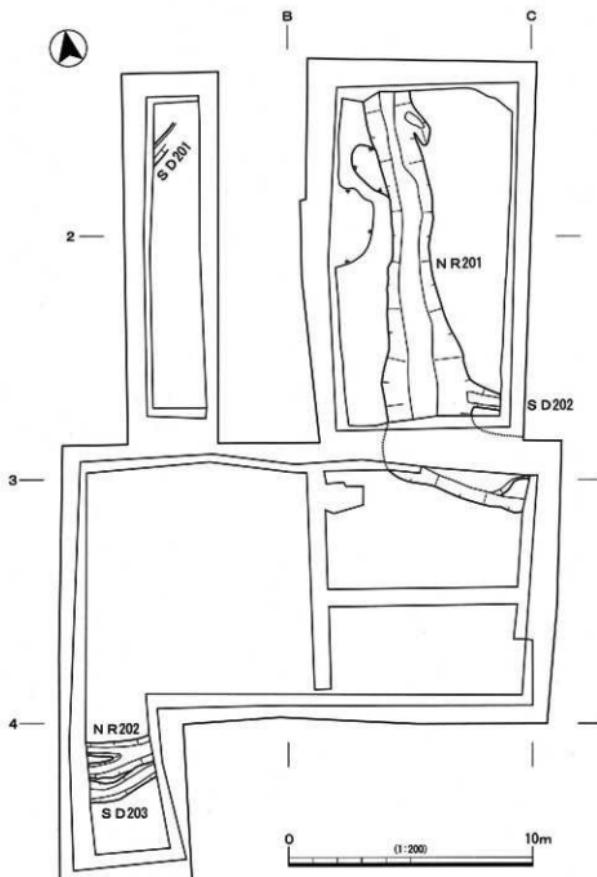
いミガキとナデが施される。5は須恵器甌と考えられる。頸部から底部が残存し、体部上方では3条の沈線がめぐらされ、その間に列点文が施される。破片であったため、体部の穿孔は見つからなかったが、この沈線間に穿たれたと考えられる。6世紀末～7世紀前半(TK43型式)に比定できる。

〈第2面〉

溝3条(S D201～203)、自然河川2条(N R201・202)を検出した。



第7図 NR103出土遺物



第8図 第2面平面図

S D 201

1区北部の1A区で検出した北東-南西方向の溝である。規模は検出長約1.8m・幅約55cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は5Y6/1灰色極細粒砂～粗粒砂の流水層である。遺物は出土していない。

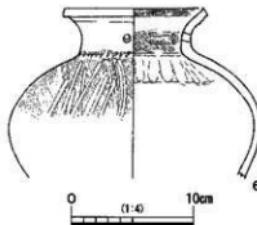
S D 202

2区南東部2B区で検出した東西方向の溝である。規模は検出長約1.4m・幅約0.8m・深さ約28cmを測る。断面二段掘り状を成すもので、検出時に上部を削平してしまっており、本来の規模は東壁で幅2.1m・深さ0.5mを測る。埋土は上層が7.5Y4/1灰色シルト混極細粒砂～細粒砂、下層が7.5Y5/1灰色シルト～中粒砂の互層である。NR201東肩に取り付く溝で、その角度からみてNR201への排水溝の可能性が考えられる。遺物は弥生時代後期の土器の細片が少量出土しているのみで、図化したものは無い。

S D 203

3区南西部4A区で検出した東西方向のやや屈曲する溝である。規模は検出長約3.0m・幅約90cm・深さ約30cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルトである。NR202南肩を切る状況であるが、NR202の最終的な流路の可能性がある。遺物は弥生時代後期の土器が出土しており、6を図化した。

6は広口壺で、口頸部中位に1点の円孔がある。頭部屈曲部に刻み目が施される。口縁端部はつまみ上げられて整形され、下方に肥厚して面を持つ。弥生時代後期後半(V様式)に比定できる。



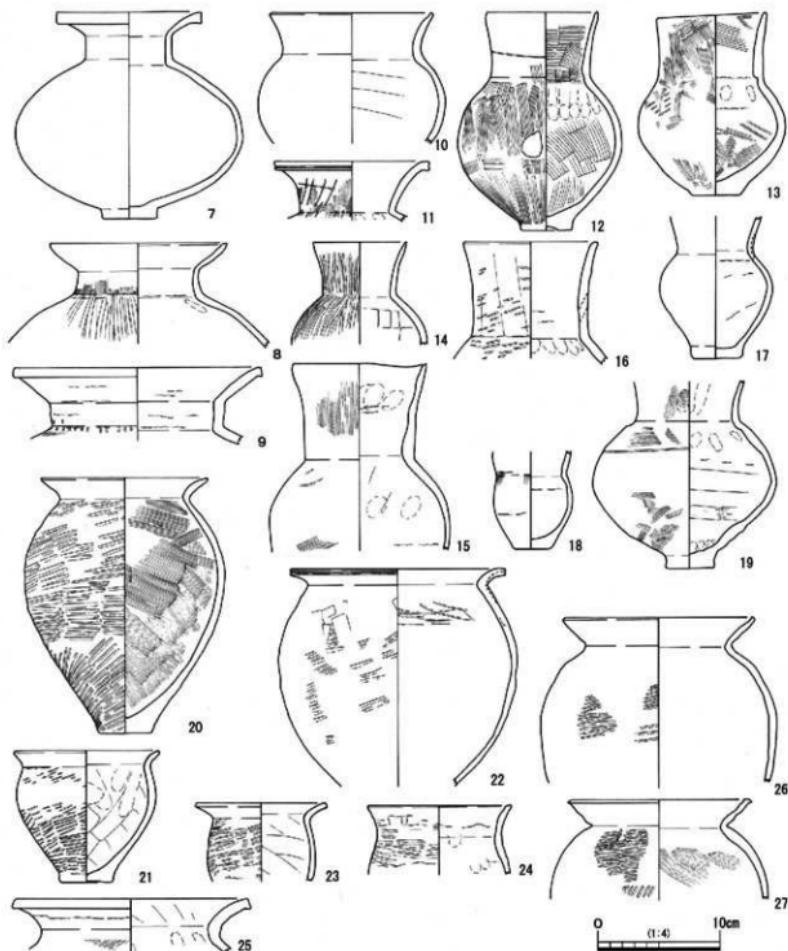
第9図 S D 203出土遺物

N R 201

2区～3区北東部の1～3B区で検出した自然河川である。東部から西流したのち2・3区間で北に屈曲し、直線的に2区中央を継断する。規模は検出長約18.0m・幅1.5～3.5m・深さ0.8～1.0mを測る。埋土はシルト質粘土～細礫の互層である。遺物は弥生時代後期の土器が多く出土しており、7～35を図化した。また埋没後の沼沢地状の層位(第7層)中では、主に2区の右岸で土器が集積する部分が数箇所で見られ、36～46を図化した。

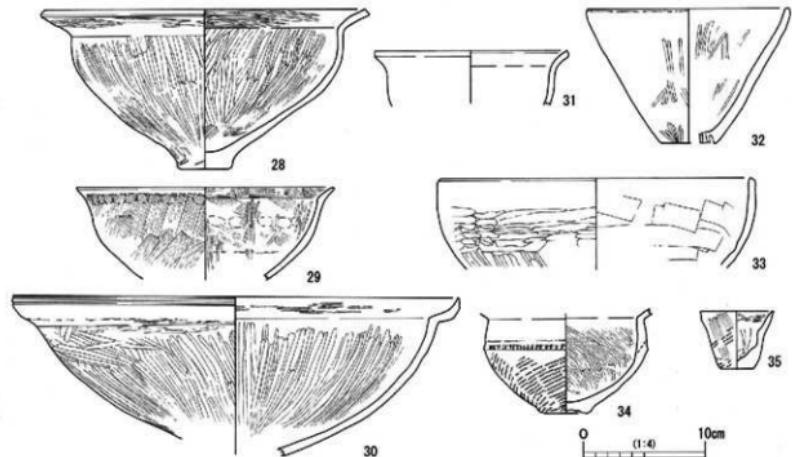
7～19は弥生土器壺、7～11は広口壺、12～19は長頸壺である。7・9は口縁部が直上方向に立ち上がってから外反して大きく開き、口縁端部は下方に肥厚して面を持つもので、生駒西麓産である。9では頸部に0.5～1.0cm程の間隔で刻み目が施される。8は口縁部が直上方向に立ち上がってからやや内湾して開く。外面の調整に頸部ではハケ、体部ではミガキが施される。10・11は口縁が外反して開くもので、10は口縁部が緩やかに外反し、端部はつまみあげられてやや薄くなっている。11は口縁端部が下方に肥厚して面を持ち、端面の中央やや下には沈線が巡る。外面の調整はタテハケで、頸部では刻み目が施され、口頸部では4本の並行する縦方向の沈線に横方向の沈線が1本交差するヘラ記号が描かれる。12は口縁が斜上方に伸び、端部付近でやや内湾し、底面はドーナツ状を呈する。調整はハケ、ナデが施され、口縁部中位では外面に沈線が1条回っている。体部中位に焼成後の穿孔が認められる。13は体部と口縁部の境目が緩やかに屈曲し

ている。調整は、外面ではタタキ後ハケ、内面ではナデ、ハケが施されるが、内面では体部上位と屈曲部で接合痕が残っており、体部と口縁部が分割して成形されたと考えられる。14・15・16は口縁部から体部まで残存し、いずれも口縁が斜上方に伸びるもので、それぞれ外面調整に14はミガキ、15はハケ、16はタタキ後ナデが施される。15では体部上方に2本の弧状の沈線が描かれており、ヘラ記号と考えられる。17・18・19は口縁を欠く。17・18は小型品で、18・19では外面



第10図 N R 201出土遺物①

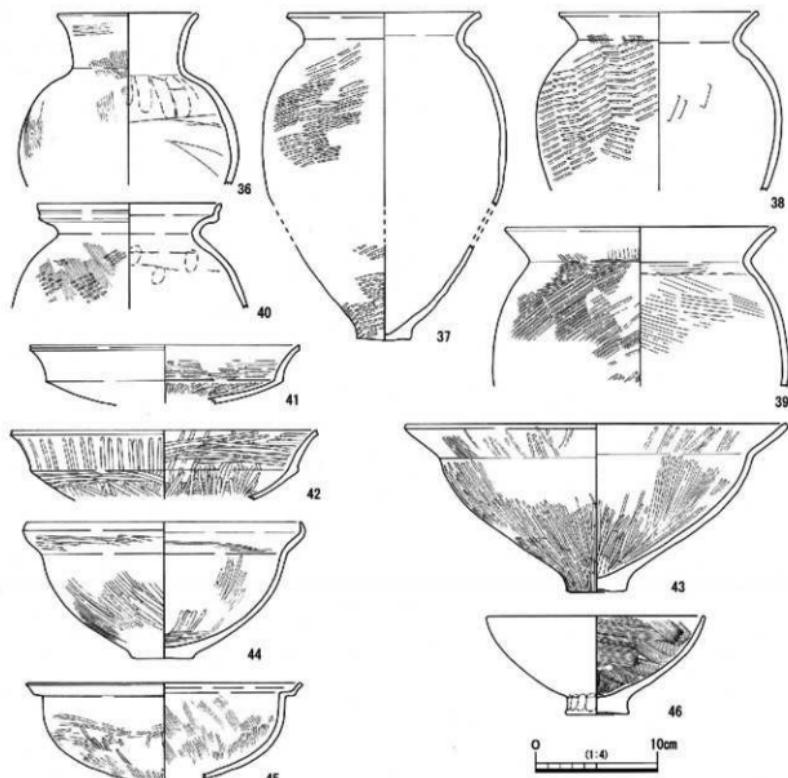
調整にハケが施される。7・9~11・13・16・17・19は生駒西麓産である。20~27は壺である。20は口縁が外反し、端部は丸く、平底をもつ。体部外面の調整にタタキが施されているが、タタキ目の方向から三分割成形と考えられる。21は小型品で、口縁が緩やかに外反し、端部は丸く、底面はわずかに窪む。22は外傾する口縁部端面をもち、端面中央に沈線が回る。体部外面は煤が多く付着して不明瞭であるが、タタキと一部でタタキ後板ナデが施される。内面ではナデが施されているが、肩部付近でヘラなどの工具の擦痕と思われる弧状の線状圧痕がみられる。23・24は小型品で、23は口縁が大きく開き、24は口縁部、頸部、体部の境目がほとんど退化し、体部から緩やかに外反して口縁端部に至っている。この2点は器壁が薄いことから、製塩土器の可能性がある。25は口縁部と体部の一部が残存する。口縁端部は外傾し、下方に肥厚する。口縁部内面では板ナデ後板ナデが施されているが、板状工具の圧痕が放射状に残る。26・27は体部が丸みをもち、他の土器に比べやや器壁が薄い。口縁端部は、26は内側にやや肥厚、27は外側に肥厚している。26は内外面に煤が付着し、調整が不明瞭であるが、27は外面にタタキ、内面にナデ・板ナデが施される。26・27は庄内式壺の前段階にあたると思われる。20~22・28・29は生駒西麓産。28~32は鉢である。28・29は中型品で、外反する口縁を持つ。30は大型品で内・外面上ともにミガキによって調整される。口縁部は2段に屈曲して受口状になっており、側面に2条の沈線が施される。31は小型の鉢で、外反する口縁をもつ。生駒西麓産である。32は底面に多数の円孔をもつ有孔鉢で、体部へ口縁が直線上に伸びる。底面の孔は現状で10個確認でき、そのうち4個は貫通しており、底面で確認できることから、孔は底面側から穿たれたと考えられる。33は縄文土器深鉢と考えられる。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に延びている。調整は外面に縱方向ケズリ後横方向ケズリ、内面に板ナデが施される。縄文時代晩期に比定できる。34は体部上位から口縁部を欠いたため詳細は不明であるが、手焙り形土器もしくは鉢と考えられる。体部中位には粘



第11図 NR 201出土遺物②

土をつまみあげて突帯がつくられ、突帶上には刻み目が施される。突帶より下部は外面調整にタタキが施されるが、突帶より上部はナデで調整されている。体部上部は屈曲して受口状を呈する。屈曲部より上方には接合部がないため、鉢の受口状の口縁もしくは手焼り型土器の開口部突帯と思われる。生駒西麓産。35はミニチュア土器の鉢と考えられる。外面はタタキ後ハケ、内面は板ナデとハケで粗く調整されている。これらの土器は、縄文土器と思われる33を除いて弥生時代後期後半(V様式)に比定できる。

36は直口壺で、口縁部・全体部が残存する。口縁端部はやや外反し、調整は外面にハケ、内面にナデが施される。37~40は壺で、37~39は外反する口縁を持ち、外面に叩きが施される。37は底面が平底であるが、角がとれて丸みを持つ。40は口縁端部が摘み上げられて外反する、受口状の口縁を持つ。いずれも生駒西麓産。41・42は有稜高杯で、杯体部が斜上方に直線的にのび、口縁は屈折して短く上がる。2点とも端部は外傾して面を持ち、沈線が1条回る。弥生時代後期後半



第12図 2区第7層出土遺物

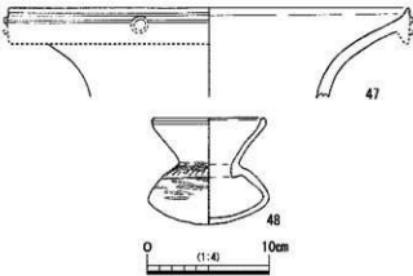
(V様式)に比定できる。43~46は鉢で、43は外反する口縁を持ち、底面が僅かに窪む。44・45は受口状の口縁を持ち、44は口縁部が緩やかに屈曲して内湾、45は屈曲してやや外反する。46は体部が丸みを持ち、口縁が直口で、底部は平底である。44~46は生駒西麓産。これらの土器は弥生時代後期後半(V様式)に比定できる。

N R202

3区南西部4A区で検出した東西方向の自然河川である。規模は検出長約2.6m・幅1.2~1.5m・深さ最大0.7mを測る。埋土は極細粒砂~大礫(~10cm)の互層である。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土しており、47・48を図化した。

47は器台の口縁部で、口縁端部は上方に摘み上げられて整形され外面側に面をもつ。外面の端部下側で口縁に沿った剥離面があることから、端面は下方に粘土が貼り付けられ、垂下していたと考えられる。端面には現状で2条の凹線が施されている。一部でかまぼこ形に近い形状の粘土塊が付着しているが、端面に施された竹管円形浮文が端面下方の剥離に伴って半分以上が割れ、浮文の1/3ほどが器壁に残ったと思われる。

48は小型の壺で、体部は扁平なそろばん形に近い形状で、口縁は直線状に広がり、端部で僅かに内傾する。外面の体部上位に1条の沈線が回っており、沈線と頸部屈曲部の間に波状文と列点文が描かれている。底部は丸底に近く、平坦面はない。底面中央付近は摩擦を受ける。生駒西麓産である。47・48は弥生時代後期後半(V様式)に比定できる。



第13図 N R202出土遺物

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期・古墳時代以降の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ10箱を数える。

調査では2面の遺構面を確認し、検出遺構には自然河川及びそれに取り付く溝がある。

第2面では弥生時代後期に比定される自然河川・溝を検出した。南約30mに近接する第7次調査(MK2000-7)ではT.P.+18.0~18.4mにおいて弥生時代後期の遺構が検出されており、北部ではこれらを削平する東西方向の自然河川が確認されている。今回の調査における当該期の遺構面である第2面はT.P.+16.5~16.6mを測ることから、巨視的に見て南から北に下がる地形が復元できる。河川埋土、及び埋没後の沼沢地状を呈する層位からは多量の土器が出土していることから、居住域を構成する遺構は検出されていないものの、当地は南の集落域の縁辺に位置すると考えられよう。

第1面では東西方向の自然河川を検出した。時期については、古墳時代以降であるが明確ではない。第7次調査では平安時代前期の遺構が検出されておりその頃の河川の可能性がある。河川埋没後は生産域となっている。

註

- ・西村公助2006「21-1. 水越遺跡(2005-322)の調査」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53 平成17年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

参考文献

- ・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- ・京嶋覚1993「第3章第2節 古墳時代後期の土器の変遷」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」財団法人大阪市文化財協会
- ・原田昌則1993「第5章まとめ 3」中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」「II久宝寺遺跡(第1次調査)」財団法人八尾市文化財調査研究会報告37 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則2003「第5章第1節中・南河内における弥生時代後期後半~古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会報告74 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・財団法人大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』

図 版



1区第1・2面(南から)



1区NR101・SD201(東から)



2区第1面(南から)



2区NR102(西から)



3区第1面(西から)



3区東部第1面(南から)



2区第2面(南から)



2区N R 201南壁



2区N R 201内土器出土状況(東から)



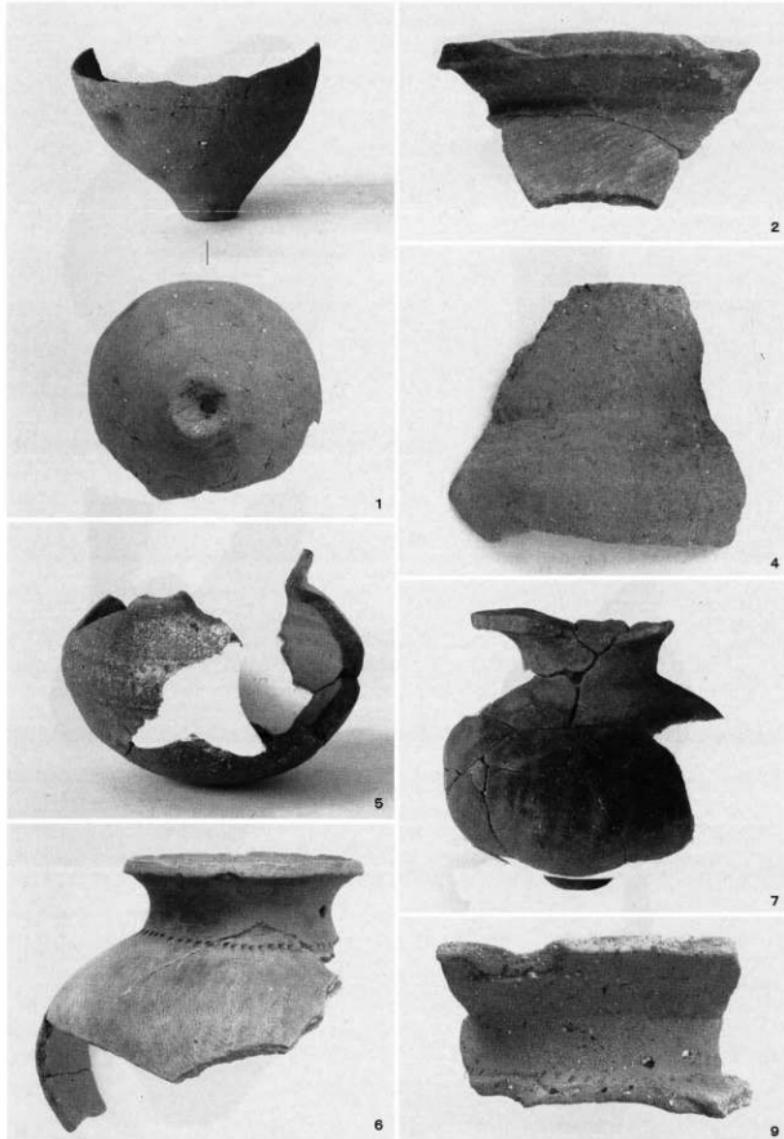
3区N R 201(西から)



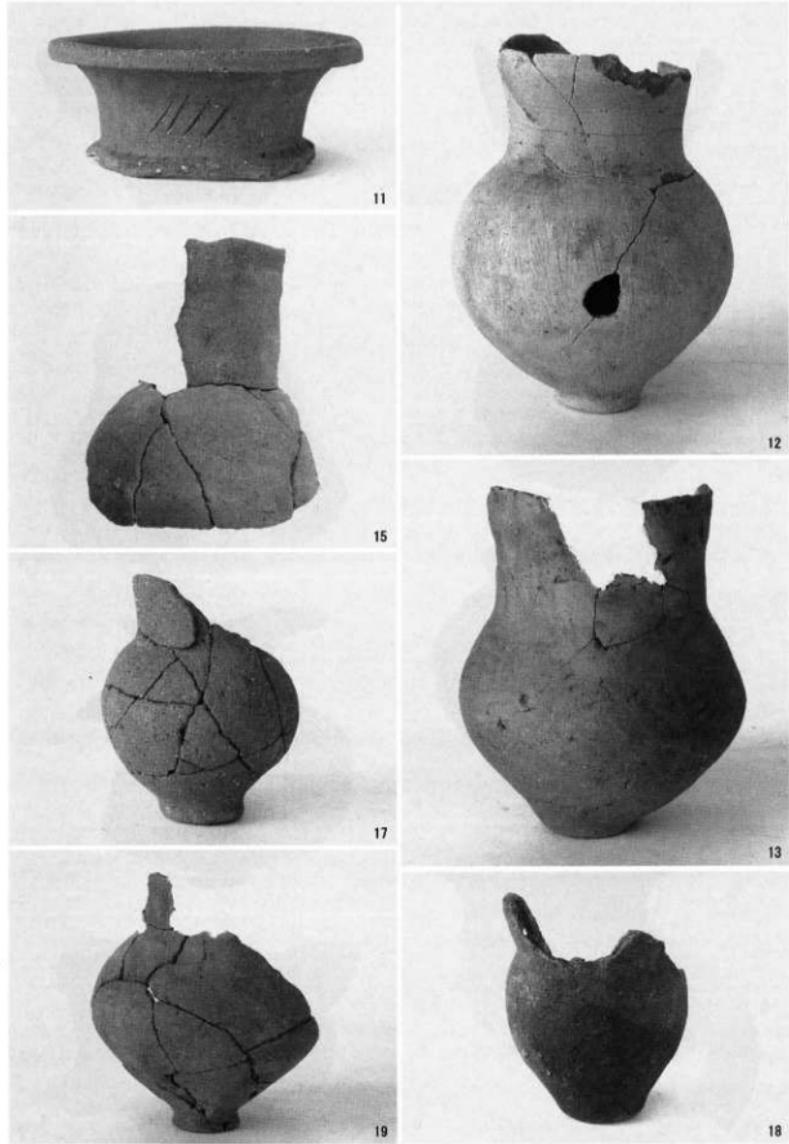
3区S D 203・N R 202(東から)

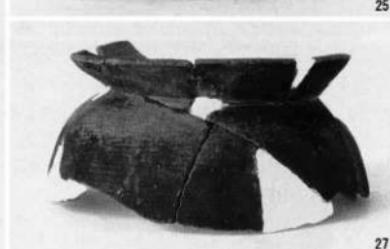
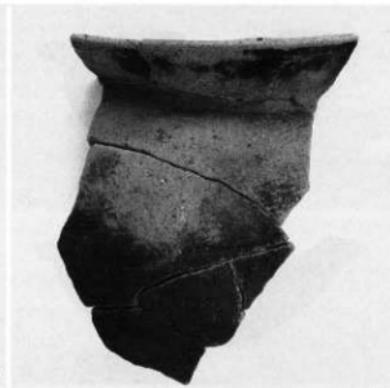


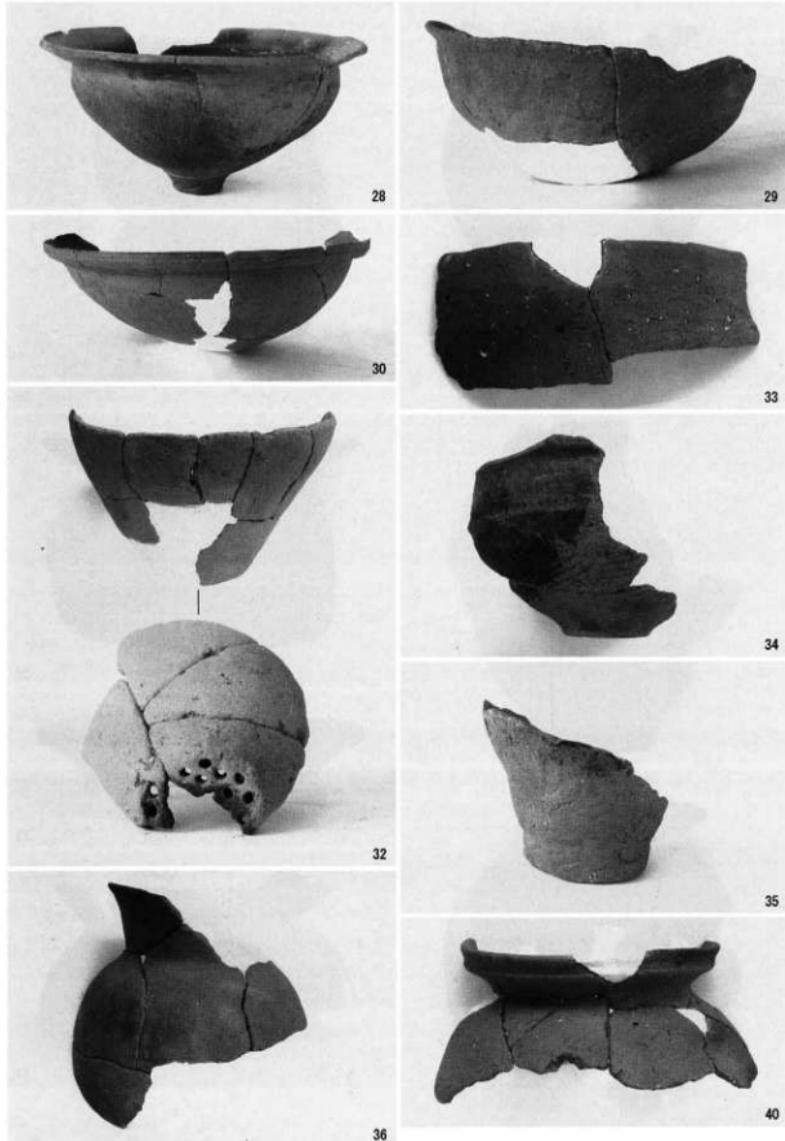
3区東半第2面、下層確認トレンチ(南から)



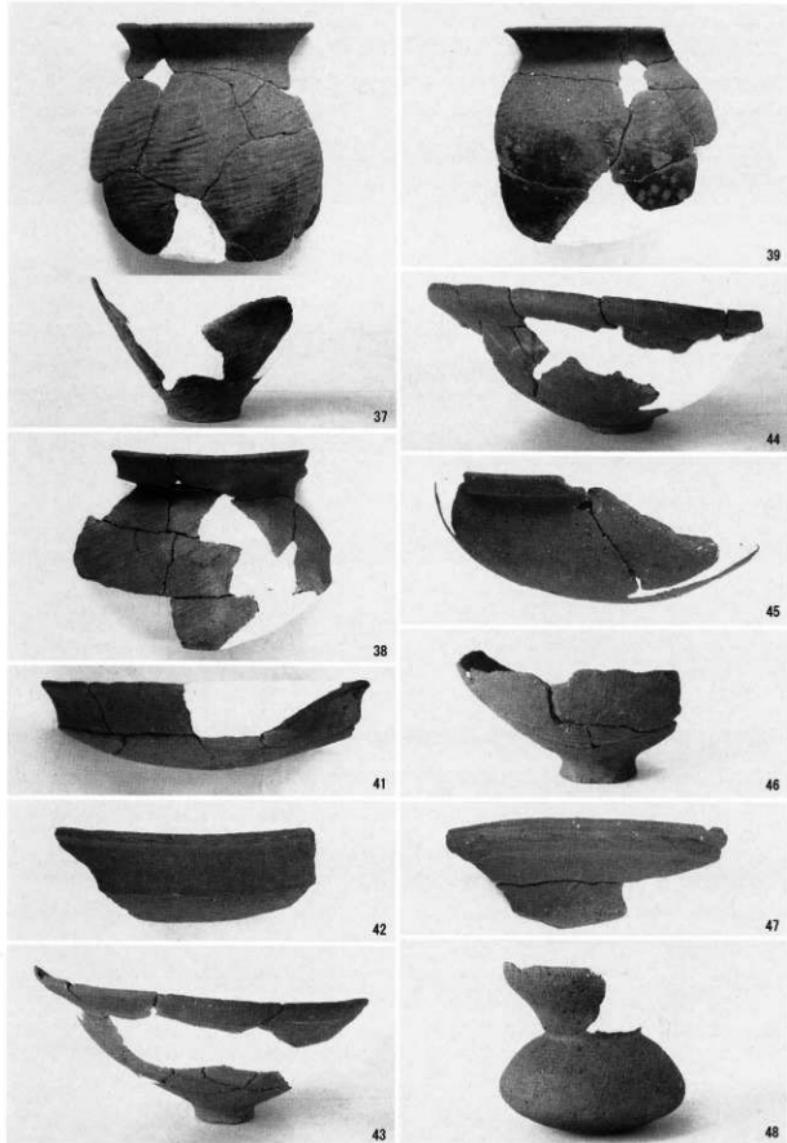
NR101(1)、NR102(2)、NR103(4・5)、SD203(6)、NR201(7・9)







N R 201 (28~35)、2区第7層 (36・40)



2区第7層(37~46)、NR202(47・48)

VII 弓削遺跡第11次調査(Y G E 2010-11)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市弓削町南3丁目21番2号で実施した事務所建設工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第11次調査(Y G E 2010-11)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年5月10日～5月31日(実働3日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約106m²である。
1. 現地調査においては、田島宣子・竹田貴子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－伊藤静江・山内千恵子、遺物トレース－山内が行った。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめに.....	77
第2章　調査概要.....	78
第1節　調査の方法と経過.....	78
第2節　基本層序.....	78
第3節　検出遺構と出土遺物.....	78
第3章　まとめ.....	82

挿図目次

第1図 調査地位置図	77
第2図 調査区位置図	78
第3図 断面図	79
第4図 1～3区出土遺物	80
第5図 4・5区出土遺物	81

図版目次

図版1 1区機械掘削(西から)	1区北壁
2区(南西から)	2区北壁
3区(南から)	3区北壁
4区南壁	5区北壁
図版2 出土遺物 1～3区	
図版3 出土遺物 3～4区	
図版4 出土遺物 5区	

第1章 はじめに

弓削遺跡は、八尾市南東部に位置する。現在の行政区画では、八尾市志紀町南2丁目・4丁目、および弓削町3丁目・弓削町南3丁目の一部に当たり、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲で広がる弥生時代前期以降の複合遺跡である。

地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +12.8~15.0mである。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んで北東側には東弓削遺跡が、北西側には志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡があり、南側には本郷遺跡(柏原市)が隣接する。本郷遺跡は、弓削遺跡と一連の遺跡と捉えられる。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により、また本郷遺跡内では、柏原市教育委員会により発掘調査が行われている。

今回の調査地は遺跡西部に当たる。周辺では、南東約50m地点で公共下水道工事に伴う第2次調査(YGE99-2)を実施しており、弥生時代後期末~古墳時代初頭の土坑を検出した他、包含層からは弥生土器、円筒埴輪、古代の土師器等が出土している。また北約40mで実施した遺構確認調査(2005-504)では、近世の災害復旧坑(水田土壤復旧型)を検出している。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

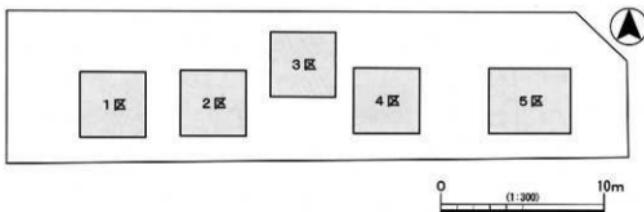
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、平成22年4月21日に実施した遺構確認調査（弓削遺跡(2009-433)）の結果を受けて実施した事務所建設に伴う調査で、当調査研究会が弓削遺跡内で実施した第11次調査(Y G E 2010-11)に当たる。

調査区は東西方向に並ぶ5箇所(西から1～5区)である。規模は1～4区が $4.0 \times 4.0\text{m}$ 、5区が南北 $4.0 \times$ 東西 5.0m で、総面積 84.0m^2 を測る。

調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(約T.P.+14.5m)下 3.2m 前後を機械掘削し、以下の 0.8m 前後については人力掘削により調査を実施する予定であった。しかし調査を開始すると、機械掘削範囲下部に当たる厚い河川堆積層からの湧水が著しく、壁面の崩落が相次ぐ状況であった。このため調査の続行は危険であると判断され、実際の調査としては、機械により掘削した遺物包含層からの遺物採集、及び断面観察・地層の記録を実施した。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部角の交差点に位置する八尾市街区多角点(20A27: T.P.+14.377m)である。



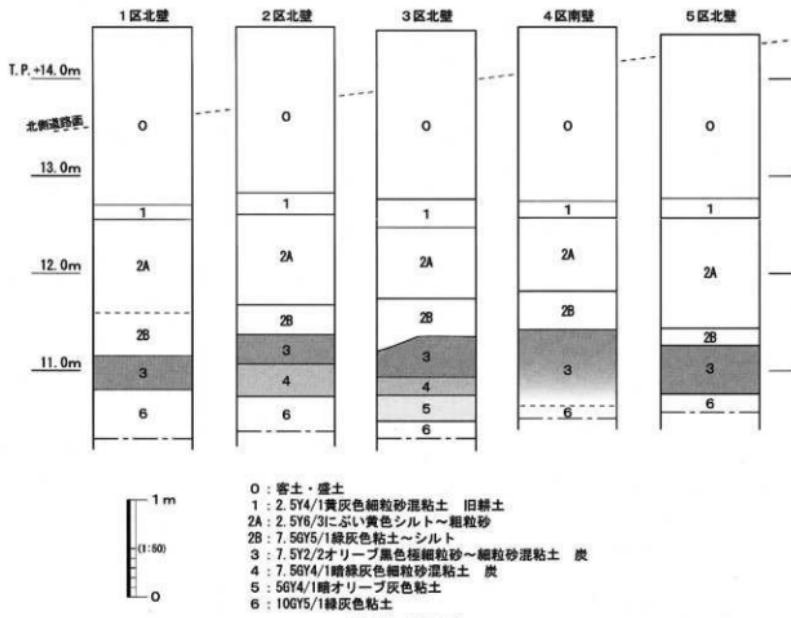
第2図 調査区位置図

第2節 基本層序

0層は客土・盛土。1層(T.P.+12.6～12.9m)は旧耕土。2層(T.P.+11.1～12.6m)は水成層で、粘土～粗粒砂からなる流水堆積である。2A層・2B層共に上部細粒化が認められる。湧水が著しかった。3層(T.P.+10.8～11.4m)は土壤化が著しいオリーブ黒色を呈する遺物包含層である。層厚30～50cmを測り、東ほど厚い。2・3区で確認した4層(T.P.+10.8～11.1m)も土壤化し暗色を呈する遺物包含層である。4区ではその存在が確認できなかった。5層はやや北に位置する3区で見られた粘土層で、自然堆積層と考えられるがやや土壤化する。6層(T.P.+10.8m以下)の粘土層が当地一帯のベースとなっている。

第3節 検出遺構と出土遺物

前述のとおり湧水・壁面崩落が著しく、平面精査は実施しておらず、遺構は検出できなかった。3・4層からは弥生時代後期を中心とした土器・石器が出土しており、特に3層に多く含まれている。3層内では5区北壁で完形に近い弥生時代後期の壺が見られた他、2・3区でも遺物採



第3図 断面図

集時に完形やそれに近い土器が見られた。これらの土器は遺構に伴う可能性が高いといえる。また焼土塊も多く見られた。ここでは地区毎に出土遺物を概観する。

1区（1～7）

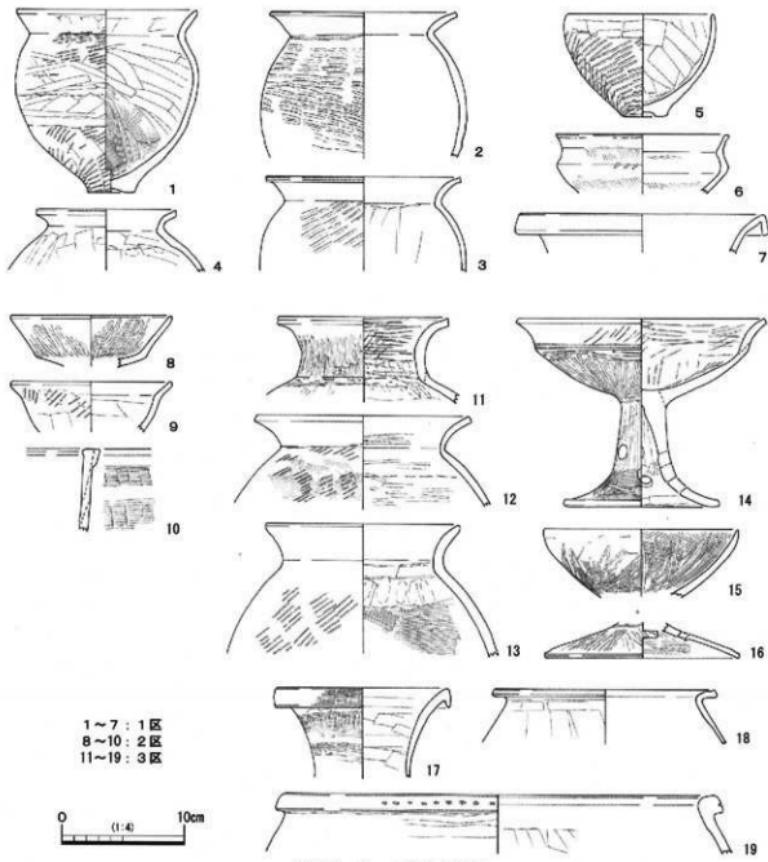
1～4は甕で、1～3は外面タタキ、4はナデである。1は外面のタタキをナデ消している。1・2は外面が煤ける。5は鉢である。タタキにより成形した底部に、高さ1cm程度の口縁部を付加している。6は外面ハケ調整の鉢で、体部屈曲部に刻み目を施す。色調は黄灰色で、煤けているのか内底面が黒色を呈し、手焙り形土器の可能性もある。搬入品であろう。7は広口壺である。1～5は弥生時代後期、7は弥生時代中期後半に比定される。6は弥生時代後期～古墳時代前期のものか。

2区（8～10）

8はヘラミガキを多用する精製の有稜高杯で、口縁の一部に黒斑を有する。9は鉢で、外面のタタキをナデ消している。10は体部外面に簾状文を施す大形鉢である。8・9は弥生時代後期、10は中期後半に比定される。

3区（11～19）

11は広口壺で、口縁部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキである。12・13は甕で、共に外面はタタキ後ナデを加えている。14～16は高杯で、いずれもヘラミガキを多用する。14は有稜高杯で、脚柱部下半に千鳥状(上段3方向、下段4方向)に円孔を配している。15は楕円高杯の杯部、

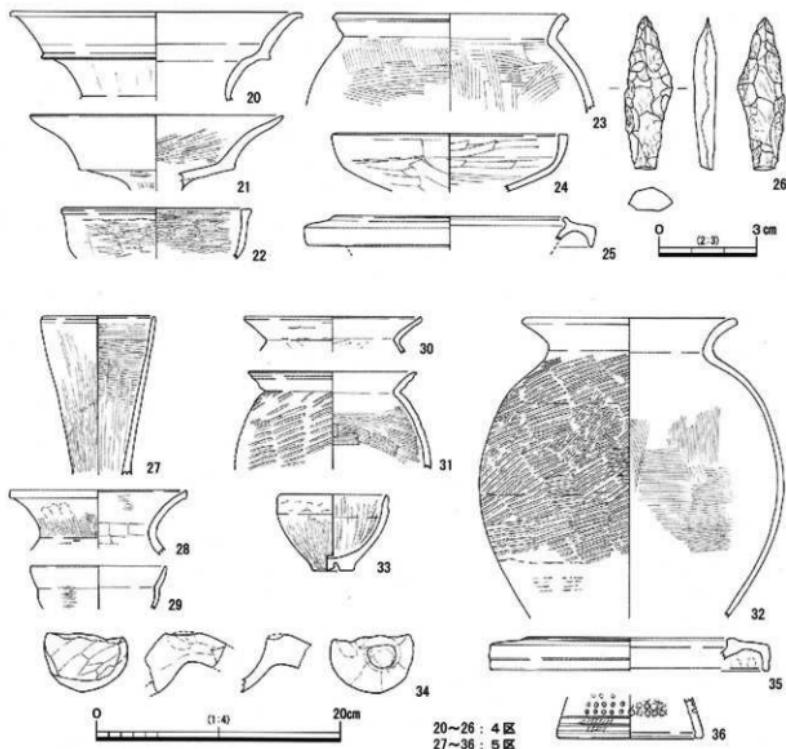


第4図 1~3区出土遺物

16は脚裾部である。17は広口壺で、外面に縦状文を施す。18は河内形壺。19は大形の鉢あるいは壺で、口縁端部外面に刺突文を巡らせる。11~16は弥生時代後期～古墳時代初頭、17~19は弥生時代中期後半に比定される。

4区 (20~26)

20は複合口縁壺である。内面は火を受けている。21は有稜高杯で、調整は内面ヘラミガキ、外面不明。外面に黒斑を有する。22は鉢、あるいは台付鉢と考えられ、調整は内外面横方向ヘラミガキである。23はハケ調整の壺で、口縁端部に浅い凹線が巡る。外面が焼ける。24・25は高杯で、24は無文、25は水平口縁をもつ。26は石鎚である。縁辺全体に両面からの細かい調整剥離を施すが、片面には主要剥離面が残る。茎部下端面が自然面のままであることから、未成品とも考えら



第5図 4・5区出土遺物

れる。20・21は弥生時代後期～古墳時代初頭、22～26は弥生時代中期後半に比定される。

5区 (27～36)

27は細頸壺で、口縁端部外面に2条の凹線を巡らせる。調整は外面ヘラミガキ、内面はハケ後下からのヘラナデを加える。28は広口壺、29は小形丸底壺である。30～32は甕である。31は口縁端部に明瞭な段をなす。33は小形の鉢で、調整はヘラミガキ。34は棒状の把手を有する杓子形土製品と考えられるが、詳細は不明である。手捏ね成形で、内面はナデ。35は水平口縁をもつ高杯で、口縁垂下部外面に凹線を巡らせる。36は小形の台付鉢脚部である。裾部外面に3条の凹線を、その上位には3段以上の貫通しない円孔を巡らせる。27・28・31～33が弥生時代後期、29・30が古墳時代初頭～前期、34が弥生時代後期～古墳時代前期、35・36が弥生時代中期後半に比定される。

第3章　まとめ

調査では全ての調査区で弥生時代中期～後期、古墳時代初頭～前期の遺物を含む地層を確認した。平面的な調査は実施できなかったが、事前の遣構確認調査の成果と合わせて、当地には弥生時代～古墳時代前期の生活面が複数枚存在すると考えられ、出土遺物からみて3層が弥生時代後期～古墳時代初頭、4層が弥生時代中期の包含層である可能性がある。弥生時代後期が集落の時期の中心となり、当該期の集落は当地の北部・東部で確認されており、井戸や溝からは多量の土器が出土している。

註

- 坪田真一2010「10）弓削遺跡(2009-433)の調査」『八尾市内遺跡平成22年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告　平成22年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- 森本めぐみ2001「X III　弓削遺跡第2次調査(Y G E99-2)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 菊井佳弥2007「2-26　弓削遺跡(2005-504)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- 道　齋2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10』八尾市教育委員会文化財課
- 西村公助1985「8　弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告　財團法人八尾市文化財調査研究会報告7』財團法人八尾市文化財調査研究会

図 版



1区機械(西から)



1区北壁



2区(南西から)



2区北壁



3区(南から)



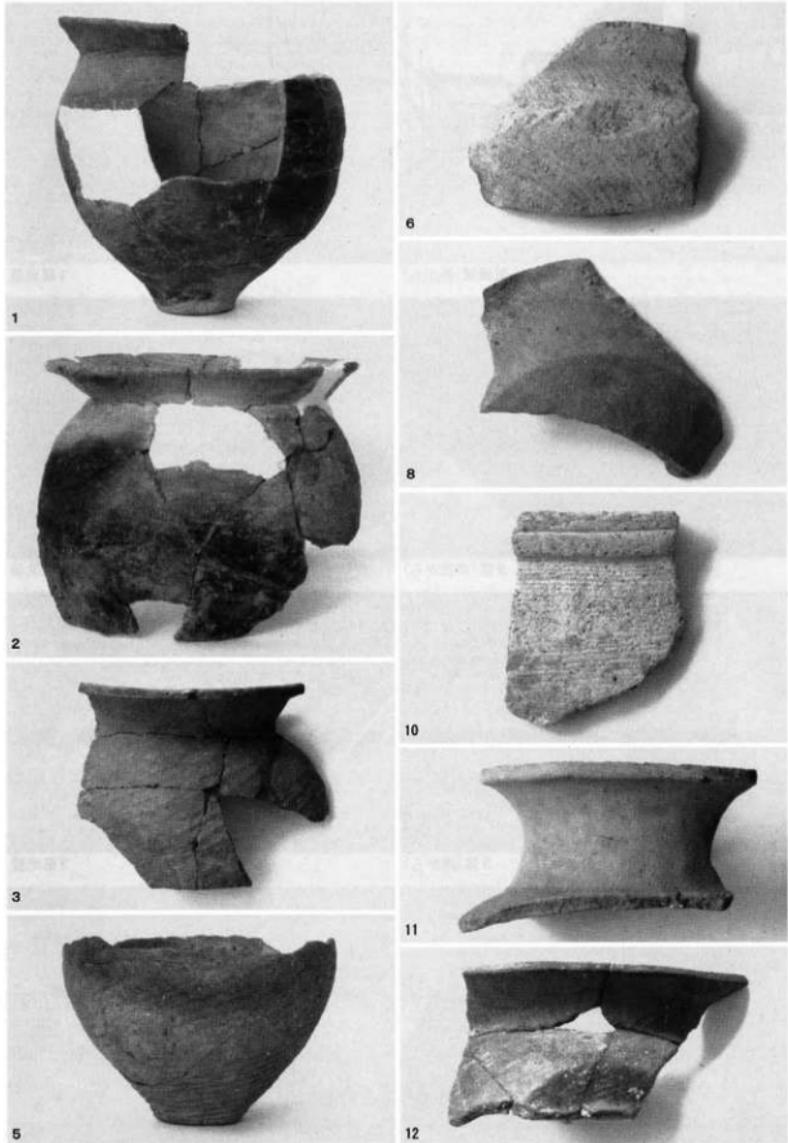
3区北壁



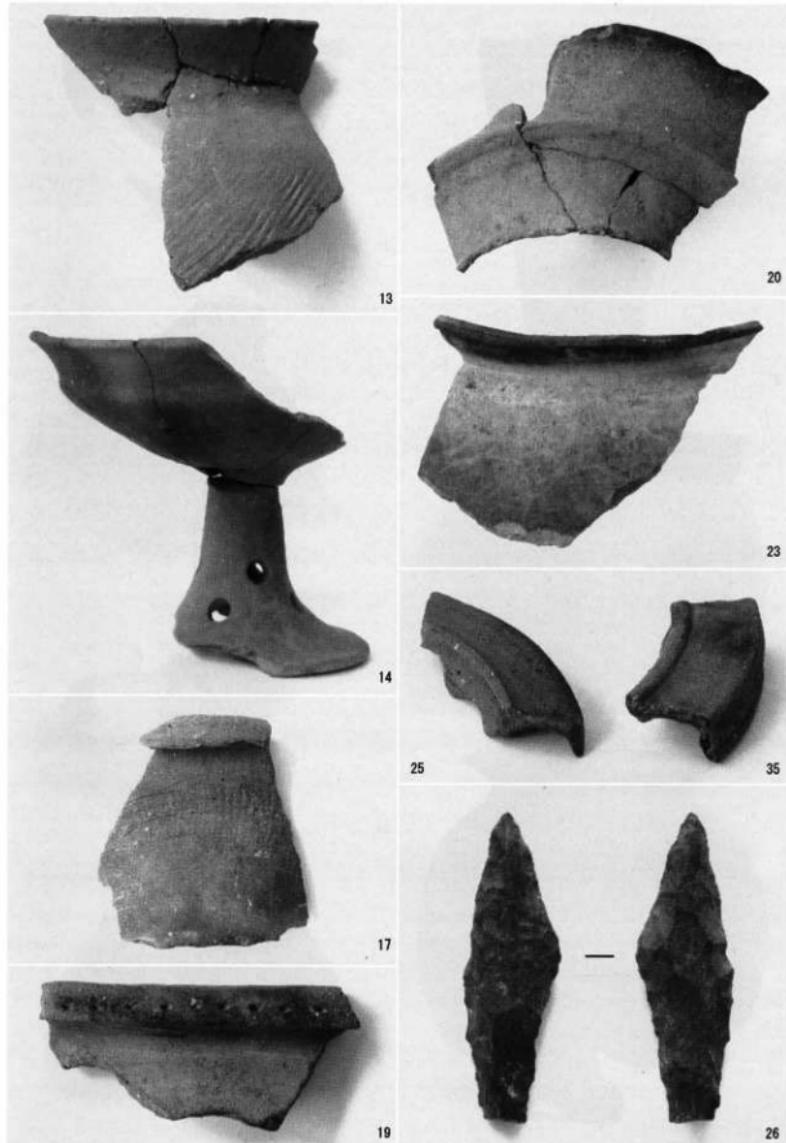
4区南壁



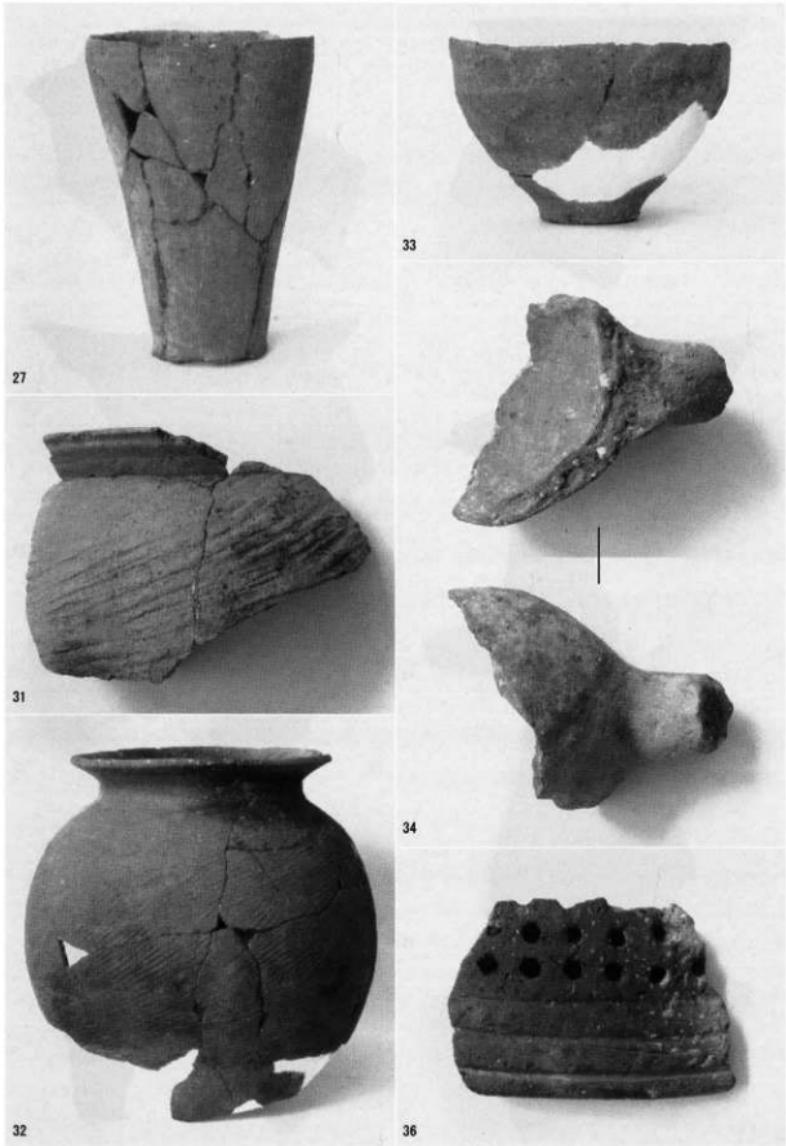
5区北壁



1区(1~6)、2区(8・10)、3区(11・12)



3区(13~19)、4区(20~26)



5区(27~36)

報告書抄録

ふりがな	あとべいせき とうごういせき	こおりがわいせき みずこしいせき	こさかあいいせき ゆげいせき	じょうほうじいせき
書名	跡部遺跡 郡川遺跡 小阪合遺跡 成法寺遺跡 東郷遺跡 水越遺跡 弓削遺跡			
副書名				
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告			
シリーズ番号	135			
著者名	I.木村健明、II.重・V.・VI.蛭田真一（編）、IV.高萩千秋			
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会			
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700			
発行年月日	西暦2011年3月31日			

ふりがな所取遺跡	ふりがな所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東經 度 分 秒	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
あとべいせき 跡部遺跡 (第41次調査)	おおさかふやおしあとべいせきのちょうとうちょうめ 大阪府八尾市跡部北の町1丁目	27212 64	34度 37分 11秒	135度 35分 14秒	20090223 ～ 20090304	約200	記録保存調査
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしきょうとうじょうめうちめない 大阪府八尾市教興寺4丁目地内	27212 60	34度 37分 02秒	135度 38分 00秒	20100705 ～ 20100712	約30	記録保存調査
こさかあいいせき 小阪合遺跡 (第44次調査)	おおさかふやおしあおさかまちょうとうめ 大阪府八尾市青山町4丁目	27212 40	34度 37分 11秒	135度 36分 45秒	20100317 ～ 20100330	約36	記録保存調査
じょうほうじいせき 成法寺遺跡 (第22次調査)	おおさかふやおしけいしむぢょうとうめ 大阪府八尾市清水町1丁目	27212 73	34度 37分 32秒	135度 36分 04秒	20100527 ～ 20100621	約504	記録保存調査
とうこういせき 東郷遺跡 (第70次調査)	おおさかふやおしほまちうらとうめ 大阪府八尾市本町7丁目	27212 37	34度 37分 49秒	135度 36分 02秒	20080303 ～ 20080401	約314	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第8次調査)	おおさかふやおしへとくわくちうとうめ 大阪府八尾市瓢箪川3丁目	27212 42	34度 37分 38秒	135度 38分 15秒	20051226 ～ 20060126	約356	記録保存調査
ゆげいせき 弓削遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしうちんちうとうみみこちうめ 大阪府八尾市弓削南町3丁目	27212 71	34度 35分 52秒	135度 36分 52秒	20100510 ～ 20100512	約84	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項		
跡部遺跡 (第41次調査)	集落	奈良～平安時代 中世	溝、ピット 新作溝	土師器、須恵器、黒色土器 土師器、須恵器、瓦器			
郡川遺跡 (第11次調査)	集落	弥生時代前期～後期 古墳時代前期	土坑、溝、落込み 溝	弥生土器、石器、縄文土器 布留式土器			
小阪合遺跡 (第44次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代初期～前期 中世 近世	包含層 土坑、溝、ピット、落込み ピット群 耕作溝	弥生土器 古式土師器、木鉢			
成法寺遺跡 (第22次調査)	集落	飛鳥時代 平安時代後期	水田 溝	土師器 土師器			
東郷遺跡 (第70次調査)	集落	飛鳥～奈良時代 平安時代前半 平安時代末～室町時代	包含層 落込み 井戸、土坑、溝、ピット	土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、須恵器、瓦器、木製櫛、木球、铁刀子、動物遺体（鳥）			
水越遺跡 (第8次調査)	集落	弥生時代後期 平安時代頃	溝、自然河川 自然河川	弥生土器			
弓削遺跡 (第11次調査)	集落	弥生時代中期～後期 古墳時代初期～前期	包含層 包含層	弥生土器、石器 古式土師器			
要約		跡部遺跡では奈良～平安時代の集落遺構、中世の生糞廐遺構を検出した。郡川遺跡では弥生時代、古墳時代前期の遺構が検出され、古墳時代前期の溝には土器集積が見られた。小阪合遺跡では弥生時代後期の包含層、古墳時代初期～前期の遺構から多量の土器が出土した。成法寺遺跡では遺跡内初となる飛鳥時代の水田を確認した。東郷遺跡では平安時代末～室町時代の遺構が検出され、密着する状況の井戸は特筆される。水越遺跡では弥生時代後期の甕や自然河川を検出した。弓削遺跡では弥生時代中期～後期、古墳時代初期～前期の包含層から多量の遺物が出土した。					

(財)八尾市文化財調査研究会報告135

- I 跡部遺跡 (第41次調査)
- II 郡川遺跡 (第11次調査)
- III 小阪合遺跡 (第44次調査)
- IV 成法寺遺跡 (第22次調査)
- V 東郷遺跡 (第70次調査)
- VI 水越遺跡 (第8次調査)
- VII 弓削遺跡 (第11次調査)

発行 平成23年3月
編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 ㈱近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

